

歴史家ニーブーア（1776-1831）の 経歴・家系・著作についてなど

児 玉 寛

- I. はじめに
- II. 経歴と家系について
- III. 著作について
 - 【補遺1】ベルリン時代の政治論文など
 - 【補遺2】リーバーとの出会い
 - 【補遺3】ニーブーアの古代史講義録
 - 【補遺4】『ローマ史』の英語訳
 - 【補遺5】講義録の英語訳
 - 【補遺6】『ニーブーアの生活の消息』の英語訳
 - 【補遺7】ニーブーアに関する学位論文
 - 【補遺8】ニーブーア没後百年の記念講演
 - 【補遺9】近時のモムゼン研究など

I. はじめに

1) アメリカの独立宣言が公布された1776年は、アダム・スミス『国富論』の刊行、エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史』の刊行開始の年である。そして、彼らからも学んだドイツの歴史家バルトルト・ゲーオルク・ニーブーア〔Barthold Georg Niebuhr : 1776-1831. 以下、Nと略す〕の生誕の年でもある。歴史家ニーブーア、芸術家ゲーテ〔Johann Wolfgang von Goethe : 1749-1832〕、法律家サヴィニー〔Friedrich Carl von Savigny : 1779-1861〕、この三者は互いに交流があった。しかし、Nと後二者と

では知名度に雲泥の差がある。そこで、三者の方法を比較する別稿に先だって¹、N論の研究動向を整理する論考を準備した。今回は、いわばそのイントロダクションとして、経歴や家系や著作に関するデータなどを後学のための文献案内の思いも込めて紹介するにとどまる。

たしかに、Nの『広辞苑』デビューこそ第五版〔1998年〕からと遅いが、わが国の一般読書界にとって、Nはまったくの無名であったわけではない。1966年に岩波文庫に収められた歴史家ランケ〔Leopold von Ranke : 1795-1886〕²の『自伝』〔初出・1890年〕に付された「解説」の冒頭では、「近代のいわゆる科学的歴史学とは十八世紀末に勃興した古代文献学の批判的方法 (*kritische Methode*) を歴史そのものに適用することによって成立

1 以下、斜体字とする「」内は直接の引用を、〈 〉内は大意を示す。また〔 〕内はすべて私による付記である。

本稿は、1991年7月のミュンヘンでこのテーマの広がりを図解して下さった Prof. Dr. juri. Dr. h. c. mult. Dieter Nörr [1931.2.20-2017.10.3] への追憶でもある〔Vgl., ders., Savignys philosophische Lehrjahre Ein Versuch, 1994, S. 341ff.〕。

このテーマについては、なによりも、① 木庭 顕『法存立の歴史的基盤』（2009年）67頁以下の指摘がアルファでありオメガである。すなわち、「Niebuhr (1776-1831)の仕事はこの（第三部たる）論考の前に直接立ちはだかる。凡そ『近代の歴史学』、実証主義、の祖であるばかりか、凡そ近代の占有理論の祖である Savigny (1779-1861) にそれを編み出す方法のみならず内容における実質的基盤を提供した。この Savigny の占有理論から凡そ『近代の法学』が始まるから、これに対しても Niebuhr は責任を有すると言っても過言ではない」〔なお、71頁〕。同様の見取図として、② 同「歴史学の認識手続と法学的思考」（初出・2001年）、同『現代日本法へのカタバシス』（2011年）280頁以下を参照。

2 本稿で言及する人物の生没年や略歴は、各国のオーソドックスな人名辞典や各種のWebサイトに拠るが、紙幅の制約から、立ち入った引用の場合を除いて、出典やサイト名やURLの掲出を省略した。

ドイツ語圏の人名辞典のうち基本は、Nissen, Heinrich, "Niebuhr, Barthold Georg" in: Allgemeine Deutsche Biographie 23, (1886), S. 646-661 [Online-Version] ; Walther, Geritt, "Niebuhr, Barthold Georg" in: Neue Deutsche Biographie 19, (1999), S. 219-221 [Online-Version] ; Wilfried Nippel, Niebuhr, Barthold Georg, in: Peter Kuhlmann et al., (Hg.), Der Neue Pauly Supplemente 6 Geschichte der Altertumswissenschaften, 2012, S. 883-887である。

したものであるが、その先鞭をつけたのがニーブール³であり、それを受け継いで大成したのがランケである」とされ、本文中でランケはNに何度も言及している⁴。そして同書の簡潔な訳注は、Nについて「1776-1831 コペンハーゲンに生まれ、キール大学に学び、デンマークの官吏となったが、1806年シュタインの要請によってプロイセン国に転じ財政問題を担当した。1810年辞職後ベルリンのアカデミーの会員としてこの年創設されたベルリン大学においてローマ史を講じた。それは1811-12年二巻のローマ史 *Römische Geschichte* として刊行され（第三巻はその死後1832年）文献学の批判的方法を始めて歴史に適用したのものとして劃期的な成果をあげた。1816-23年ローマ駐在公使、その後ボン大学で再び講義を行った」〔前掲書109頁以下〕と紹介する⁵。

また、イギリスの歴史家ゲーチ〔1873-1968〕が全28章のうちの第一章をNに当てた作品〔初版・1913年〕の改訂第二版〔1953年〕の改訳版が、「単なるせまい意味の史学史を越えた一つの精神史あるいは時代史ともいえるべきものであり、歴史学を専門としない人々も興味を持って読むことができる」という「訳者あとがき」を付して『筑摩叢書』に収められた⁶。さらに、

3 守矢健一「リュケアットのサヴィニ研究について」法制史研究64号（2014年）213-238頁（230頁注2）は、「ドイツの人名や地名の邦語表記について……できるだけ原語名の音を忠実に再現することを……試み……可能な限り *Duden Aussprachewörterbuch*, 6. Aufl. 2005における発音表記に従う」という立場に立つ。共感しつつも私としては、Dudenが採用する発音記号を近似的に反映させるカタカナ表記に疎いので、Dudenと慣行や感覚的な発音との狭間で中途半端な表記にとどまるしかない。

4 林 健太郎訳・125頁。参照：45、59、67、81、85頁。

5 もちろん、歴史家ブルクハルト〔Jacob Burckhardt：1818-97〕に当てられた『世界の名著 45〕〔1966年。解説・柴田治三郎〕や『世界の名著 ランケ 続11〕〔1974年。解説・林 健太郎〕でも、Nはその解説に登場する。

6 *George Peabody Gooch, History and Historians in the Nineteenth Century*, 2nd, rev. ed., 1953. 林 健太郎・林 孝子訳『十九世紀の歴史と歴史家たち』（上・1971年；下・1974年）。本書につき、ピーター・ゲイ〔鈴木利章訳〕『歴史の文庫』（原著・1974年。1977年）の巻末文献目録8頁は、「完全に時代遅れである

岩波文庫が二度にわたって提供するヘーゲル〔Georg Wilhelm Friedrich Hegel : 1770-1831〕の歴史哲学の講義⁷は、「ニーブールの『ローマ史』では、イタリアの民族についてきわめて学問的な論究がなされていますが、ただ、それとローマ史とのつながりが見えてこない。一般的にいて、ニーブールの歴史はローマ史の批判にすぎないと見るべきで、というのも、かれの『ローマ史』は歴史的な統一性のない論文のよせあつめだからです」と述べる⁸〔長谷川訳・下・100頁。武市訳・中・198頁〕。

これに対して、研究という観点からすれば、西欧歴史学の継受この方、Nへの関心は決して高くはない。もっとも詳細なのは、坂口 昂〔1872-1928〕が大正14〔1925〕年度の京都帝国大学文学部で史学史の一齣として講じたN論である⁹。そこでは、「ニーブールの特徴の一として、其の表現の方法の特徴的な事を指摘する必要がある。彼の文章は重苦しい。句読は長く、分詞を多く使ったので了解し難く、加ふるに全体の結構は物語と研究とが相混合参差してゐるので、思想の流れが中断杜塞されやすい。彼此の理由によりニーブールの歴史は読んで且理解しがたく、且美わしから

けれども、歴史叙述の古典的な世紀の包括的な概説書」と評する。

7 武市健夫訳『歴史哲学』（上・中・下、1971年）；長谷川 宏訳『歴史哲学講義』（上・下、1994年）。後者の底本や訳文に関する一つの評価として、遅塚忠躬『史学概論』（2010年）7頁注8を参照。

8 なぜNが「論文のよせあつめ」のようなスタイルを採用したのかについての私見は、Ⅲの3）の末尾を参照。なお、ヘーゲルによる具体的なニーブール批判〔武市訳・中・236頁以下；長谷川訳・下・135頁以下〕は、Nのローマ史論の核心のひとつたる農地法制問題に関わる〔後注61〕。

9 坂口の講義録は、アメリカ出張中の急逝後に『独逸史学史』（1932年）として編集された〔「第二篇第二章 ニーブール」150-201頁〕。ほかに、秀村欣二「近代ヨーロッパにおける古典古代史研究の発展」、石母田 正ほか編『古代史講座1』（1961年）68-117頁（93-97頁）がある。

なお、本稿でも、「古典古代（classical antiquity）とは、欧米の人々が古代ギリシア・ローマを指して用いる呼称である」（伊藤貞夫・本村凌二編『西洋古代史研究入門』（1997年）3頁）。これ以外の地域にも及ぶ場合は「古代史」を当てるが、厳密な区別はむづかしい。

ず……」と聊か嘆息げみである〔196頁以下〕。そしてこれは、ドイツ語圏のN論でも異口同音に見られる指摘である。しかし近時、読みづらいNの著作に内在して論じる論考や精度の高い史学史の文脈での検討も著わされ、研究状況は劇的に変わり始めた¹⁰。本稿は、Nの「伝記的な事柄」や著作などに関する日本語による情報の不足を補うにすぎない。

ところで、何をもって「伝記的な事柄」とするかは自明のようでそうではなく、議論し始めるときりがないのでその指標の詳細には立ち入らない。伝記を「ある個人が生まれてから死ぬまでのことを語るものだ」と定義し、その構成を「家系と出生、少年時代と青年時代、事績、死、という順序」に求める¹¹。本稿は、この意味での「伝記的な事柄」全般のうち、経歴を短く紹介しながら家系を辿る。その場合の家系とは、Nから遡るのではなく、下る。その理由は、Nの事績の啓蒙や顕彰に連綿として力を尽くしてきた末裔を含む「Nゆかりの人々」に知的遺産の継承のひとつのあり方を見るからである¹²。

しかし、「Nゆかりの人々」によって活字化されたNの著作・講義録・

10 ① 木庭 顕「政治的・法的観念体系成立の諸前提」、『岩波講座 社会科学の方法 第VI巻 社会変動のなかの法』（1993年6月）229-260頁；② 同「Savignyによる占有概念の構造転換とその射程」、海老原明夫編『法の近代とポストモダン』（1993年10月）167-191頁；③ 守矢健一「初期サヴィニーの法学方法」、国家111巻8号（1994年）1208-1268頁〔とくに1227頁以下〕；④ 熊谷英人「ある政治史の出発——B・G・ニーブーアのローマ王政論」、『政治思想研究 第15号 国家と圏域の政治思想』（2015年5月）126-158頁；⑤ 同『フランス革命という鏡 十九世紀ドイツ歴史主義の時代』（2015年10月）。

11 A. モミリアーノ著・柳沼重剛訳『伝記文学の誕生』（原著1971年。1982年）52、55頁。なお、わが国では馴染みが薄いと思われる著者モミッリャーノ〔Arnaldo Momigliano〕につき、木庭・前注10の①・250頁注（10）のほか、本村凌二「モミリアーノ（アルナルド・ダンテ）1908～87」、尾形 勇・樺山紘一・木畑洋一編『20世紀の歴史家たち（4）世界編 下』（2001年）253-265頁を参照。

12 Nの息子Marcus Carsten Nicolaus von Niebuhrの詳細な家系図が、2007年に運用を開始した家系図専門有料サイト〔Geni〕によって提供されているようである。本稿は、主に2014年末頃までのメモ類に拠る。

書簡などについて言えば、その成立事情にいくつかの疑問がある。事は、作品の信頼度に関わる。また、(版の改訂や翻訳など)作品の相互関係の確定は、Nの見解について発展史的方法を採る場合はもちろん、その完成段階に注目する場合でも、不可欠である。本稿はしばしば読者を辟易させるであろう些事にわたるが、Nの作品にまつわる疑問についての暫定的な調査報告としてご海容いただきたい。

2)「伝記的な事柄」から始めるのは、海外のNの研究者が一様にNの「伝記的な事柄」を重視していることによる。なぜNについて「伝記的な事柄」が重視されるのか。その背景には、「Nは、学者〔Gelehrten〕同士では政治家〔Staatsmann〕として、政治家同士では学者として振る舞った」と言われるように¹³、政治家N(国家の舵取り役・国事に携わる人という意味でのStaatsmann)の事績と歴史家Nによる歴史記述との関係に対する関心があることは、たしかである。たとえば、この観点からの初めてのモノグラフ¹⁴は、Nの政治的価値観が過去についての彼の言説に与えた影響を、PragmatismusとPräsentismusという道具概念を用いて同時代の出来事や時代精神の関数として分析する。しかし、より根底には、その事績を知るに値する人物の評価における「生活ないし人生〔Leben〕」と「作品・

13 この言葉は、Wilhelm von Humboldt [1767-1835] の名言として頻繁に引用されるが、彼の著作や書簡には見つからないとされる。③ Heinz Berthold, B. G. Niebuhr und J. W. Goethe über die Geschichte Altroms, 後注142・S. 569-579 [S. 571 Fn. 9] によれば、外交官で歴史家のWilhelm Dorow [1790-1845] の記憶に由来する〔後注103〕。なお、NのいうStaatsmannを、熊谷・前注10の④・133頁は「統治者」と訳す。

14 Seppo Rytkönen, Barthold Georg Niebuhr als Politiker und Historiker Zeitgeschehen und Zeitgeist in den geschichtlichen Beurteilungen von B. G. Niebuhr, Helsinki 1968, 378 S. 本書は、ゼッポ・リトケーネン [1940-2004] によるトゥルク大学〔Uni. Turku〕の学位取得論文であり、フィンランド学術アカデミーの叢書として出版された。その評価は続稿に譲るが、デンマーク政府時代のNに関する未公刊資料などを用いた本書〔Heuss・S. 31〕には、「〔この時点までの〕N研究に一応の締め括りが付けられたと言えよう」という寸評も見られる〔R. Werner・後注96・S. 365 Fn. 1〕。

著作ないし業績〔Werk〕』との関係という問題があるように思われる。

芸術家については、「生活あってこそその作品」という命題が成り立つのかも知れない。たとえば、傑作と評されるゲーテ伝の著者は、一時期の時代思潮の影響もあるが、「ゲーテの場合、些細な諸事実はわたしたちに人間ゲーテのみならず詩人ゲーテをも解き明かしてくれる……。そして彼の作品の数々を理解しようとするならば、彼の実人生から出発して作品に近づいていくというのが、もっとも確実に誤謬から身を守る方法なのである」と述べる。しかも、すでにゲーテ本人が、自分の戯曲を評したフランス人批評家について、「彼は、自分の職業を根底から知りつくしていて、作者と作品の血縁関係を示し、さまざまな文学作品を詩人のさまざまな生活時期に結実した多様な果実と判断している」と述べて、この立場を先取的に支持していた¹⁵。

これに対して学者については、「評価を決めるのは『作品』であって『生活』ではない」という命題が潜むように思われる。そうであればこそ、N研究の大著を1981年に上梓した古典古代史の碩学ホイス〔1909-95〕は、Nの「業績」を——生前に刊行された『ローマ史』という僅か二巻の——「著作」でもって描くことはできず、「実生活」こそが「業績」であるとも言うべき、学者らしからぬ例外的な事情がある、と指摘する。したがって、「彼の伝記のいかなる事柄が彼の学問の内容を形成しているのかとい

15 アルベルト・ビルショフスキ〔Albert Bielschowsky : 1847-1902〕（高橋義孝・佐藤正樹訳）『ゲーテ その生涯と作品』（底本1928年。1996年）iii頁所収の「初版まえがき〔1895年〕」。また、1827年5月3日のエッカーマン〔Johann Peter Eckermann : 1792-1854〕との対話〔山下 肇訳『ゲーテとの対話（下）』（岩波文庫・1969年）173頁〕。

もちろん、『作品』と『生活』との関係づけは程度ものであろう。この時代思潮のもとにいた漱石は『文学評論』〔初出・1909年。全集第15巻・1995年・250頁〕で、「例へば病気の苦痛を訴へた詩があるとすると、其の作家の伝記を見て、何年何月風邪を引いたことがある、それだから斯様な詩を作つたのだと論定したがる。……こんな馬鹿氣た弊に陥るものである」と嗤う。

う問題に考察を向けざるをえないのも、無理はない」¹⁶のである。

3) ところで、ホイースが「学者らしからぬ例外的な事情」があると査定した歴史家の第一号は、Nではなく、モムゼン〔Theodor Mommsen : 1817-1903 ; グーチ・前注6の下・213頁以下〕であった。モムゼンの没後50年に際会した彼は、「モムゼン論は無数にあるが、彼の人物と作品を事実と歴史に照らして分析したものが未だに書かれていないことは、専門家のあいだで知らぬ者はいない」との立場から取り組んだモノグラフを1956年に上梓した¹⁷。1996年の同書の復刻版に付されたローマ史家ブライケン〔Jochen Bleicken : 1926-2005〕による（見開き半頁だけの）前書きは、「〔この復刻は〕本書が古典古代学にとって今日まで垂涎的であることによる。事実、モムゼンに関するこの簡潔な叙述は、彼の時代の精神的および政治的な歴史を背景に置いており、この偉大な学者の人物〔Person〕ならびに学問上の業績〔Werk〕の分析の決定版とは言えないまでも、最良のもののひとつである」と述べる。

こうして、モムゼンについての最大公約数的な評価、すなわち、「ニールブルによって指し示された方向に従って、古典学における批判的リアリズムの時代を切り開いた。……その業績によって古代ローマについてのわれわれの知識を、比肩するものがないほど増大させた。……学者でありつつも、また言葉の本来の意味での教授でありつつも、みずからの政治的情熱をけっして失わなかったし、『ローマ史』(Römische Geschichte)¹⁸を、自己の自由主義的国民主義的理想に貫かれた政治教育学的作品として結実させた」¹⁹という聊か単純化された評価が定着する。

16 Alfred Heuss, Näheres zu Niebuhr, 後注22の③・S. 4.

17 Alfred Heuß, Theodor Mommsen und das 19. Jahrhundert, 1956, ND 1996, S. 1.

18 長谷川博隆訳『ローマの歴史』。I (2005年)、II (2005年)、III (2006年)、IV (2007年)。モムゼンについては、なによりも各巻末尾の「訳者解説」を参照。

19 A. ヴーハー／望田幸男訳「テオドル・モムゼン」、H. -U. ヴェーラー編／ド

4) ホイスのモムゼン論が一つの契機となって、「学者の生活と作品」について、ある種の方向性が形成される。ここでは、主として史学史の観点から第二次大戦後のドイツの古代史学を領導した歴史家のひとりカール・クリスト〔1923-2008〕が、研究・教育の動向を総括する論考を適宜掲載する雑誌に寄せた1969年の学会報告を引用しよう。すなわち、「古典古代史の〔ホイスのモムゼン論に始まる〕以上の近時の研究動向からして、課題は、まずもって、道標となっている〔maßgebend〕古典古代史家の生活と作品を探究し、その個人的運命や政治的関与を明らかにし、人格形成および歴史に対する見方やテーマの選択に対する精神的、宗教的、社会的、政治的影響を研究することでなければならない。分析や整理のための要素としてさらに加わるのは、作品における重点や評価、方法と歴史像、つまるところ、学問と社会と政治からの影響である」²⁰。さらに彼は、哲学者や詩人や教科書類にみられる古典古代史像の研究も必要であり、それらを踏まえて初めて、研究対象と現在の研究者との間の距離、精神的評価と政治的評価との相互依存関係、学問的評価が明らかになるとする。もともと、以上の要請に十全に応えたN論は、いまだ提供されていない。

5) 本稿では、もっかのN論の基本文献を以下の略称で引用する。

① **Briefe AF** : *Dietrich Gerhard/William Norvin* (Hg.), *Die Briefe Barthold Georg Niebuhrs* Bd. I 1776-1809, Berlin 1926, 542 S. ; Bd. II 1809-1816, Berlin 1929, 691 S. [ND 2010]

② **Briefe NF** : *Eduard Vischer*, (Hg.), *Barthold Niebuhr, 1816-1830*. Bd. I-1, *Briefe aus Rom* (1816-1823), Bern 1981, 558 S. ; Bd. I-2, *Briefe aus*

イツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家 第1巻』（原著・1971年。1982年）195-229頁（195頁）。なお、没後100年や生誕200年を契機とする近時のモムゼン研究〔文献につき補遺9〕におけるNに関する評価は、別途検討を要するN論のテーマである。

20 *Karl Christ*, *Zur Entwicklung der Alten Geschichte in Deutschland*, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Bd. 22, 1971, S. 577-593 (S. 592).

Rom (1816-1823), 1981, 445 S. ; Bd. II, Briefe aus St. Gallen. Bonn. Berlin (1823-1825), 1982, 515 S. ; Bd. III, Briefe aus Bonn (1826-1830), 1983, 643 S. ; Bd. IV, Briefe aus Bonn (Juli bis Dezember 1830), 1984, 268 S.

③ **Heuss** : *Alfred Heuss*, Barthold Georg Niebuhrs wissenschaftliche Anfänge Untersuchungen und Mitteilungen über die Kopenhagener Manuscripte und zur europäischen Tradition der lex agraria (loi agraire), Göttingen 1981, 568 S.

④ **Walther** : *Gerrit Walther*, Niebuhrs Forschung, Stuttgart 1993, 638 S.

⑤ **Wiesehöfer編** : *Josef Wiesehöfer, Stephan Conermann* (Hg.), Carsten Niebuhr (1733-1815) und seine Zeit Beiträge eines interdisziplinären Symposium vom 7.-10. Oktober 1999 in Eutin, Stuttgart 2002, 453 S.

⑥ **Wirth編**²¹ : *Gerhard Wirth* (Hg.), Barthold Georg Niebuhr Historiker und Staatsmann Vorträge bei dem anlässlich seines 150. Todestages in Bonn veranstalten Kolloquiums 10.-12. November 1981, Bonn 1984, 369 S.

①・②以外は、前述の潮流のもとで登場した。**Heuss**の大著や**Wirth編**に所収の論考が**Briefe AF**しか利用できなかったのに対して、**Briefe NF**や旧東ドイツ所蔵資料なども利用してN論のテーマをほぼ満遍なく拾い上げたのが、1959年生まれの史学史研究者の学位論文**Walther**である²²。それ

21 同書所収の、*Doris Pinkwart*, Barthold Georg Niebuhr (1776-1831) Staatsmann und Historiker Katalog zur Ausstellung in der Universität Bonn vom 13. November 1981 bis 27. Februar 1982, S. 241-334は、**Wirth編・Katalog**として引用する。

22 *Ernst Schulin*, Neue Beiträge zur Niebuhr-Forschung, Zeitschrift für historische Forschung, Bd. 11, 1984, S. 69-74は、HeussとBriefe NF Bd. I の書評である。

Heussの大著を相異なる角度から要約あるいは敷衍した論考を含む彼のN論として、① Vom Ursprung Niebuhrscher Geschichtsschreibung, 1984 [Wirth編・S. 9-27] ; ② B. G. Niebuhr: Von der »Rezeption« zur Wissenschaft, in: *Wolfgang Schuller* (Hg.), Antike in der Moderne Heft 15, 1985, S. 105-126 ; ③ Näheres zu Niebuhr. Zur 150. Wiederkehr seines Todestages am 2. Januar

らの内容の検討は続稿に譲る。また、Wiesehöfer編は、若きNについての枕詞「カルテンのご子息」にいうNの父に焦点を当てたものであり、幼年期から思春期までのNについても多くの知見を提供する。なお、近時のN論を牽引する研究者については後注67を参照。

II. 経歴と家系について

1) Nの出生地は、デンマークのコペンハーゲンである。これは、1760年に父カルステン〔Carsten Niebuhr : 1733.3.17-1815.4.26〕がそこに移り住んだことによる。18世紀中葉のデンマーク²³は、フレゼリク5世〔Frederik : 1723-66。在 : 1746-66〕の治世である。彼は、「啓蒙期絶対君主」でありながら統治能力に欠けていたと評されるが、国政は有能な政府幹部によって安定をみていた。ドイツ人に対しても官途を開いており、また、国内外に向けた文化事業の発信などにも力を入れていた²⁴。カルステンの移住は、このような政策と深くかかわっている。

カルステンに関する従来の第一級の資料は、彼が亡くなった翌年6月にNが脱稿して雑誌に発表した『カルステン・ニーブーアの生涯』である²⁵。

1981, in: *Antike und Abendland*, Bd. 27, 1981, S. 1-33 ; ④ Niebuhr und Mommsen Zur wissenschaftlichen Stellung Theodor Mommsens, in: *Antike und Abendland*, Bd. 14, 1968, S. 1-18 ; ⑤ Barthold Georg Niebuhr 1776-1831, in: *Hermann Heimpel* (Hg.), *Die großen Deutschen Deutsche Biographie*, Bd. 5, 1960, S. 208-219がある。

23 橋本 淳編『デンマークの歴史』（1999年）113-116頁〔井上光子〕；*Carsten Jahnke*, *Geschichte Dänemarks*, 2017, S. 168-170。

24 *Michael Bregnsbo*, *Einheitsstaat statt Konglomeratstaat. Dänische und deutsche Identitätsmuster im Dänemark des 18. Jahrhunderts*, Wiesehöfer編・S. 47-62 ; *Heinrich Detering*/*Anne-Bitt Gerecke*/*Johan de Mylius*, *Deutsch-dänischer Kulturtransfer im 18. und 19. Jahrhundert*, 2001。

25 *B. G. Niebuhr*, *Carsten Niebuhrs Leben*, *Kieler Bätter* 3 (1816), S. 1-86。Nは、この論考を17年にキールで単行本として出版し、補正を施して28年の『小論集』に収録する〔後注98・S. 3-82〕。その後、ローレンツが1918年に1817年版

しかし現在では、新資料を利用した第三者の眼によるカルステン像が提示されつつある²⁶。Nはこの父親の人脈を介して様々な親交を織りなすことになるにもかかわらず、従来のN論ではこの人脈に関する情報が不足しているので、本稿では「Nゆかりの人々」の一環としてやや立ち入って紹介する。

2) 父カルステンは、1733年に、エルベ河口の田園地帯に位置し当時は上流のハンブルクの支配下にあったハデルン〔Hadeln〕で、16世紀前半にまで遡る自営農の一人息子として誕生した。Nは、その土地柄を自由の気性に富んだものとして誇っている〔CNL=3=223〕。生後まもなく母を亡くし父も49年に他界して親戚のもとに引き取られ十分な教育を受けられなかった彼は、ハデルンでは境界争いのたびに近隣の測量士に依頼していた不便を解消すべく測量技術の習得を志し、55年、数学教師のいるハンブルクに移る。当時の中等教育機関であったラテン語学校を満身に終えていなかった彼は、学習塾でギリシア語は手つかずのまま約8ヶ月間ラテン語を学んだ後、大学進学準備校で数学教師ビュッシュ〔後注50〕の教えを丸一年受け、57年にハノーファー選定侯領のゲッティンゲン大学〔37年開設〕に進学して、さらに数学の学修を深める。

他方、母クリスティアーネ・ゾフィー〔Christiane Sophie, geb. Blumenberg : 1742-1807〕は、国王フレゼリク5世の侍医でザクセンのゴスラル〔Goslar〕出身のブルーメンベルク〔Georg Blumenberg : 1699-1745〕の娘であり、73年にカルステンと結婚する。コペンハーゲン在住で上流層出身のゾフィーを農民層出身のカルスンと結び付ける機縁は、20年ほど前のゲッティンゲン大学の二人の教授とデンマーク国王に遡る。

を底本としつつ文法的な補正を施したり約100行分を省略してアンソロジーに再録した〔後注140・S. 223-275〕。本書をCNLとして1828年版と1918年版の頁数を付して引用する。

26 現在の基本文献は、*Dieter Lohmeier*, Carsten Niebuhr Ein Leben in Zeichen der Arabischen Reise, Wiesehöfer編・S. 17-43であり、以下の記述はこれに拠る。

3) 1753年、ゲッティンゲンの神学部教授で古代オリエント学にも関心があったミハエーリス〔Johann David Michaelis: 1717-91〕が、（現在では探検史上最初の学術的な調査と評されている）探検隊をアラビア半島方面に派遣する計画をヨーロッパ各国にもちかけて支援を募る。彼は、モンテスキューの『法の精神』〔1748年〕の方法に倣って、モーセの立法をイスラエルの民が置かれていた風土や歴史的条件のもとで考察することを企て、その資料収集をこの探検隊に期待したのである²⁷。これに賛同したデンマーク国王が外務大臣ベアンストーフ伯爵〔Johann Hartvig Ernst Bernstorff: 1712-72〕に探検隊の派遣を指示し²⁸、話は大きくなって自然科学系

27 Michaelisが聖書の記述の信憑性を聖書それ自体によって自足的に担保しようとする研究方法に対してヘブライの遺跡による検証を試みたことの史学史上の位置につき、*Arnaldo Momigliano, Ancient History and the Antiquarian, Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 13, 1950, p. 285-315 (p. 298) = *idem, Alte Geschichte und antiquarische Forschung, in: Arnaldo Momigliano, Ausgewählte Schriften Bd. 2 Spätantike bis Spätaufklärung, Hg. von Glenn W. Most unter Mitwirkung von Winfried Nippel und Anthony Grafton, Stuttgart 1999, S. 2-36 (S. 16)*. もっとも、カルステンが持ち帰った学術的成果が発案者の意図に適っていたかについては、議論がある。

Michaelisと「ゲッティンゲン学派」につき、岡崎勝世『キリスト教的世界史から科学的世界史へ ドイツ啓蒙主義歴史学研究』（2000年）115頁以下を参照。著者のいう同書の「落とし子」（講談社新書三部作）として、①『聖書vs世界史 キリスト教的歴史観とは何か』（1996年）、②『世界史とヨーロッパ ヘロドトスからウォーラステインまで』（2003年）、③『科学vsキリスト教 世界史の転換』（2013年）がある。

28 Wiesehöfer編は、この探検隊について1999年にドイツ連邦共和国シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州東ホルシュタイン郡の郡庁所在地オイティン〔Eutin〕で開催されたドイツとデンマークの研究者によるシンポジウムでの18本の報告を収める論集である〔*Oriens et Occidens Studien zu antiken Kulturkontakten und ihrem Nachleben, Bd. 5*〕。同じ叢書のBd. 22として、18世紀から19世紀前半のデンマーク改革を研究するアメリカ人歴史家によるカルステン論がある〔*Lawrence J. Baack, Undying Curiosity: Carsten Niebuhr and The Royal Danish Expedition to Arabia (1761-1767), 2004*〕。

ほかに、森 貴史「自然研究者たちの異文化——フォルスターとニーブールの探検旅行記における非ヨーロッパ世界への視線——」早稲田大学ドイツ語ドイ

の人材も加えることになる。そこには、精密な地図の作成が貿易に資するであろうとの思惑があったらしい。58年夏、ミハエーリスから人選を依頼された同僚の数学教授ケェストナー〔Abraham Gotthelf Kästner : 1719-1800〕は、よく知る学生カルステンに声をかける。彼は、アラビア語や地図作成に必要な天文学などを学ぶための1年半の猶予とその間の生活費の支弁を条件にこれに応じる。デンマーク政府はこれを容れ、猶予明けの60年にカルstenは工兵隊少尉〔Leutnant〕としてコペンハーゲンに赴任する。翌年、彼を含めて大学教授など6名からなる探検隊²⁹が出発する。うち5名は途中マラリアで没したが、カルstenはボンベイまで足を延ばしたあと引き返す。そして、ペルセポリスの楔形文字碑文の転写や地図などの学術的成果を携えてただ一人67年に生還する。

帰国後の彼は、翌年に大佐に昇進したほかJ・ベアnstーフを介して政府高官などの知遇を得る。そのなかには、ベアnstーフの甥でデンマーク官吏時代のNの上司となる有力政治家〔Andreas Peter Bernstorff : 1735-97. CNL=11, 36=228, 246〕やドイツの国民的詩人クロプシュトックが含まれる。また、自由時間を賜与されたものの費用など多大な自己犠牲を払って刊行に漕ぎ着けた旅行記〔1772年～78年。一部は没後の刊行〕

ツ文学会編Waseda Blätter, 7号(2000年) 54-69頁 : *Julius Burghardt*, Reisen im Geist der Aufklärung. Eine kritische Beurteilung von Carsten Niebuhrs "Reisebeschreibung nach Arabien", 2013 [Studienarbeit aus Göttingen] がある。この探検隊の帰還250年を記念して、*Paul G. Chamberlain*, Carsten Niebuhr and the Danish Expedition to Arabia, *AramcoWorld* Vol. 69 No. 1 January/February 2018, p. 18-25が、多彩な地図や持ち帰り品を写真版で紹介する。

- 29 隊員は5名とされてきたが、カルstenほか、CNL=18ff.=233ff.をはじめ多くの文献が挙げるFrederik Christian v. Haven〔デンマーク人文献学者〕、Petrus Forsskal〔リンネの弟子でスウェーデン人博物学者〕、Georg Wilhelm Baurenfeind〔ドイツ人画家〕、Carl Christian Cramer〔ドイツ人医師〕に、さらにLars Berggren〔スウェーデン人従者〕を加えた6名である。

は、さいわい特に海外で驚きをもって迎えられ³⁰、彼は一躍有名人となり、その人脈はヨーロッパ中に広がる。そして彼は、73年にゾフィーと結婚し長女〔Christiane : 1774-1849〕³¹とN〔Barthold Georg : 1776-1831〕に恵まれる。

4) 現在の版図で言えば、ドイツ連邦共和国から北に向ってデンマーク王国に伸びるユラン〔ユトランド〕半島の南半分のドイツ領がキールを州都とするシュレースヴィッヒ・ホルシュタイン州である〔Land Schleswig-Holstein. 以下、それぞれ、Sch., Hol. と略す〕。デンマーク寄りに位置する北部がSch. であり、ハノーファー寄りに位置する南部がHol. である。両者の帰属はウィーン会議以降1848年の三月革命を経て66年のプロイセン編入に至るまでたびたび政治問題化するが、それまで両者はデンマークの領有下にあった。

遡れば中世以降、Sch. が公国〔Herzogtum〕としてデンマーク王のもとにあって女系相続を認め、これに対しHol. は侯国〔Fürstentum〕として神聖ローマ帝国に属して男系相続に限定し、それぞれがこの相続法に則って自国の第一次的な支配者を戴いていた。また、地理的要因からも、北側のSch. ではデンマーク系住民、南側のHol. ではドイツ系住民が優勢であった。15世紀中葉、デンマークが国王の身内を両者の相続人に据えようと画策したのに対して、両者の貴族は同盟を結んでデンマークと交渉し、両者に共通の一人の支配者を両者とデンマークとのその都度の合意によって選定することを認めさせ、この選挙協約を文書にさせた。1460年、デン

30 Cf., *Edward Gibbon*, The History of the Decline and Fall of the Roman Empire, vol. III, Edited by *David Womersley*, 1994. Bibliographical Index p. 1246 [このウマズリー版につき、中野好之訳『ローマ帝国衰亡史10』（ちくま学芸文庫版・1996年）415頁を参照]。

31 *Reimer Hansen*, Christiane Niebuhr – Beraterin und Helferin aller Bedürftigen: die Tochter Carsten Niebuhrs im geschlechtergeschichtlichen Kontext der Familie, in: Dithmarschen : Landeskunde, Kultur, Natur (2012), S. 2-16 [未見]。

マーク王が最初の共通の支配者として推戴され、1475年にはHol. の公国への格上げがヨーロッパ各国によって承認される。そして、両者と1660年代に一気に世襲制絶対王政を確立したデンマークとの間で、この選挙協約体制のもと支配と自治、併合と離反をめぐって綱引きが繰り返される³²。また、デンマーク政府は、ドイツ系住民を管轄する部局を設けてその住民を「デンマークのドイツ臣民」として処遇した。

5) 1778年、カルステンはコペンハーゲンを離れてHol. のメルドルフに赴任する。その政治的背景は、つぎのようである³³。探検隊を派遣したフレゼリク 5 世はカルステンが生還する前年に他界し、その後を継いだクリスチャン 7 世〔1749-1808。在：1766-1808〕は放蕩生活に明け暮れ精神的に病んでいたため、王政が危機に陥る。国王夫妻が寵愛するドイツ人医師ストルーエンセ〔Johann Friedrich Struensee：1737-72〕が、70年から約三年間、政府の実権を掌握する。しかし、72年1月のクーデターによって、国王の継母である皇太后とその息子の皇太弟が、ストルーエンセを処刑し神学者グルベア〔Ove Høegh-Guldberg：1731-1808〕に実権を握らせる。これに対して、グルベアによって政務から遠ざけられていたドイツ系貴族たちが擁する皇太子〔1768-1839〕が、84年4月のクーデターによって摂政の地位に就き〔在：1784-1808〕、政局は漸く安定に向かう〔国王在位：1808-39〕。

カルステンは終始局外にいたらしいが、後ろ盾であった J・ベアンストーフがストルーエンセによって罷免されたまま亡くなり〔72年2月〕、また、ドイツ系勢力の政治的抑圧を狙ったグルベアによる76年の「公民権法」によってカルステンも、その名声にもかかわらず冷遇され地方の軍施設

32 前注23・C. Jahnke・S. 130f.; Peter Brandt, Von der Adelsmonarchie zur königlichen "Eingewalt" Der Umbau der Ständegesellschaft in der Vorbereitungs- und Frühphase des dänischen Absolutismus, HZ 250, 1990, S. 33-72.

33 前注23・橋本編・120頁以下〔井上光子〕: C. Jahnke, S. 172ff.

への配置転換を命じられる。こうした身辺事情に反発した彼は、軍務を辞するのみならずコペンハーゲンをも離れる。彼が就いたのは、その出身地近く、Hol. の北西端に位置し北海を望む南デイトマルシェン〔Süddithmarschen〕郡のメルドルフ〔Meldorf〕³⁴に置かれた郡庁の法律顧問官にして郡書記〔Justizrat und Landschreiber〕³⁵である。

6) カルステンが妻子を連れて赴任したメルドルフは、コペンハーゲンにもハノーファーにも遠く、N論は異口同音に「辺鄙な」という類いの形容詞を付ける。ところが、カルステンの着任から数年を経ずして、この地理

34 カルステンの亡骸は、同郡のFieler Moorという自然保護区に埋葬された〔後注145〕。Nは、2歳からキール大学に進学する18歳までの多感な時期を過ごしたこの地を後に「故郷 Heimat」と呼ぶ。定説と言える見解として、河上倫逸『ドイツ市民思想と法理論』（1978年）500頁注（63）から不正確な文言を省いて引用しておく。すなわち、〔主著『ローマ史』での〕「ニーブールの関心は、ローマ民族の初期状況の探究に向っており、その結果、健全な農民階級の意義に目覚めた彼は、…… デイットマルシェン …… の『農民共和国』と好んで対比しつつ、ローマを農民達の世界として描き出していた。恐らくそうしたニーブールの論述の中に、現在の諸制度を介して過去の世界へと接近するという同様の問題関心をマルクスは見出したことであろう」。

自由への愛と自治能力を備えた『農民共和国』という評価は、この地方に生まれた年代記作者ネオコルス〔Johann Adolphi Köster, genannt Neocorus : ca.1550-1630〕の『デイトマルシェンの地方年代記』に由来しているようである。1812年にキール大学に赴任し27年に同書を完璧な形で出版した歴史家につき、ライマー・ハンゼン「フリードリヒ・クリストフ・ダールマン〔Friedrich Christoph Dahlmann : 1785-1860〕」、前注19・『ドイツの歴史家 第1巻』・11-68頁（34頁以下）；熊谷・前注10の⑤・第Ⅱ部（110頁以下）を参照。ちなみに、ローマ公使に決まったNは同郷の彼を秘書官として連れて行くつもりであったが断られている〔Briefe AF Bd. II, S. 645 Fn. 1〕。

ここでいうマルクス〔Karl Marx : 1818-83〕とは、カール・マルクス著/手島正毅訳『資本主義的生産に先行する諸形態』（国民文庫版・1963年）15、54頁の「ローマ的所有形態（古代奴隸制）」に関するNからの引用を指す〔後注61を参照〕。

35 主たる職務は徴税であったようである。旧東ドイツの文書館所蔵のN遺稿を利用した論考、① Heinz Warnecke, Leben und Wirken Barthold Georg Niebuhr, 後注142・S. 541-552（S. 541）は、「国王のかなり高位の官吏〔höherer königlicher Beamter〕」とする。

的隔たりを補って余りある情報網が開ける。

この情報網の要となる二人は、いずれもドイツ文学史に名を留める著名人であり、一方の妻を介して義兄弟の関係にある。カルステンは、50歳に手が届こうとする81年と翌年に彼らと順に出会い家族ぐるみの親交を結ぶ。ひとりは11歳年下でメルドルフ生まれのボイエ〔Heinrich Christian Boie : 1744-1806〕、もうひとりは18歳年下でメクレンブルク生まれのフォス〔Johann Heinrich Voß : 1751-1826〕である。二人は、18世紀後半に仏・独の各地で詩神ミューズを愛でる者たちが誌名の一部に「文芸年鑑」という名を冠して世に送った雑誌の現役の編集者であった。ゲーテは、『詩と真実』第12章で次のように回顧する。

「文学愛好者のあいだで、すでに、迅速に連絡がとれるようになっていた。『文芸年鑑〔die Musenalmanache〕』があらゆる若い詩人を、諸々の雑誌が詩人と他の著作家とを結び合した。…… 極端なまでに互いにそそのかし合い、かりたて合うことが、各自にそれぞれ好ましい影響を与えた。…… なんのわだかまりもなく、なんらかの理論的指導者もなく、多くの青年によって、各自の生まれながらの性格にしたがって、なんらの顧慮もなく行なわれたのであったが、そこからあの有名な、毀誉さまざまな文学時代〔シュトゥルム・ウント・ドラング〕が生まれたのであった」³⁶。

ボイエは、イエーナ大学で法学を修めた後、1769年にゲッティンゲンに移り、そこで知り合ったゴッター³⁷と70年に『ゲッティンゲン文芸年鑑

36 山崎章甫訳・岩波文庫版・第三部（1997年）123頁。翻って約半世紀後の日本の状況について、木庭 顕「森鷗外と『クリチック』」、同『憲法9条へのカタバシ』（2018年）128-161頁を参照。

37 Friedrich Wilhelm Gotter〔1746-97〕は、ゲッティンゲン大学で法学を修め、演劇や詩に関心をもちながら67年からヴェツラルの帝国最高法院〔Reichskammergericht〕に勤務する。さらにリヨンやスイスに遊学したのちに仕官したゲッティンゲンでフォスと知り合い、65年創刊のバリの『詩聖年鑑〔Almanach des Muses〕』に倣って文芸誌を発行した。

〔Göttinger Musenalmanach〕』を創刊し、新進の詩人や文筆家に誌面を開放して1807年の廃刊まで初期ロマン主義に多大な影響を及ぼす。彼は、第2号から単独で編集したのち74年に同誌を離れ、76年から軍団長付き連隊秘書官〔Stabssekretär des commandirenden Generals〕としてハノーファー駐在となる。同じ年にドーム³⁸と共同して月刊総合雑誌『ドイツ文芸〔Deutsches Museum〕』を創刊し、91年の廃刊³⁹まで編集を担当する。その途中の81年に南デイトマールシェンの郡長〔Landvogt〕として故郷メルドルフに戻り、カルステンの上司となる。

他方、フォスは、苦学して中等教育を終えた後、大学進学を断念して家庭教師となり、71年に自作の詩を『ゲッティンゲン文芸年鑑』に投稿してボイエの知遇を得る。二人の文通が始まり、72年にボイエの奨めによりゲッティンゲン大学に進んで文献学とくにギリシア学を修める。卒業に届かなかった背景には、74年から1800年までこの『文芸年鑑』の編集を引き受け、しかもその三分の一の期間は単独で編集にあたったという事情もある。77年にボイエの妹〔Ernestine〕と結婚し、カントが『純粹理性批判』を世に送った81年、ドイツ文学史上「劃期的〔bahnbrechend〕」と評される『オデュッセイア』の訳を上梓する〔『イリアス』は93年〕。そして、義兄ボイエがメルドルフに戻った翌年の82年、ホルシュタイン東部のオイティン〔前注28〕のギムナジウムの校長職を引き受ける。彼は、1802年に居をイエーナに移して年金生活に入るが、05年にハイデルベルク大学の招聘に応じる⁴⁰。

38 Christian Wilhelm von Dohm〔1751-1820〕は、哲学と神学を専攻した後、ゲッティンゲン大学とカッセル大学で法学を修め、76年からカッセル大学の官房学と財政学の教授となり、79年にベルリンの公文書局に転出したのちプロイセン外務省の要職を歴任する。78年まで共同編集した雑誌では、ドームが哲学や歴史や政治の欄を、ボイエが文芸と文芸批評の欄を担当した。

39 1789年から『新ドイツ文芸〔Neues Deutsches Museum〕』に誌名変更。

40 Christof Wingerts Zahn, Voß, Johann Heinrich, in: Bernd Witte, Theo Buch, Hans-Dietrich Dahnke, Regine Otto und Peter Schmidt, (Hg.), Goethe Hand-

ちなみに、フォスのワイマル招聘が叶わなかったゲーテは、エッカーマンを伴って27年10月7日にイエーナのフォスの旧宅を訪れてつぎのように語った。「…… 私はここでフォスや賢夫人のエルネスティーネとともに、幾日も素敵な日を過ごした。…… ところで、フォスのような男は、そうかんたんには二度と現われないだろう。高度なドイツ文化に彼のような影響を及ぼした人は、ほとんどいない。フォスの仕事は、すべて健康そのもので、気骨があった〔derb〕。だから、彼のギリシャ人に対する関係もわざとらしくなく、純粹に自然だった。そこから、われわれにとってもきわめて好ましい成果が生まれたのだ。彼の値打ちを私ほど痛感している者は、彼の思い出をどれだけ尊重しても、十分だとは思わないね」〔前注15・『ゲーテとの対話』・209頁〕。

7) ゲーテは、前述の『詩と真実』第12章で、彼が1772年5月に帝国最高法院に実習生として登録した当時にザクセン＝ゴータ公使館付き秘書官であったゴッター〔前注37〕との出会いを次のように述懐する。

「…… ゴッターと知り合ったのはきわめてうれしいことであった。…… 私たちは知識、もくろみ、好みを伝え合った。彼は私を動かしていくつかの小品を書かせた。特に、彼はゲッティンゲン派のひとびとと関係があって、ポイエの『文芸年鑑』に私の詩を欲しがっていたからである。

これによって私は、団結した、若く才能豊かな、のちに多方面にわたって広く活動したゲッティンゲン派のひとびとと多少接触するようになった。…… 信仰上からも精神上からも、クロプシュトックを中

buch, 4/2, 1998, S. 1113-1115. なお、ゲッティンゲンでの文献学の師ハイネ〔Christian Gottlob Heyne : 1729-1812. グーチ・前注6の上・28頁〕については、Balbina Bäßler/Heinz-Günther Nesselrath (Hg.), Christian Gottlob Heyne Werk und Leistung nach zweihundert Jahren, 2014がある。彼は、ベルリン大学でNの同僚となる文献学者ヴォルフ〔後注106〕の師でもある。ハイネを起点とするこれらの人脈とNとの関係につき、木庭・前注10の②・187頁注(39)を参照。

心にして集まっていた。クロプシュトックの影響はあらゆる方面に及んでいたのである」〔前注36・『詩と真実』・145頁以下〕。

「ゲッティンゲン派〔die Göttingern〕」とは、ボイエやフォスをはじめ6名のゲッティンゲン大学の学友が外部の3名を加えて「ドイツの文学を革新し自由と祖国のために闘う」ことを目的として72年に結成した「結社」であり、詩の女神が宿るパルナッソス山の森に擬して彼らが名付けた「Hain Bund〔杜の詩社、森林結社〕, Göttinges Hainbund」⁴¹を指す。74年にはクロプシュトックを名誉会員に迎えるが、同志の卒業によって「結社」としては自然消滅する。しかし、銘々がその赴任地やボイエの雑誌で活動を続け、ゲーテのような会員でない者とも交流の輪を広げていく。

クロプシュトック〔Friedrich Gottlieb Klopstock : 1724-1803〕⁴²は、ゲーテ誕生の前年の1748年に叙事詩『救世主〔Messias〕』⁴³の最初の部分を發表してドイツの青年子女を魅了するや、デンマーク国王フレゼリク5世から政府高官J・ベアンストーフを介して、デンマークに居を移して詩を完成させることを条件に年金を下賜する旨の提案を伝えられる。彼は、当初は躊躇したもの、生計をたてるためにこれに応じ、コペンハーゲンやハンプルクで生活する⁴⁴。

「杜の詩社」に参加した学外者には、デンマーク政府に出仕していた神聖ローマ帝国のシュトルベルク伯〔Chrsitian Günther Graf zu Stolberg-Stolberg : 1714-65〕の息子クリスティアン〔Christian : 1748-1821〕とフリードリヒ〔Friedrich Leopold : 1750-1819〕もいた。兄クリスティ

41 Annette Lüchow, Göttinger Hain, in: Witte・前注40・Goethe Handbuch, 4/1, 1998, S. 433-434.

42 Meredith Lee, Klopstock, Friedrich Gottlieb, in: Witte・前注40・Goethe Handbuch, 4/1, S. 611-613.

43 参照：高橋克己『『救世主』の歌人クロプシュトック（1724年-1803年）』高知大学学術研究報告（人文科学）46巻（1977年）61-92頁〔74-92頁はドイツ語版〕。

44 S. A. Jørgensen, K. Bonen, P. Øhrgaard, Geschichte der deutschen Literatur 1740-1789 Aufklärung, Sturm und Drang, frühe Klassik, 1990, S. 234.

アンは、ベルリン駐在デンマーク公使を経て91年に公爵位保有聖職者会議の総裁〔Präsident der fürstbischöflichen Kollegium〕としてオイティンに着任し約20年ぶりにフォスと合流する。二人は、オイティン・サークル〔Eutinner Kreis〕と称される教養層の交流の中心となる。しかし、前述したようにフォスはイエーナに転居する。その原因は二人の仲違いにあったとされている⁴⁵。

この兄弟からは、いくつかの人脈が伸びている。思春期に父を亡くした兄弟はクロプシュトックを家庭教師として育つ。間に入ったのは、クロプシュトックの招聘に動きシュトルベルク伯とも近しかったJ・ベアンストーフである。また、『カルステン・ニーブーアの生涯』によれば、Nの父はアラビア旅行中にJ・ベアンストーフに何度も詳細な報告を送り、彼はシュトルベルク未亡人にそれをもたらし、彼女による読み聞かせに幼年期の兄弟は胸をときめかせた。そしてJ・ベアンストーフは、成長した若者を生還したカルステンに引き合わせる〔CNL=36f.=246〕。のちにボイエを介してゲーテと知り合った兄弟は、75年5月にスイス旅行に出掛けた折にフランクフルトに立ち寄り、ゲーテを約二ヶ月半の「第一次スイス旅行」に連れ出す〔参照：後注69〕⁴⁶。

8) 以上のように、Nと当代の文人との接点は、父カルステンを介していくつも存在している。コスモポリタン風の神童〔das kosmopolische Wunderkind : Th. Mommsen〕と評されるNが、この環境のもとでどのような教育を受けたのか、また、この人脈からどのような影響を受けたのかは、N論のテーマである⁴⁷。以下ではNの大学進学にかかわる1793年に

45 Gert Theile, Stolberg, Friedrich Leopold Graf von, in: Witte・前注40・Goethe Handbuch, 4/2, S. 1017-1019.

46 参照：『詩と真実 第四部』第18章〔山崎章甫訳・岩波文庫・1997年〕110頁；『ゲーテ全集 12 紀行』〔野村一郎訳・潮出版社・1979年〕356頁。

47 大学進学までのNの教育については、Geritt Walther, Wie der Sohn des Entdeckers den Vater des Forschers sah. Zum Verhältnis zwischen Carsten und

眼を向ける。メルドルフから東約120キロにデンマーク王国のキール大学、そこから更に北約90キロ下ってハンザ都市ハンブルクの大学がある。N論の多くは言及しないが、Nがキール大学に進むについては一悶着あった。

ドイツ語圏での17世紀以降の高等教育への階梯は、多くの都市では、「ラテン語学校〔Lateinschule〕」による中等教育、「大学進学準備校〔das Akademische Gymnasium, Gymnasia illustre〕」での準備教育、「大学〔Universität〕」での神学・法学・医学の教育、という三段階であった。ハンブルクでの一般的なルートは、主として地元のヨハネウム学院の卒業生が、1613年設立の「大学進学準備校」で2学期間にわたる人文諸学〔artes liberales〕の講義でもって神学・法学・医学の学修の準備をして、ハンブルク大学に進むというものであった⁴⁸。やがて18世紀が進むと、ドイツ各地で別の「アカデミー〔Akademie〕」が登場し、末期には学制改革が始まる。この「アカデミー」とは、専門的技能を養い職業上の実務とはっきり関連をもたせた専門施設である。たとえば、ベルリンでは、医師養成所、鉱山アカデミー、獣医学校、建築アカデミーなどが官立で設置された後、その

Barthold Georg Niebuhr, Wiesenhöfer編・S. 85-103 (S. 90ff.) が基本文献であり、本稿はこれに拠る。

- 48 Dirk Brietzke, Franklin Kopitzsch, Rainer Nicolaysen (Hg.), Das Akademische Gymnasium Bildung und Wissenschaft in Hamburg 1613-1883, 2013, S. 7f. これに対して、望月幸男『ドイツ・エリート養成の社会史——ギムナジウムとアビトゥーアの世界——』（1998年）によれば、「ラテン語学校は、一方で未来の官吏・聖職者・学者のための大学進学準備校であった。ところが他方ではさまざまな職業に就くものの準備教育もやっていた。このようにラテン語学校は二つの機能をもっていた」とされる（37頁）。

念頭におく時期や地域によって差があるのかもしれないが、ラテン語学校とは別に進学準備の機能を担う独立の施設が存在していたことはたしかであり、かつてカルステンがハンブルクで入学したのもこの種の教育機関であった。他方、ラテン語学校の機能不全への反省もあって、後述の「アカデミー」が設置されるようになる。また、この進学準備校が大学進学資格の授与と結びついたギムナジウム制度に改編されるのは、解放戦争後のプロイセンでの教育改革によってである。

多くは〔邦語では〕「総合大学〔Universität〕」と対比して「単科大学」と訳されがちな機関に組織替えされる⁴⁹。

商都ハンブルクでは、「大学進学準備校」教授のビュッシュ〔Johann Georg Büsch : 1728-1800〕らが⁵⁰、私財と寄付金で1768年に「ハンブルク商業アカデミー〔die Hamburger Handelsakademie〕⁵¹」を開設した。設立趣意書によれば、貿易のプロを養成するための施設として、理論に関する講義と実務のための実習を提供し、歴史や最新の地理、農学や工学、多様な外国語などの課目を設けるとされる。他方、カルステンは、探検の際に訪れたボンベイで東インド会社の要人たちと14ヶ月にわたって生活をともにし⁵²、世界を股にかける経済人という意味でのGeschäftsmann⁵³の夢を息

49 ハンス＝ヴェルナー・ブラール/山本 尤訳『大学制度の社会史』（原著1978年。1988年）161頁以下。

50 ビュッシュは、ゲッティンゲン大学で数学を修めた後、56年から生涯ハンブルクで数学教師を勤める傍ら、商都の繁栄を図るための数々の献策を行ったほか、統計学を取り込んだ政治経済学の作品を著したことから、「国家学者〔Staatswissenschaftler〕」とされることもある。プロイセンの枢密商業顧問官ウルム〔Geh. Kommerzienrat Friedrich Christoph Wurmb : 1730-88〕と協力してドイツ初の商業アカデミーを設立し、世界有数の教育機関に育てた。

なお、Nの弟子クラッセン〔後注82〕による評伝〔ders., Die ehemalige Handelsakademie des Professors J. G. Büsch, 1865 112 S.〕があるほか、彼の教育理念や手法に焦点を当てた論考として、Frank Hatje, Johann Georg Büsch (1728-1800) : Professor academicus et extra-academicus, D. Brietzke et al.・前注48・S. 109-138がある。

51 Vgl., Bruno Ziegler, Die Hamburger Handelsakademie, in: Gewerbeschau. Sächsische Gewerbezeitung, 34 Jg. (1902). この論文のpdfには、商人の職業訓練教育や19世紀までの経営学の歴史を研究するKlaus Friedrich Pottのサイト〔klaus-pott.de/〕のdownloadsから20. Jahrhundertをクリックするとアクセスできる〔最終アクセス：2018.9.3〕。

52 Anu Kumar, Carsten Niebuhr in Bombay and Surat, Economic & Political Weekly vol. 53 No. 9, 03 March 2018は、カルステンの旅行記からボンベイやその近郊に関する記述を摘記したもので、カルステンと東インド会社との関係を調べたものではなく、資料的価値も乏しい。

53 Geschäftsmannの当時の含意は、職業よりも専門性をもった資質・才覚であり、文脈によって、経済人のみならず、der politische Geschäftsmannも成り立

子に託していた。若い頃にビュッシュから数学を習った彼は、この開設理念に共鳴したらしく、文献学を修めるためにゲッティンゲンを志望した息子Nを93年6月に「ハンプルク商業アカデミー」に入学させる〔なお、Heuss・S. 348f.〕。

しかしNは、9月には退学してメルドルフに舞い戻る。とは言え、何の収穫もなかったわけではない。N論は、わずか数ヶ月のハンプルク時代のNがクロプトシュトックを訪問し、心の安らぎの場所を得たと述べる〔Walther・S. 50〕。そしてNは、父の意向で翌94年春にキール大学に進学し法律学・自然科学・哲学・歴史を学ぶ⁵⁴。メルドルフからキールへと続く彼の「哲学修業時代」は、N論でも議論の多いテーマである〔Walther・S. 16 Fn. 14；木庭・前注10の②・187頁注（37）〕。

9）キールの人口は、1789年の約5600人から1803年には約7000人に急増する。また、1665年創設のキール大学は、1790年代にはデンマーク政府の文化政策のもと36～38名程度の教員に対して約200名の学生という「小じんまりとしたAkademie」であり、両者の関係も親密であった。当時のキール大学では、入学段階で学部を決めること〔Fakultätsbezeichnung〕は必要でなく、いわゆる法典論争で知られるティボー〔1772-1840〕も、94年5月4日に入学登録をしたが所属学部未決定組である⁵⁵。Nがいずれで

ちうる〔Walther・S. 41, 258；Heuss・S. 468〕。

54 父は経済人または官吏という息子の姿を描くが、息子は“*Geschichtsschreiber, und politischen Schriftsteller, als Altertumsforscher, und Philologen*”で名をなすことを夢見た〔1794年11月16日付け書簡、Briefe AF Bd. I, S. 68〕。これらの「職業」の訳語自体が、N論の内実に関わる。

55 *Hajo Brandenburg*, Kurzer Überblick die Volkszählungen in Mittel- und Nordeuropa bis 1860, in: *Kersten Krüger und Stefan Kroll* (Hg.), *Die Sozialstruktur der Städte Kiel und Altona um 1800*, Neumünster 1998, S. 17-20 (S. 20)；*Otto Ulbricht*, *Geselligkeit im akademischen Milieu: Kiel in den 1790er Jahren*, in: *Peter Albrecht et al.*, (Hg.), *Formen der Geselligkeit in Nordwestdeutschland 1750-1820*, 2003, S. 371-395 (S. 373f.)。

ちなみに、プロイセン領の法学部の学生数と教員数の状況につき、小野秀誠

あったかを当時の記録にあたって調べた論考は見当たらないようである。

学内の大勢は、「保守的」とされている。「杜の詩社」の一員であったクラマ〔Carl Friedrich Cramer : 1752-1807〕は、フランス革命前の75年にギリシア学とオリエント学の教授として赴任したが、革命の自由理念を奉じるに至って、同僚や政府の賛同を得られず94年に解職される。これに抗議した学生を「急進的共和主義者」として首都コペンハーゲンのドイツ人担当局に告発したのが、医学部教授ヘンスラー〔Philipp Gabriel Hensler : 1733-1805〕であった。こうして大学では革命の精神は絶えた、とされる⁵⁶。そしてNの「親代わり〔Mentor〕」となったのが、カルステンの人脈を介したヘンスラー教授であり、Nはその家族とも親交を結ぶ。

ところで、ティボーは、1831年のNの逝去から7年後、14年の法典論争から四半世紀を経た38年に「いわゆる歴史学派と非歴史学派について」と

「近代の大学と法曹養成制度——19世紀以降の変容——」獨協法学105号（2018年）29-91頁（60頁以下）を参照。

Rainer Polley, Anton Friedrich Justus Thibaut (AD 1772-1840) in seinen Selbstzeugnissen und Briefen, Teil 1: Abhandlung, 1982, S. 29. *ders.*, Teil 3: Register zum Briefen, 1982, S. 695に、*ders.*, Teil 2: Briefwechsel, 1982所収のティボーのN宛て書簡のリストがある。キール時代のティボーにつき、*Christian Hattenhauer*, »— wenn mein Herz mich nicht so sehr an Kiel fesselte« — Anton Friedrich Justus Thibaut, in: *Andreas Arnould/Ino Augsburg/Rudolf Meyer-Pritzel* (Hg.), 350 Jahre Rechtswissenschaftliche Fakultät der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel, 2018 があるが、両者の関係についての本格的な考究は今後の課題であろう。

- 56 Rainer S. Elkar, Beteiligung und Verantwortung-Ausschnitt einer studentischen Geschichte zu Kiel, in: *Oliver Auge* (Hg.), Christian-Albrechts-Universität zu Kiel 350 Jahre Wirken in Stadt, Land und Welt, 2015, S. 561-610 (S. 565f.). Elkarは、「彼〔ヘンスラー〕の同級生Niebuhr」がクラマを「当地のサンキュロットの頭目で無条件的平等の使徒」と呼んだとする不可解な論考を引用する。ちなみに、1801年にキール大学の招聘に応じた刑法学者フォイエルバハ〔Paul Johann Anselm von Feuerbach : 1775-1833〕の伝記は、この事件を含めて赴任前後のキールの思想的雰囲気を「世界観の対立」として描く〔ラートブルフ/菊池榮一・宮澤浩一訳〕『一法律家の生涯—— P. J. アンゼルム・フォイエルバハ伝——』（1963年）90頁以下。

いう一種の回想文を発表した。この論争で法典編纂の必要性を主張した彼は、ローマ法を軽視するもののだとして知友の理解をえられずに「歴史嫌い」というレッテルを貼られたらしい。そういう無理解を裏切りと呼ぶ彼は、そのどれをも受け流してきたと述べたあと唐突に、「私には一度だけ堪えた裏切りがある。あろうことか無理解者・裏切り者〔der Belogene〕はニーブーアだったのである……尊敬するこの人物のことを手短かに語るのをお許しいただきたい」として脱線する⁵⁷。《私が大学生活の最後の二年をキールで過ごしたとき、ニーブーアが入学した。われわれはたちまち意気投合し、一年近く一つ屋根の下で暮らし、ささやかな昼食を私の部屋でとった。彼は5歳ほど年下であったが、その博識ぶりから私には師も同然であった。われわれの判断は、本質的な点では一致していた。ただひとつについては、口論はしなかったが相容れなかった。彼はフランス革命を実に不快なことだとして懸念していたが、私は無数の人々と同様に血気盛んな期待を寄せていた。もっとも、その多くは——幸いなことにすべてではなかったが——革命が進むにつれて実現しないままに終わった。ニーブーアは、その移り気〔Unstern〕から政治に身を投じてしまった。彼が政治に携わっているあいだ文通はなかった……》。

これだけでは何のことか判然としないが、Nは、入学早々の1794年8月17日に父に《人里離れたいちばん気に入った場所に住んで誰にも邪魔されずに、生活費は文筆で稼いで勉強に打ち込みたいのです。僕の友人のティボーも同じ意見です》と書いていた〔Briefe AF Bd. I, S. 49〕。そこで言う「勉強」とはギリシア・ローマの古典の研究であり、ティボーの言うNの裏切りは、Nが政治へと走ったことを指すようにも思われる。しかし、

57 Thibaut, Über die sogenannte historische und nicht-historische Rechtsschule, AcP Bd. 21, S. 391-419 (S. 404f.) = Hans Hattenhauer (Hg.), Thibaut und Savigny Ihre programmatischen Schriften, 2., erw. Aufl., 2002, S. 211-227 (S. 218f.).

それは法典論争よりも前のN側の事情であるし、Nは押しも押されぬローマ史家として大成したのだから、ティボーへの無理解という意味での裏切りとは言えまい。事情は複雑である〔後述13〕。

10) 96年の復活祭に先だって、ティボーは教授資格を取得してキールの私講師となる。他方Nは、同じく96年の夏学期を終えて中退しコペンハーゲンに移る⁵⁸。父の知名度とヘンスラー教授の仲介で財務大臣シメルマン〔Ernst Heinrich von Schimmelmann : 1747-1831〕⁵⁹から私設秘書の地位を提供されたからである。以後のキャリアを摘記しておこう。同年9月に王立図書館の秘書官を兼任。97年6月に図書館専任に転じ、教育制度改革に協力。その月末から99年までロンドンおよびエディンバラに国費留学⁶⁰。1800年初夏に産業商務省東インド局長官補として出仕し、北アフリカ問題委員会の在コペンハーゲン事務室主任を兼任〔この部署は貿易による歳入部門であり財政の要のひとつであった〕。01年にホルシュタイン公爵領の農民解放の私案をシメルマンに提出。03年4月に国立銀行運営委員に就任。03年秋に商務省東インド局長に昇進。この間、ティボーが仲介したのかは不明だが、キール大学考古学教授の招聘を1800/01年冬学期に断っている。HeussによってN論の重要なテーマとしてクローズアップされたのが、この時期にNが着手したローマの公農地〔ager publicus, Staatsländereien〕

58 ③ *Christian Degen*, Niebuhr—Vom Dänen zum Preußen, Wirth編・S. 45-65.

59 ボンメルン出身の父〔Heinrich Carl von Schimmelmann : 1724-82〕は、一代でプロイセンの軍需品納入業者からデンマークの王室財産管理人にまで昇りつめて授爵された大地主であり、北アフリカでのプランテーション経営者でもあった。これに対して、ルソーに心酔した息子は、1803年にヨーロッパ初の奴隷取引禁止法を制定したほか、農民解放に尽力した。参照：前注23・橋本126頁以下；Jahnke, S. 177ff.

60 ⑦ *Ernst Bammel*, Niebuhr und England, Wirth編・S. 131-175. 「イギリスを研究しなかったらローマ史を理解することはできなかっただろう」という『ローマ史』刊行後のNの言葉〔後注161〕に鑑みても、東インド会社や探検記を接点とする父の人脈を活用したイギリス留学の意義は、N論のテーマのひとつである。

や農地法制〔lex agraria, Ackergesetze〕の研究である⁶¹。また、一般市民層出身のNが政府首脳を占める「貴族層」を介して形成した「貴族観」も、Nのローマ史の見方と合わせてN論の重要なテーマである。

家系に眼を転じよう。18歳のNは、入学早々にドーレ・ヘンスラー〔Dore Hensler geb. Behrens : 1770-1860. 別表記としてDora〕⁶² という6歳年上の女性と出会う。彼女は、ヘンスラー教授の次男と結婚したが早くして寡婦となり、子はなく義父と同居していた。Nは、デンマークに移って翌97年にキールの彼女に求婚する。しかし、彼女はこれに応じず、彼は彼女の妹アマーリエ〔Amalie Behrens : 1773-1815〕と婚約する⁶³。イギリスに向かったNは、帰国後デンマーク政府で地位を得て、1803年5月にアマーリエと結婚する。

11) Nの次のキャリアは、プロイセンの官僚への転身である。ナポレオンの脅威を受けて1804年10月に緒についたプロイセン改革の一環として、N

61 議論の輪郭は、木庭・前注10の②・182頁によれば、「Nがlex agrariaの対象地を所有権の成立している私有地一般でなく公有地に限定されたと考えた動機は、フランスでは貴族の（上級）所有権を解体しさえすれば一定の政治体制の質が現れるかもしれないが、ドイツでは貴族の支配の構造が異なるからそれを直ちに解体しても中間層の脱落は免れない、と考えた」というものである。詳しくは、同・172頁以下；木庭・前注1の①・487頁以下；西村 稔「ジェイムズ・Q・ホイットマン著『ドイツ・ロマン主義時代のローマ法の遺産——歴史的光景と法的変動』1990年（二）」岡山大学・法学会雑誌43巻1号（1993年）61-105頁〔James Q. Whitman, The Legacy of Roman Law in the German Romantic Era, Historical Vision and Legal Change, 1990, p. 151ff.〕を参照。

すでに指摘されていることではあるが、このテーマは、一方では、「農民共和国デイトマルシェン」像の理想化〔前注34〕、フランス革命・デンマーク内政改革・プロイセン改革での農地法制、他方では、父カルステンのインド体験からの情報やイギリス留学で注目するに至ったインドの土地法制についてのNの評価と関連づけて検討する必要がある。

62 Eduard Vischer (Hg.), Briefe von Frau Dore Hensler geb. Behrens an Staatsrat L. Nicolovius aus dem Zeitraum von 1815 bis 1820, Archiv für Kulturgeschichte, 62/63, 1980/1981, S. 301-349 (S. 301f.).

63 Nの結婚と再婚をめぐるのは、さまざまな風評があったようである〔補遺6〕。

は、財政官僚としての手腕を買われて06年、対仏戦争の真っ只中でプロイセン政府に加わる。主として銀行制度改革や外債調達や国債償還などを担当し⁶⁴、08年には枢密顧問官に任命される⁶⁵。

しかし、10年が転身の年となる。その春、改革案をめぐる路線対立から国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世〔在：1797-1840〕に罷免を申し出るとともに、ナポレオンからの祖国解放に向けて「愛国心」で高揚する時代思潮のもと、「プロイセン修史官〔der Historiograph des königlichen Hofes〕」としての宮廷入りを懇請する。6月16日付けでこれが容れられるのに先だってNは、5月29日にベルリンのプロイセン学術アカデミーの会員に選出され、その規約により、学歴に関わりなくプロイセン全土の大学での講義資格を得る。そして、この年の冬学期には、10月15日開学のベルリン大学の創設メンバー⁶⁶の正教授としてローマ史の講義を担当して好評

64 Nは、07年1月から09年9月まで、財政立て直しに向けた借款の交渉のため、オランダに駐在する。この時期のNによる本国への回付状〔Circularbriefe〕は、報告文書であって彼の生活を語るものではなく、また、彼自身が一纏めにして編集する予定だったため、『Nの生活の消息』〔後注131〕では採録されなかったと言われる。その後、遺稿集で活字化された〔後注111〕。

65 デンマーク政府からの免職につき、*Axel Linvald*, Barthold Georg Niebuhr und seine Entlassung aus dem dänischen Staatsdienste im Jahre 1806. Ein Beitrag zu seiner Lebensgeschichte, HZ 129, 1924, S. 86-95; *Karl Hugelmann*, B. G. Niebuhrs Erklärung aus dem Jahre 1814 über sein Verhältnis zu Preußen und zu Dänemark, HZ 98, 1907, S. 126-134。また、旧東ドイツの文書館所蔵の公文書などを利用した論考として、② *Hein Herz*, Niebuhr im preußischen Staatsdienst, 後注142・S. 553-568がある。*Erwin Nasse*, Die preußische Finanz- und Ministerkrise im Jahre 1810 und Hardenberg's Finanzplan, HZ 26, 1871, S. 282-342; ④ *Walter Hubatsch*, Barthold Georg Niebuhr im preußischen Staatsdienst 1806 bis 1815, Wirth編・S. 67-87; ⑤ *Barthold C. Witte*, Niebuhr und die preußische Reform, Wirth編・S. 89-108。プロイセン改革全般につき、石川澄雄『シュタインと市民社会——プロイセン改革小史——』（1972年）を参照。

66 大学設立の経緯などにつき、前注65・石川・250-268頁（263頁）；前注34・河上・183-203頁を参照。⑨ *Christian Renger*, Niebuhr als akademischer Lehrer, Wirth編・S. 177-210。

を博す⁶⁷。そして13年の祖国解放戦争に際しては、対ナポレオン同盟のためにイギリスとの交渉にあたったほか、愛国的な時論などを発表する〔その一端については【補遺1】に譲る〕。また、14年には、皇太子時代の国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世〔在：1840-61〕に国家学と財政学の私的な講義を行い、いらい皇太子は終生Nに親炙する。N論で言えば、シュタイン〔Freiherr von Stein：1757-1831〕生誕250年シンポジウムなどによる研究の進展は⁶⁸、プロイセン改革時代のNについて新たな解釈を開くかも知れない。

ベルリン時代には、家系について大きな出来事があった。夫妻は、妻が病弱で子に恵まれなかったため、14年9月に養子縁組みをした。相手は、シュトルベルク伯の息子〔参照：前注46〕のうち弟フリードリヒが妻と死別した後に再婚してもうけたベルリン大学法学部の学生〔Christian Franz Leo：1796-1815〕である。彼はNの自宅から通学し、Nは彼の出席状況を実父に報告している。しかし、ベルリン時代の最後の局面の15年は、Nにとって凶事が続く。4月26日に父カルステンがメルドルフで82歳の生

67 *Reimer Hansen*, Die wissenschaftsgeschichtlichen Zusammenhänge der Entstehung und der Anfänge der modernen Geschichtswissenschaft, in: *Reimer Hansen und Wolfgang Ribbe* (Hg.), *Geschichtswissenschaft in Berlin im 19. und 20. Jahrhundert. Persönlichkeiten und Institutionen*, 1992, S. 3-44 ; *Wilfried Nippel*, Barthold Georg Niebuhr und die Begründung der modernen Althistorie, in: *Annette M. Baertschi und Colin G. King* (Hg.), *Die modernen Väter der Antike Die Entwicklung der Altertumswissenschaften an Akademie und Universität im Berlin des 19. Jahrhunderts*, 2009, S. 45-72. N論の主要文献のかなり詳しいリストを付したこの2点につき、後注144も参照。

68 *Bentzien, H.*, Überhaupt zeige man Charakter! Leben und Werk des preußischen Staatskanzlers und Reformers Karl August Fürst von Hardenberg, 2002 ; *Heinz Duchhardt* (Hg.), *Stein. Der späten Jahre des preußischen Reformers 1815-1831*, 2007 ; *Peter Brandt et al.*, *Forum 250 Jahre Freiherr von Stein: Aspekte seines Wirkens als preußischer Reformers und die Bedeutung seiner Klever Zeit*, 2010 ; *Lothar Gall*, *Hardenberg: Reformers und Staatsmann*, 2016.

涯を終える。そして6月20日には妻アマーリエが42歳で逝く。さらに7月にはクリスティアンがフランス軍との戦いで戦死する⁶⁹。

12) 1815年は、Nにとって重い決断の年でもあった。大学教授からヴァティカン駐在公使への転出である⁷⁰。前任者はW・フォン・フンボルトである。Nは、妻と死別したばかりの初夏にドーレに求婚する。彼女は今回もこれに応じず、彼は彼女の亡夫の兄でキール大学神学部教授のクリスティアン・ヘンスラー〔Christian Gotthilf Hensler : 1760-1812〕の娘マルガレーテ〔Margarethe Lucie Philippine Hensler : 1787-1831〕と婚約する。Nは出立直前の16年7月8日にマルガレーテと挙式し、夫妻はローマ在任中に二男三女に恵まれる。

教皇庁でのNの活動は、ウィーン会議によって新教国プロイセン領となったライン地方のカトリック地域についての教皇庁とプロイセンとの協約として結実する⁷¹。他方、公使館の秘書官がN自身にとってもNの顕彰にとってもキーマンとなる。最初の秘書官はブランディス〔Christian Brandis : 1790-1867〕であり〔前注34〕、Nの推挽で16年にローマに赴いた⁷²。二人目はブンゼン〔Christian Karl von Josias Bunsen : 1791-1860〕

69 Briefe AF Bd. II, S. 465, S. 507, S. 610. しかし、何らかの支障があったのか、Briefe AF Bd. Iの編者は、同書・S. CXXXIIIの家系図〔Briefe NF Bd. II, S. 10に再録〕にこの縁組みを加えない。

70 Rudolf Lill論文〔後注144の⑤〕のほか、ローマ駐在から逝去までをNと革命という観点から検討した論考として、⑥ Eduard Vischer, B. G. Niebuhr und die Revolution, Wirth編・S. 109-130.

71 B・ド・ソーヴィーニー著・磯見辰典監修『ロマン主義時代のキリスト教』キリスト教史8（1982年）、174-174頁。ちなみに、ローマにあるルター派福音教会イタリア〔Evangelisch-Lutherische Kirche in Italia〕のHPによれば、Nが宗教改革300年を契機に1817年11月9日にローマで初めてドイツ語による福音派の正餐礼拝を行なってから200年を記念して、教会は2017年11月5日に“1817-2017: 200 Jahre evangelischer Gottesdienst”を挙行了した。

72 ブランディスは、神学や文献学や哲学を学び、コペンハーゲン大学で教授資格を取得しながら教職に就くことなくゲッティンゲンで後述のブンゼンらと交わっていたが、Nの助言によりベルリン大学で教授資格を取得した。翌17年に

である。彼の能力に魅せられたNは、17年にブランディスと彼を差し替える。彼は、前述の協約締結の功績を認められ国王による破格の処遇で23年にNの後任となるが、38年に解任される⁷³。

ところで、この時期の有名なエピソードは、Nが「1816年……プロイセンの在教皇庁公使として赴任の途中、ヴェローナの教会附属図書館（*Bibliotheca Capitolare di Verona*）に立ち寄り、ガーイウスの『法学提要』を記載した再記羊皮紙（……パリンブセスト）の写本を発見した」というものである。ところがNは、文筆家メルケル〔1769-1850〕によって「写本泥棒」の濡れ衣を着せられる⁷⁴。近時、この発見は「偶然」なのか「必然」なのかをめぐって議論が進行中である⁷⁵。なお、余り知られていない

秘書官の職を解かれて帰国し、Immanuel Bekker〔1785-1871〕と共にベッカー版でお馴染みのアリストテレス全集の編纂に従事しつつ、18年開設のボン大学の哲学教授となる。

73 ブンゼンは、ゲッティンゲン大学などで哲学や文献学を修めたのち、家庭教師としてドイツやイタリアの修学旅行に同行する。Nの著作に感銘して、15年に中東地域の古代史に関する研究計画をNに持ち込んだことでNの知遇を得た。ローマ公使解任後、駐スイス大使に就くが、Nに親炙していた皇太子は40年にフリードリヒ・ヴィルヘルム4世〔在：1840-61〕として即位するや、ブンゼンと頻繁に意見交換をする。彼は、王命を帯びて41年にイギリスに渡って福音派と英国教会との協調をとりつけたのみならず、その地の知識人層からの信頼を不動のものとする〔補遺6〕。

74 佐藤篤士監訳『ガーイウス 法学提要』（2002年）vi頁。「写本泥棒」スキャンダルについては、① *Liselot Huchthausen*, B. G. Niebuhr, Garlieb Merkel und die Entdeckung der Gaius-Handschrift, 後注142・S. 581-587を参照。

75 *Cristina Vano*, „Il nostro autentico Gaio“. Strategie della scuola storica alle origini della romanistica moderna, Napoli 2000, 389 p. : *dies.*, Der Gaius der Historischen Rechtsschule Eine Geschichte der Wissenschaft vom römischen Recht, Frankfurt am Main 2008, 350 S. [マックス・プランク・ヨーロッパ法史研究所の主導によるドイツ語訳] : *F. Briguglio*, Barthold Niebuhr und die Entdeckung der Gaius-Institutionen—tatsächlich ein ‘Glücksstern’?, ZRG Rom. 128, 2011, S. 263-297 ; *Mario Varvaro*, Le Istituzioni di Gaio e il Glücksstern di Niebuhr, Torino 2012, 203 p. : その増補ドイツ語版として、*ders.*, Der “Glücksstern” Niebuhrs und die Institutionen des Gaius Deutsch-italianische Wissenschaftspolitik im frühen 19. Jahrhundert, 2., erw. Aufl., Heidelberg 2014,

別のエピソードは【補遺2】に譲る。

13) Nは、妻の健康上の理由もあって1823年夏に帰国の途につく。ローマからベルリンに戻るには、バーゼルを北上してシュパイアーから東にニュルンベルクへと向いライプツィヒを経るのが最短コースである。しかしNは、そのまま北上する。これは、ボン大学⁷⁶の哲学教授に転身していたブランドイスの招待でボンに立ち寄るためであったが、その途中ハイデルベルクで旧友ティボーと再会する。先に紹介したように彼との文通は途絶えていたが、Nは、14年の法典論争の際にはドーレ宛て書簡で彼のことを気遣って書いた〔Briefe AF Bd. II, S. 525〕。ティボーによる前述の回想によれば、再会を果たしたNは、《ハイデルベルクに5、6日滞在した。彼は、この間の大半を誰一人交えずに私と語り合った。彼は、はじめはややぎこちなかった。しかし、私はキケロ〔Marcus Tullius Cicero : BC 106-43〕を持ち出したことで救われた。私がたまたまキケロの長所を口にしたところ、彼は、「キケロのどこが?」と聞き返した。私は簡潔につきのように答えた。もしもローマ時代の著作のすべてを焼き払うことが出来ると豪語する者が、一人だけならその著作を持ち出してよいと言ったなら、僕は即座に「それはキケロだと」と言う、と。私がその理由を縷々述べたところ、

264 S.

この論議の端緒は、Nとゲーテを「方法」の点から比較する私見によれば、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』〔1829年版〕第2巻第9章の末尾の、首尾よく鉱区を掘り当てる鉱山技師モンターンの発言に関わる。すなわち、「成功を生んだのは幸運ばかりではない、幸運を呼びよせて、その成果を律するんだよ。…… ぼくの子言の枝〔*diese prophetischen Reiser*〕だって認識の木から折ってくるんだからな」にいう、「予言」を「偶然」にではなく「認識・必然」へと引き寄せる構図である〔登張正實訳『ゲーテ全集 8』潮出版社・1981年・224頁〕。なお、後述Ⅲの2の末尾にいう「天才的な予知能力」を参照。

76 Johannes Straub〔1912-96〕が開設150年を記念する大学入史に寄せた詳細な文献リスト付きのN論として、*ders.*, Barthold Georg Niebuhr 1776-1831, in: *Geschichtswissenschaften. 150 Jahre Rheinische-Friedrich-Wilhelm-Universität zu Bonn 1818-1968 Bonner Gelehrte: Beiträge zur Geschichte der Wissenschaft in Bonn, 1968*, S. 49-78がある。

熱くなった彼は、「キケロのことを本当に分かっている人物に遂に再会したんだ。君も知っての通り、僕は彼にあれこれ思いをめぐらせる。だからこそ、彼にあやかって息子をマルクスと名づけたんだ」。これで二人の間のわだかまりは溶けたようだったが、彼はすぐさま、「君がローマ法とローマ史の非常に辛辣な敵〔*ein so bitterer Feind*〕だとは、どうも理解できないな」とあからさまに言ったのである。私はただちに反論して、「君は僕のことをまったく分かっちゃいない〔*ich ganz belogen seyn*〕」とやり返した〔前注57・S. 405=S. 219〕。ティボーは、『訴訟事件の私的な鑑定書を書けばそれなりに儲かるのだが、古典を読む時間が惜しいからこれまで一度も引き受けたことがないし、専門分野以外でもあらゆる時代の古典を愛して止まない、と言ったものだ』と続ける。

それはともかく、ハイデルベルクを脱したNは立ち寄ったボンにそのまま逗留するが、24年には英国大使のポストを得るべく、また、25年には再び枢密顧問官として国王の諮問に与って、長期間ベルリンに滞在する。後者は彼に親炙していた皇太子の慰留によるが、これを振り切り25年5月に国王の許しを得てボン大学に赴任する⁷⁷。30年の後半を七月革命のドイツへの波及を憂慮して暮らした満54歳のN⁷⁸は、12月24日に肺炎に罹患して翌年1月2日に急逝し、その9日後に妻も亡くなり、二人の亡骸はボンで埋葬された。33年にライン地方の視察の折に詣でた皇太子は、Nの簡素な墓碑の改修を命じブンゼンに墓碑銘の案を諮問したが、結局自ら『ヨハネ福音書11.25』⁷⁹を選んだ。

77 ボン大学での教育・研究については、⑧ *Christian Renger*, Niebuhr als akademischer Lehrer, Wirth編・S. 177-210；⑨ *Gerhard Wirth*, Die Anfänge des Bonner Corpus, Wirth編・S. 211-239；⑤ *Johannes Irmscher*, B. G. Niebuhr als Byzantinist, 後注142・S. 589-592を参照。

78 ⑥ *Ernst Vischer*, B. G. Niebuhr und die Revolution, Wirth編・S. 109-130.

79 新共同訳「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」Vgl., Wirth編・Katalog・S. 327f. なお、Nの墓所の銅版画はWirth編・Katalog・S. 347.

14) 両親が相次いで亡くなったとき、ローマで早世した長男を別にして、14歳のマルクスを頭に四人の幼子が残された。夫妻は、結婚式に際して共同で作成した遺言において、将来の子が両親に先立たれた場合はドーレを教育掛とし義兄ベーレンスと友人サヴィニーを後見人とする旨、定めていた⁸⁰。以下では、四人を起点とする家系を要約しておく。

i) 次男マルクス [Marcus Carsten Nicolaus von : 1817-60]⁸¹ は、リュエックのギムナジウムに進学する。そこは、ボン大学時代のNの受講生であり27年からマルクスの家庭教師としてN宅で起居していたクラッセン [Johannes Classen : 1805-91] の勤務校である⁸²。父ゆかりのキール大学やベルリン大学などで法学と国家学を修めてイギリス、ベルギー、フランスに長期の遊学をしたのち⁸³、40年代にプロイセン政府に出仕する。皇太

80 Vgl. Wirth編・Katalog・S. 328f. なお、S. J. G. Behrens (1768-1828) は、ドーレとNの先妻アマーリエの実兄であり、シュレースヴィヒ公国フューズム [Husum] 郡の郡長としてNとも親密であった。Vgl. Briefe AF Bd. I, S. 50 Fn. 2.

81 Wippermann, Karl, "Niebuhr, Marcus von" in: Allgemeine Deutsche Biographie 23 (1886), S. 662-664 [Online-Version]; Meier, Uwe, "Niebuhr, Marcus von" in: Neue Deutsche Biographie 19 (1999), S. 221f. [Online Version].

82 クラッセンは、1829年に文献学の教授資格を取得したのち、ハンブルクの名門ラテン語学校ヨハネウム学院の校長などを歴任した教育界の重鎮である。トゥキュディデスの校訂・注釈書を著した〔参照：久保正彰訳『戦史』岩波文庫・上 (1966年) 50頁；城江良和訳『歴史2』西洋古典叢書 (2003年) 472頁〕ほか、サヴィニーの勧めでNの『ローマ史』第三部を編集した。

また、Nの回想録をNの三女Cornelieに献呈している。ders., Barthold Georg Niebuhr. Eine Gedächtnisschrift zu seinem hundertjährigen Geburtstage, 1876, S. 181. 同書につき、M. Isler, Johannes Classen, Deutsche Rundschau 1877, 7, S. 159-164をも参照。

前任の家庭教師は、1827年にミュンスター大学員外教授として赴任したグラウエルト [Wilhelm Heinrich Grauert : 1804-52] であり、彼こそがNの直弟子のうちでもっとも強くNの学問を継承しているといわれる [Heinrich Ritter von Srbik, Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart, Bd. I, 1950, S. 219]。

83 1832年2月にSavignyがN家に伝えたNの遺産の内容につき、Wirth編・Katalog, S. 329を参照。

子時代からNに親炙していた国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の推挽によるらしい。彼は、宗務・教育省を皮切りに、50年には政府参事官、翌年に内閣秘書官に任命され、国王と国政に影響力をもち、57年には貴族に叙せられる。公務の傍ら、プロイセンの財務制度や銀行制度に関する著作を上梓し、Nの遺稿集や講義録を編集したほか、四八年革命の際には保守派のジャーナリズムで活躍した。

ii) マルクスの子のうち長男Gerhard〔1845-1903〕は区裁判所判事であったが、その家系を私は確認できていない。娘二人〔GertrudeとHedwig〕は、茶葉の取引で財をなしたスコットランドのTod家の兄弟〔John, William〕とそれぞれ結婚する。そして、Gertrude〔1849-1916〕とJohn〔1847-1916〕との間に生まれた次男つまりNのひ孫が、母方の家名を継ぐ。後のOxford大学Oriel Collegeのフェローでギリシア語碑文の研究者Marcus Niebuhr Tod〔1878-1974〕である⁸⁴。なお、Robert James Niebuhr Tod〔1913-94〕という社会運動や社会福祉の研究者に、Nの生誕200年を顕彰する論考がある⁸⁵。彼の父は76年生まれのJames Niebuhr Tod、母は72年生まれのEdith Mary Todである。父Jamesが前記78年生まれのMarcusの兄である可能性は高いが、私は確認できていない。

iii) 他方、Nの長女アマーリエ〔Amalie : 1818-62〕、次女ルーツィエ〔Lucie : 1820-44〕、三女コルネーリエー〔Cornelie : 1822-78〕の三人も、兄マルクスが進学したリューベックのクラッセンのもとに引き取られる。以下では、Nの顕彰に重要な寄与をすることになる末娘の家系を紹介するにとどめる。

三女Cornelieは、66年にプロイセン領に編入されるまでデンマーク統治

84 参照：久保訳『戦史』・前注82・329頁；*Russell Meiggs*, Marcus Niebuhr Tod, in: *Proceedings of the British Academy*, vol. 60, 1974, p. 485-495.

85 *Robert James Niebuhr Tod*, Barthold Georg Niebuhr, 1776-1831: an appreciation in honour of the 200 th. anniversary of his birth, Cambridge 1977 [未見].

下で大幅な自治を享受していたシュレースヴィッヒ＝ホルシュタイン公爵領の身分制議会の議員で司法大臣のJohann Bernhard Hederich Rathgen〔1802-80〕と50年に結婚した。その息子カール・ラートゲン〔Karl Rathgen : 1856-1921〕⁸⁶ は、東京帝国大学法学部の行政学講座教授〔1882-90〕を経て帰国したのち、1900年にハイデルベルク大学に移籍し、Max Weber〔1864-1920〕の同僚となる。そして、Karlの娘つまりNのひ孫Cornelie RathgenがPaul Witteと結婚して生まれたのが、Nのやしゃ孫でNの洗礼名を継ぐBarthold Carl Witte〔1928-2018〕である⁸⁷。また、Karlの姉つまりNの孫娘Lucie〔1850-1928〕と結婚した経済学者シュモラー〔Gustav von Schmoller : 1838-1917〕は、1904年頃からMax Weberと価値判断論争を展開する⁸⁸。

1831年にNが没して200年近くになる。本稿で辿った「Nゆかりの人々」

86 参照：野崎敏郎「カール・ラートゲンとその同時代人たち——明治日本の知的交流」仏教大学社会学部論集33巻（2000年）17-34頁（30頁注1）。ちなみに、祖父Nに関する彼の論考〔ders., B. G. Niebuhr in seinen Bildnissen, in: Bonner Jahrbücher 125, 1919, S. 1-8〕は、Nの肖像画の所蔵状況などを伝えている。なお、この論考を掲出するStraub・前注76・S. 78は誤植。

87 ヴィッテは、大学で歴史学を修めたのち外務官僚としてカイロ駐在公使〔1974/75〕などを務めた著名な外交ジャーナリストであり、旧西ドイツ外務省文化局長時代に、Nの評伝を出版した〔Barthold C. Witte, Der preußische Tacitus Aufstieg, Ruhm und Ende des Historikers Barthold Georg Niebuhr 1776-1831, 1979, 223 S.〕。

著者はNの講義録の一節を紹介して、《ここには、古代ローマ人の装いのもとで自分の政治的信条を表明する者がいる。あのタキトゥスが享楽生活に満足している同時代人にゲルマン人のあり方を突きつけたように、B. G. ニーブーアは、プロイセン・ドイツの国民は共和政期のローマ人を模範とすべきだと語ろうとしたのである》と述べる〔S. 77f.〕。これが、標題の「プロイセン版タキトゥス」という隠喩のひとつの趣旨である。

88 参照：大林信治『マックス・ウェーバーと同時代人たち』（1993年）27-51頁。Schmollerは、その主著の一つGrundriß der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre, 1. Teil, 1900を、以上の家系を明記して妻に献呈している〔序文末尾：Meiner teuren Frau Lucie, ……der Enkelin B. G. Niebuhrs, der würdigen Tochter der edlen Mutter Cornelie Rathgen〕。

のうち末裔は、やしや孫から次の世代に移りつつある。次節では、これらの人々の活動の一端にも言及する。

Ⅲ. 著作について

1) Nの主著は『ローマ史』である⁸⁹。以下では、複数の刊本を通覧し、主著を補完する遺稿集と講義録の編集について紹介するにとどめる⁹⁰。

i) 『ローマ史 [Die Römische Geschichte]』は、1810/11年冬学期の講義をもとに、1811年に『第一部 [Erster Theil]』、12年に『第二部 [Zweiter Theil]』と題して二分冊で上梓された⁹¹。後続の刊本での『Theil [部]』と『Band [巻]』との混用は、著者自身による初版の序文にすでに見える [Erster Theil, 1811, S.VIII]。以下では、「巻」で呼ぶ。

各巻には、それらを初版と数えて、さらに『全訂第二版 [völlig umgearbeitete Ausgabe]』があり、第1巻についてのみ『補訂第三版 [3., vermehrte und verbesserte Auflage]』がある。1831年に逝ったNの遺稿をクラッセン [前注82] が整理して第3巻 [Dritter Theil] として上梓したのは、1832年であった⁹²。

89 ルネサンスから現代にいたる「ローマの歴史」の研究史とNの位置づけについて、*Alfred Heuß, Römische Geschichte, Neu herausgegeben von Hans-Joachim Gehrke*, Paderborn 2016, S. 569-597 (S. 576-580) の見事な概観を参照。なお、同書は、2010年の第11版の底本でもある1976年増補第4版に対応する部分のみを本体にして、*Hans-Joachim Gehrke, Alfred Heuß: der Geschichtsschreiber als Konstrukteur*, S. 683-693を付したものである。

90 生前と没後に活字化された作品の完全なリストは見当たらない。1817年以降については、*Briefe NF各巻のNiebuhrsche Texte aus dem Zeitlichen Bereich* から再構成できる [Bd. I-2, S. 1002f.; Bd. II, S. 502; Bd. III, S. 642f.; Bd. IV, S. 205]。

91 この二巻本は、Cambridge Library Collection Books of enduring scholarly valueとしてデジタル版及びペーパーバック版として復刻された [vol. 1 and vol. 2, Cambridge University Press 2010]。

92 三部作の英語訳については、【補遺4】を参照。フランス語版の訳者ゴルベリー

当時の出版界では、印刷後に解版した場合、前の版組と全く同一で印刷する〔いわゆる増刷〕にしても改めて版を組む必要があるため、版を重ねたように表記する。そして、この表記が解版の有無に関わりなく印刷を繰り返すたびに用いられる。この意味での諸版を一覧にしておく⁹³。

	初版	第二版	第三版	第四版	訂正版 (Marcus編) 1853年	新版 (Isler編)
第一部 (巻)	1811年 本文455頁	全訂・1827年 本文657頁	補訂・1828年 本文695頁	1833年 本文656頁	第五版 1-350頁	1873年 第1巻
第二部 (巻)	1812年 本文565頁	全訂・1830年 本文710頁	1836年 本文710頁		第四版 353-706頁	1873年 第2巻
第三部 (巻)	1832年 本文732頁	1843年 本文732頁			第三版 709-1084頁	1874年 第3巻

〔Marie Philippe Aimé de Golbéry : 1786-1854〕は、アルザス生まれで弁護士資格を取得して司法畑を歩いたのち七月革命を機に政界に転じてオー・ラン県の議員を務めた。第1巻・第三版を1830年に、第2巻・第二版を34/35年に、第3巻・初版を36/37年に各二分冊で別冊索引 (40年) を付して出版した〔Histoire romaine, traduit de l'allemand de Niebuhr, Paris, vol. 1-7〕。

Nのドーレ・ヘンスラー宛書簡〔1826年7月26日〕によれば、Nは、《訳者に最初のゲラを返したが、彼の語学力からして翻訳はうまくいくだろうと思う》と書いた〔後注131・Bd. 3, S. 173〕。他方、30年5月7日付けの皇太子への書簡では、《私の『ローマ史』のお粗末なフランス語訳は、訳者に予め言っておいたとおりのことになっています。顰蹙をかっているのです。予想外だったのは、原著の見解がこの翻訳によって損なわれていないかが分かるほど読者にはドイツ語が普及していることです。全く役に立たないと巷では言われているにもかかわらず、それに代わるものがないので、この訳が欠かせないとされて、ブリュッセルで分冊による重版の運びとなりました》と述べる〔Briefe NF Bd. III, S. 554. 但し、重版は確認できない。42年刊は別内容である〕。

Briefe NF Bd. IIIが前者を採録しないのは、二通の微妙な齟齬に配慮したためかも知れない。いずれにせよ、後者の通りであるとすれば、ずいぶんと無責任な話ではあるが、「責めは訳者が負うもの」とかわすのかも知れない。『ローマ史』の英語訳の出版経緯からすれば、その可能性も否定できないように思われる〔補遺4の3の末尾〕。ちなみに、訳者はNの没後1ヶ月ほどでNの評伝を発表している〔Golbéry, Notice Historique sur B. G. Niebuhr, Nouvelle Revue germanique: recueil littéraire et scientifique, Février 1831, p. 97-135〕。

なお、イタリア語訳〔Storia Romana, tom. I, 1832 ; tom. II, 1833〕は、原著第1巻・第三版の前半〔原著339頁まで＝『訂正版』173頁まで＝『新版』251

ii) ところで、ローマ史の年代表記には、オリュンピア暦以外に、毎年の政務官名の掲出〔いわゆる官職暦表 (fasti)〕、都市ローマ建設元年からの起算〔ab urbe condita=AUC. ローマ建国暦〕、西暦〔BC/AD〕などがある⁹⁴。たとえば、「プブリウス・セルウィリウスとルキウス・アエブティウスがコンスルだった年(現在通用している数え方では都市建設第291年)〔前463年〕」というモムゼンによる表記〔前注18のI・425頁〕では、〔 〕内の西暦は訳者による補充であり、都市建設第291年を前463年とするのは、著者も前753年をAUC元年に比定する現行のローマ建国暦を採用しているからである〔754年マイナス建国年=西暦(紀元前)〕。これに対してNは、AUC元年を前746年に比定する〔747年マイナス建国年=西暦(紀元前)〕⁹⁵。たとえば、第一次ポエニ戦争終結の前241年は、現行のローマ建国暦ではAUC513年であるが、NではAUC506年である。建国暦におけるこのズレは、最初期のローマをどのように再構成するかに関わるが、N論では研究

頁まで〕と残り後半との二分冊のみである。

93 前表にいう、『訂正版』一巻本につき後注124を、『新版』三巻本につき後注123を参照。『新版』は、『第一部』のNによる序文〔表の□□〕を第1巻に、『第二部』のNによる序文〔表の■■■■〕を第2巻に、『第三部』の編者クラッセンによる序文〔表の_____〕を第3巻に、それぞれ底本の頁付けとラテン語の引用文を省いて、収録している。

94 Arnaldo Momigliano, *The Origins of Rome*, 1981, in: *idem*, *Settimo contributo alla storia degli studi classici e del mondo antico*, Rom 1984, p. 379-436 = *Cambridge Ancient History. Second Edition VII, 2: The Rise of Rome to 220 B. C.*, Cambridge 1989, p. 52-112 = *ders.*, *Die Ursprünge Roms*, in: *ders.*・前注27・Bd. 1 *Die Alte Welt*, 1998, S. 141-202 (S. 146)。

95 N生前刊行の『ローマ史』の表記はN独自のローマ建国暦である。但し、この計算式に合わない箇所が散見される〔このズレの理由の解明は今後の課題である〕。なお、N没後に編集された刊本では、現行の建国暦を()で括って併記あるいは追加している。

生前版を底本とした英語訳についてはその要約版があり、それにオリュンピア暦とNのローマ建国暦と西暦の対照表が付されているが、対照の正確さに疑問が残る。Cf., *Travers Twiss, An Epitome of Niebuhr's History of Rome, with chronological tables and an appendix, Part I, 1836; Part II, 1837.*

が行き届いていないテーマのようである⁹⁶。

『ローマ史』全三巻の各最終版の叙述対象を西暦で辿ると、その下限は、第1巻ではプーブリリウス法〔das publicische Gesetz〕制定の前471年、第2巻では前384年のマルクス・マンリウス・カピトリーヌス〔Marcus Manlius Capitolinus〕の処刑による平和の回復あたり、第3巻では第一次ポエニ戦争終結の翌年〔前240年〕である⁹⁷。このため、「Nゆかりの人々」は前240年以降から少なくとも後476年の西ローマ帝国の滅亡までを講義録などによって補うことを課題として意識することになる。

iii) クラッセンが整理して第3巻とした遺稿の執筆時期は、3つに分かれている。もっとも新しいものは、第2巻初版の改訂に際してその末尾にあったリキニウス法の提案〔前368年。成立は前367年〕からラテン戦争の終結〔前338年〕までの章を第3巻に移すべく、Nが全訂作業を施した遺稿①である〔S. 1-173 = 『訂正版』 S. 698-797 = 『新版』 S. 1-130〕。もっとも古いものは、第一次ポエニ戦争の勃発〔前264年〕からその終結〔前241年〕までを扱った章で、1811年のベルリン大学での講義ノートに含まれておりNによる推敲を経ていた遺稿②である〔S. 657-732 = 『訂正版』 S. 1045-1084 = 『新版』 S. 490-544〕。これらは、やや不正確な引用や事実誤認などを除けばほぼ確定稿とされるので編集に格別の支障はない、とされた。

96 Robert Werner, Barthold Georg Niebuhr und der Aufbau der frühromischen Chronologie Zum 150. Todestag des Politikers und Historikers: † 2. Januar 1831, Chiron Bd. 12, 1982, S. 363-408 (S. 366). この論文の縮約版として、② ders., Niebuhr und die Chronologie des frühen Rom, Wirth編・S. 29-43がある。

なお、自分たちの歴史を語るのに都市ローマの起源から年代を刻んだことがローマの歴史学のもっとも特徴的な産物である点につき、Arnaldo Momigliano, Fabius Pictor and the Origins of National History, in: *idem*, The Classical Foundations of Modern Historiography, 1990, p. 80-108 (p.108).

97 Bd. 1, 補訂第三版〔1828年〕S. 686 = 第四版〔33年〕S. 647 = 『訂正版』〔53年〕S. 354 = 『新版』〔73年〕S. 507 ; Bd. 2, S. 688 = 『訂正版』S. 732 = 『新版』S. 530 ; Bd. 3, S. 731 = 『訂正版』S. 1083 = 『新版』〔74年〕S. 543. 頁数はそれぞれ刊本のそれを指す。

問題は、両者の中間に位置して第3巻の6割強に相当する、前338年から第一次ポエニ戦争の勃発〔前264年〕までを扱う遺稿③である〔S. 174-656 = 『訂正版』 S. 797-1044 = 『新版』 S. 131-489〕。これは、ベルリン大学での講義ノートとは別に、Nがローマからボンに移って1824年から翌年にかけての冬に執筆したものである。この時期にマルクスの家庭教師としてN宅に住み込んでいたクラッセンは、『当時の彼は、既刊の『第一部』と『第二部』を改訂するとは決めていなかった。後年彼が慈しみを籠めて想い出にふけた、ほとばしり出る創造の喜びをもって、彼の建国暦で言えば五世紀にあたるローマ民族のもっともはつらつとして健全な時代を執筆した。数冊の書物をもって書斎を離れ、豊富な知識と活発な直観と熱き心をもって書き進んだ。……その後一度も手を入れないままにしており、死ぬ間際にその写しを取らせた』と回想する〔S. v = 『訂正版』 S. XXIII = 『新版』 S. vii〕。

ここから分かるように、遺稿③に接続する前後2つの期間について遺稿③が前提としていた記述は、遺稿①と遺稿②によってそれぞれ変更されている〔遺稿①⇔遺稿③⇔遺稿②〕。このため、遺稿③の編集では、他の2つの遺稿のみならず、既刊の2つの巻の改訂内容とも整合性を図らなければならない。慎重なクラッセンは、序文でこの作業の概要について報告している。したがって、遺稿③に対応する期間については、序文を丁寧に読むことが求められよう。

2) Nが生前に出版した論文集は、『カルステン・ニーブーアの生涯』〔前注25〕ほか14点を収録した『歴史学および文献学を内容とする小論集・第一集. 地図と碑文図版つき』〔1828年・本文482頁〕⁹⁸のみである。収録論

98 B. G. Niebuhr, Kleine historische und philologische Schriften, Erste Sammlung. Mit einer Landcharte und Inschriftstafel, Bonn 1828. 本稿では、Geschichte, Geschichtsschreibung, Geschichtswissenschaft, Historie, Historik, Historiographieなどの概念史に立ち入る余裕はないので、近似的に、“historisch”を「歴史学」と訳しておく。

文のうちもっとも長文な論考は、『エウセビオスの「年代記」のアルメニア語訳から歴史学が得た収穫』⁹⁹である。教会史の父と称されるエウセビオス〔Eusebios：後260頃-339/340年〕による『年代記Khronik』は紀元後325年までの世界史の概説であるが、その半分程度しか伝承されていなかったところ、1818年にその全文のアルメニア語訳が発見された。Nの論文は、この発見によって歴史学が得た収穫について論じたものである。その構図を紹介しておく。

聖書に拠って人類史を叙述する場合の紀年法としては、天地創造を紀元とする「創世紀元ないし世界年代」やこれを土台とする「アブラハム紀元」などの「聖書年代」があり、エウセビオスもこれらを用いて執筆している。ところが、宗教改革と連動して「聖書年代」も批判の俎上にのぼる¹⁰⁰。古代のすべての暦の正確な復元をとおして近代の年代学を創始したとされるのが、フランス人文主義者の息子でイタリア生まれのスカリゲル〔Joseph Julius Scaliger：1540-1609〕である¹⁰¹。彼がエウセビオスの中途半端な伝

99 Historischer Gewinn aus der armenischen Uebersetzung der Chronik des Eusebius, 1819, S. 179-304.

100 前川貞次郎「『キリスト紀元』序説——『キリスト紀元前』使用の歴史的意義」〔1988年〕、同『歴史を考える』(1988年) 2-27頁。

101 カルヴァン主義者のスカリゲルは、ジュネーヴへの亡命を経て1593年からライデン大学に身を寄せ、エウセビオス論を執筆する〔In Eusebius, Leiden 1606〕。岡崎・前注27・57頁以下；同・前注27の①・31頁以下、177頁以下；Turner・後注102・p. 45f, p. 109；Anthony Grafton, Joseph Scaliger and Historical Chronology. The Rise and Fall of a Discipline, History and Theory 14, 1975, p. 156-185. その父ジュール・セザール・スカリジェール〔Jules-César Scaliger：1484-1558〕につき、二宮 敬『フランス・ルネサンスの世界』(2000年) 379頁以下。

ちなみに、ギボン〔Edward Gibbon：1737-94〕は、14歳頃に年代学に熱中したことを、「私はストラウキウスから年代学の初歩を吸収した。……私はスカリゲルとバタウィウスの、マーサムとニュートンの体系を、私がいずれを原語で研究する機会がほとんどないのに敢て自分の子供っぽい秤りにかけて比較を試みた」と回想する〔中野好之訳『ギボン自伝』(原本初版・1796年、第二版・1815年。1994年) 49頁〕。

承から再構成して得た見解の妥当性が前記の発見によって見事に証明された旨論じたのが、Nの論文である〔Walther・S. 387ff.〕。Nが驚嘆したスカリゲルの「天才的な予知能力〔eine geniale Divination〕」は、Nについても語られることになるN論のテーマである〔前注75〕。

3) Nの遺稿は、生前の論集にいう「歴史学および文献学」という用語を軸にして、「それらを内容とするもの」と「それらを内容としないもの」との二分冊で編製された。ところで、この用語の含意はその担い手や主唱者によって異なり¹⁰²、その含意に応じて、歴史学と文献学の関係の理解も複雑である。このため、書誌的なデータを紹介するにすぎない本稿も、「Nにおける歴史学と文献学の関係」という大きなテーマに、続稿に大きく留保しながらも言及せざるを得ない。

i) Nの没後の編集だが、『若き文献学徒へのニーブーアの書簡』という刊本がある。編者ヤーコブ〔1796-1849〕は、ハレ大学で文献学と歴史学を修めて学位を取得し、プフォルタの公立学校で古典を担当する助教師である。彼は、かつてボンのNの自宅近くに数年住んでいて、会合でNと二度短時間一緒になっただけで親交がないままに終わった。そのご彼は、Nの書簡などで編まれた『Nの生活の消息』第2巻〔後注131〕に採録された「文献学に打ち込む或る若者に宛てた手紙」（200-212頁）に感激して、出版社から転載許可を得て、自作のNの伝記とこの書簡とその注釈や付論を一冊にして出版した〔同書の前書き。本文215頁のうち書簡は20頁にすぎない〕。原著の編者はこの書簡を1822年のものと比定するが、月日や宛名は不詳である。その体裁は、Nが文献学志望の息子をもつ母親からの手紙に「ご両親にはご子息の意向を尊重してください」と返信したのちに息

102 さしあたり、近時の英語圏での「文献学ルネサンス」の担い手による中世の修道院からルネサンスを経てNを含む19世紀中葉頃までの「文献学者」の変遷を概観するものとして、James Turner, PHI・LOL・O・GY 1. The Forgotten Origins of the Modern Humanities, 2014を参照〔Nについては、とくにp. 169f., 204f.〕。

子本人に宛てて書いたというものである。「私は、何を専攻するのであれ文献学がその入り口（*Einleitung*）です、と君のお母さんにお伝えしたと存じます」と始まり、学修の効用や文章作法などについて自分の経験も交えて述べる。しかし、文献学の内容や歴史学との関係に立ち入るものではない¹⁰³。

ちなみに、この書簡の再録版の編者は、大略、《当時、文献学はギムナジウムや大学の教育の中核部分であったが、他方、ともすれば名人による曲芸〔*virtuose Kunstübung*〕に陥りがちであった。これに対抗してNは、この書簡で、文献学の学修が道徳の次元に位置することを想起させ、人格形成の手段となりうる次第を示している。彼が当代随一の歴史家であるのみならず、著名な財政通で経済政策家であることは、文献学の価値を称揚するについて、実生活上の重みを与えている》と述べる〔S. 55〕。

ii) より確実なN自身の証言は、私見によれば、『ローマ史』第1巻・初版の序文にある。その個所を読むには、ベルリン大学で奇しくもNの同僚となったドイツの文献学の大御所と新進に触れる必要がある。一人は、ヴォルフ〔*Friedrich August Wolf* : 1759-1824. グーチ・前注6の上・28頁以下〕であり、ゲッティンゲン大学で文献学を修めた後、1783年からのハレ大学教授を経て、1809年にベルリン大学の創設メンバーとなる。もう一人は、本務校との関係でやや遅れて11年にハイデルベルクから赴任した

103 *Kar Georg Jacob*, (Hg.), *Barthold Niebuhr's Brief an einen jungen Philologen. Mit einer Abhandlung über Niebuhr's philologische Wirksamkeit und einigen Excursen*, Leipzig 1839, 215 S. ちなみに、同書は、前注13で紹介した「名言」を、*Wilhelm Dorow*, *Denkschrift und Briefen und zur Charakteristik der Welt und Literatur*, Th. 3, 1839, S. 19から引用する。また、JacobもDorowも、出版後間もない『Nの生活の消息』に言及する際には、編者不詳のためか出版人の名前しか挙げていない。

なお、この書簡全文を、*Philologische Bildung Barthold Georg Niebuhr*, in: *Michael Maaser und Geritt Walther* (Hg.), *Bildung: Ziele und Formen, Traditionen und Systeme, Medien und Akteure*, 2011, S. 55-60が再録する。

ベーク [August Boeckh: 1785-1867. グーチ・前注 6 の上・31頁以下] である。ちなみに、『広辞苑』〔第六版・2508頁〕の「文献学」の語釈、すなわち「文献の原典批判・解釈・成立史・出典研究を行う学問。また、それに基づき民族や時代の文化を研究する学問。言語学の意にも用いた」では、含意が複線化している。その背景には、ドイツにおける文献学の歴史及びわが国における「ベーク受容」の特殊性がある¹⁰⁴。

没後に出版されたベークの講義ノートで引用されているように¹⁰⁵、
「ヴォルフは文献学を、『ギリシア人とローマ人の行動と運命、政治的、学術的、家政的状态 [mit dem politischen, gelehrten und häuslichen Zustände]、その文化、言語、芸術と学問、習俗、宗教、国民的性格 [National-Charaktern] と思惟方法をわれわれに知らしめ、かくしてわれわれが、彼らからわれわれへと伝えられた作品を根本的に理解し、その内容と精神への洞察をもちつつ、古代の生活を現前に思い浮かべ、それを後代ならびに現代の生活と比較しながら享受するのが巧みになるところの、知識と報告の総体』」と解している [邦訳・65頁]¹⁰⁶。

104 わが国での「受容」の主たる担い手は歴史学者ではなく国文学者であった。

参照：小西甚一『日本文藝史 別巻 日本文学原論』（2009年）4頁以下、207頁以下；畑中健二「山田孝雄と文献学」季刊日本思想史74号（2009年）29-50頁；玉懸博之「村岡典嗣 1884～1946」、今谷 明・大濱徹也・尾形 勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家たち（2）日本編 下』（1999年）163-178頁。

105 A. ベーク著/安酸敏眞訳『解釈学と批判——古典文献学の精髓——』（2014年）は、没後刊行の講義ノート [Encyklopädie und Methodologie der Philologischen Wissenschaften, 1877] の主要部分の翻訳である。Vgl., Thomas Poiss, Die unendliche Aufgabe. August Boeckh als Begründer des Philologischen Seminars, in: Annette M. Baertschi et al.・前注67・S. 45-72; Christiam Hacket/Sabine Seifert (Hg.), August Boeckh. Philologie, Hermeneutik und Wissenschaftspolitik, 2013.

106 F. A. Wolf, Darstellung der Alterthums-Wissenschaft (Museum der Alterthums-Wissenschaft [古代学大全], Bd. 1), Berlin 1807, S. 30. ヴォルフに関する基本文献とされる Reinhard Markner/Giuseppe Vertri (Hg.), Friedrich August Wolf: Studien, Dokumente, Bibliographie, 1999のほか、曾田長人「ドイツ新人

これに対してベークは、文献学とは「人間精神によって生み出されたものの、すなわち、認識されたものを認識すること（*das Erkennen des vom menschlichen Geist Producirten, d.h. des Erkannten*）であるように思われる。所与の知識は文献学によっていたるところで前提され、文献学はこれを再認識（*wiedererkennen*）しなければならない。……文献学の概念は最高義の歴史学の概念と重なり合う」〔傍点は原文〕。そして、歴史学と文献学とは、「……見かけ上、つまりその範囲に関して、異なっているにすぎない。なぜなら、前者は通常その主要事項にしたがえば政治的なものに限定され、爾余の文化生活を国家生活に結びつけて考察するからである」とする〔邦訳・16頁、17頁〕。二人の違いについては続稿に譲る。

iii) ベークが引用するヴォルフの『古代学大全』が出版された07年、前年にナポレオンに敗れたプロイセンは、7月9日のティルジット講和条約により領土の半分を失い、ヴォルフが所属するハレ大学も割譲地域に含まれて閉鎖される。その損失を補う意味もあってベルリンに高等教育機関（後のベルリン大学）を創設する旨の勅令が9月4日に出される。すでに4月から旅行でベルリンに滞在していたヴォルフも、有力な大学人の一人として人事構想の意見を求められる。しかし彼は、ナポレオン支配下の新政権のもとで大学が再開されればハレに戻る心積もりであったようである。このようななか、改革官僚の一人であったNは、翌08年1月4日に政府首脳にヴォルフ獲得の必要性を訴える。

プロイセン改革での上司シュタインには、「学識が確かでドイツで存命している唯一の人物をわれわれが逸するとすれば、実に残念なことです。私は古代学についての彼の近著をこれまでのどの文献よりも興味深いものとして閣下にお薦めします」と書く〔Breife AF Bd. I, S. 435f.〕。そして、財務担当の同僚アルテンシュタイン〔Karl vom Stein zum Altenstein :

文主義の近代性と反近代性——F・A・ヴォルフの古典研究を手がかりに——」
思想1023号（2009年7月号）48-65頁を参照。

1770-1840) には、「私は、大臣〔シュタイン〕に、皆がベルリンに引き留めようとし本人は去りたがっているヴォルフについて、〔逸したりすれば〕プロイセンの将来にとっていかに嘆かわしいことになるかを書き送った。……ベルリンの人すべてがそう思うとまでは言わないが、真の文献学者というものが国家には不可欠なのだから、ヴォルフがベルリンに留まらないなら、貴兄はこの私に大学での文献学者としての活動の場〔eine philologisch-akademische Tätigkeit〕を提供しなければならなくなる。われわれの子孫がいつの日か自由を回復することがあるとすれば（もちろん私には大いに疑問であるが）、その基礎を提供するのは文献学を措いてない。イギリスで大いにそうであったように、かつては君主から議員に至るまで、また、貴族から職人に至るまで、誰しも古典古代史を読んだものである。そのようにしてこそ、〔ギリシア人がペルシア戦争で敵軍を退けた〕テルモピュライの戦いやマラトンの戦いで見られた、その現代版に匹敵する（本物には及ばないまでも）不屈の勇気が育まれうるのである」と力説する〔Briefe AF Bd. I, S. 437f.〕。

iv) この説得の成果であるかは不明だが、ヴォルフは破格の年俸で創設メンバーとなる。しかしヴォルフにこれほど心酔したNは、11年の『ローマ史』第1巻の序文で「文献学と歴史学」について次のように宣言する。そこでいう「批判家」としてNの念頭にあったのは、ヴォルフと解されている〔Walther・S. 335f.〕。

「われわれは、〔ローマの黎明期を語る〕詩とその改ざんとを識別すべく務めなければならないと同時に、〔真理を〕塗り込めていたものから自由になったなら、真理の痕跡を認識すべく眼を凝らさなければならない。〔文献学を事とする〕批判家〔Kritiker〕なら、前者、つまり、作り話を切り離したり欺瞞を打ち壊したりすることで満足するかもしれない。彼は、偽りの歴史を暴露するにすぎない。〔せいぜいのところ〕彼は、あれこれ憶測することで満足してしまい、全体のか

なり大きな部分は、ばらばらの破片のままに取り残される。しかし、歴史家には積極さ〔Positives〕が必要である。彼は、少なくとも、自分が打ち込んでいる箇所について、蓋然性をもった脈絡を見出さなければならないし、とても考えられそうにない説明であってもそれを見出さなければならない。過ぎ去った時代のぼんやりとした影を掴まえたと考えるにもかかわらず、その探究を著作自体から切り離しでもすれば、その探究を活用することを断念せざるをえないことになるし、表面を繕って、仮説や頼りない可能性にしかすぎないことを思い上がって向こう見ずにも歴史の真理だと言い立てるような危険を冒すことにもなる。それこそ、世に問う文書にふさわしい品格に対して高価な代償を支払うことになってしまう」¹⁰⁷。

語学の達人であったNは、何ら断ることなく古典語や近代語を自由自在にドイツ語化して用いる。ここでの「Positives」はラテン語「positivus」のドイツ語化であろう。Nによる含意は、この単語の2世紀から6世紀の語義の一つである「自然にそくして存在しているものではなく、技芸

107 Bd. 1, 1811, S. X = 『訂正版』S. X = 『新版』Bd. 1, S. XXII. ここでは、Nのいう意味での文献学が關った懷疑主義〔後注186〕と関係づけて、懷疑と表裏一体の「判断停止」とは逆方向のベクトルというイメージで「積極さ」と訳した〔木庭・前注1の①・68頁は「事実を具体的に肯定すること」と理解し、坂口・前注9・172頁及び前注10・熊谷④・12頁は「建設的な（る）もの」と訳す〕。私見によれば、たんなる懷疑に対抗して、徹底的な懷疑による探究を尽くした後、そこで立ち止まるか、さらに進むか、という問題である。

かさねて私見によれば、Nのいう「歴史家」には、「生起したとされる事柄」の扱い方に応じて広狭二義がある。便宜的に5 W 1 Hを用いて整理すれば、① Why以外の5つのファクター〔＝狭義の歴史〕を文献学の手法によって批判的に同定するのにとどまる「批判に終始する歴史家〔kritischer Historiker〕」と、② 同定された事柄の背景についてwhyの観点から究明して判断を下す「判断にまで踏み込む歴史家〔urteilender Historiker〕」である。さらにその先に、過去と現在との違いに敏感な「真の歴史家」が位置する〔詳しくは、『ローマ史』の序文についての続稿に譲る〕。

「*Kunst*」によって構成されたもの」に近いと思われる¹⁰⁸。つまり、文献学者から歴史家への転進は、批判から構成への進展とも言える。Nはそのためにどのように装備を整えたのか。問題は、この「積極さ」を発揮する「方法ないし技芸」へと収斂する。そして、この「構成志向〔Positives〕」は「実証主義Positivismus」〔前注1〕とも関わるであろう¹⁰⁹。

この問題は、一方では、イギリスで得たものの発酵と屈辱的なティルジット講和以降の政治過程〔とくに、07年の「十月勅令（農民解放令）」以降の農民政策や改革をめぐる政権内部での軋轢など〕を、他方では、ベークに至る文献学の系譜をも踏まえて検討すべきテーマである。なお、ヘーゲルが批判し〔前注8〕、モムゼンが回避した〔後注126〕「脚注を多く付けて研究と叙述が交錯し叙述と論証の均衡が取れていない」というNのスタイルは、この序文からすればNにとって不可避であったと思われる。

4) 1842年から58年にかけて出版されたNの遺稿集〔2冊〕と講義録〔10

108 “Positiv, Positivität”, in: Joachim Ritter und Karlfried Günder (Hg.), Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd. 7, 1989, S. 1106-1118 (J. -G. Blühdorn/Ch. Jamme) (S. 1106). なお、“positivus”は、「恣意的な、Arbitrarily imposed」とも訳される〔水谷智洋編『羅和辞典〈改訂版〉』(2009年) 500頁; P. G. W. Glare (ed.), Oxford Latin Dictionary, 1982, p. 1409〕。こちらの含意は、『ローマ史』での「とても考えられそうにない説明」を「空想の産物〔Phantasie〕」として一笑に付す反応とも通底する。

109 坂部 恵「第二十講 功利主義と実証主義」、同『ヨーロッパ精神史入門』(1997年) 153頁によれば、実証主義の基本規則とは「特殊なものにせよ普遍的なものにせよ、ある事実の単純な言明に、厳密に還元可能でないすべての命題は、実在的に理解可能ないかなる意味をももたらしえない」というものである。この表現を借りれば、Nにおける実証主義では、「歴史学によるすべての命題は、文献学によって確定された言明に、厳密に還元可能である」となろう。

問題は、この還元可能性を担保するための、言明と命題との媒介項である。それは、『古事記』研究の第一人者の表現を借りて単純化すれば、「言明」へと至る「研究における技術や操作の『精密さ』(Exaktheit)」とは区別される、「命題」へと進む「思考や精神の『厳正さ』(Strengheit)」とも言えよう〔参照：西郷信綱『古典の影 学問の危機について』(平凡社ライブラリー・1995年) 23、44頁など〕。

冊〕は、次男マルクスと教え子イスラー〔Meyer Isler : 1807-88〕とが分担して編集した。本人の校閲を得られないこの種の編集ものに纏わる問題は、その信頼性である。マルクスがNの書簡を遺稿集に収録するに際して文意を左右しかねない箇所を省いていたことの指摘を捉えて、彼による編集全般の信頼性を疑問視する論者もみられる〔Briefe AF Bd. I, S. 468 ; Rytönen・前注14・S. 17〕。

他方、講義録のみの編集に当たったイスラーは、解放ユダヤ人第一世代であり、秀逸な文献学部門を擁すると考えて27年にボン大学に進学し、自身の回想記のなかで「無二の親友」と呼ぶクラッセン〔前注82〕と共にNの講義に感銘を受ける。卒業後は、生涯故郷ハンプルクの図書館の司書を務め〔1832-83〕、その傍ら多くの著名人の著作や遺稿などの編集に携わった¹¹⁰。このようなキャリアの差が編集に反映していないとは考えにくいであろう。しかしそれ以前に、Nの講義録の活字化については、後述の彼の講義スタイルの問題がある。ともあれ、Nの遺稿は、マルクスが前記『小論集』のNによる編製に対応させて二巻にまとめた。

第1に、1842年の『文献学以外の内容のB. G. Niebuhrの遺稿』〔本文

110 イスラーの人柄や当時のボン大学の模様を、イスラーが一人娘Sophie〔1840-1920〕の夫Otto Magnus〔弁護士：1836-1920〕の一族と友人のために執筆した回想録〔E. Zimmerman, *Erinnerungen des Hamburger Bibliothekars Meyer Isler (1807-1888)*, nach Bearbeitung von Helene Lilien, in: *Journal of the Hamburg Historical Society*, 47 (1961), p. 45-86〕が伝える。

その抜粋が、Rudolf Magnus Physiologist and Pharmacologist 1873-1927 A Biography by Otto Magnus, ed. by Louis M. Schoonhoven, 2002, p. 12-18に収録されている。ちなみに、Rudolfは、Sophie夫妻の息子でユトレヒト大学の初代の薬学教授であり、ノーベル生理学医学賞の最有力候補と目されながら急逝した。Rudolfの前記の伝記を執筆したOtto〔1913-2014〕は彼の息子である。

1867年にOtto Magnusと婚約したSophieについては、解放ユダヤ人第二世代の女性史という観点から、1888年の実父イスラーの他界までの彼女の生活を本人の約4000通の書簡をもとに描いた作品がある〔Martina G. Herrmann, *Sophie Isler verlobt sich. Aus dem Leben der jüdisch-deutschen Minderheit im 19. Jahrhundert*, 2016, 375 S.〕。

526頁¹¹¹。本書は、推敲ずみのものとそうでないものから編製されている。前者では、本書の過半を占める1808年のオランダ駐在時代の回付状〔S. 1-314. 前注64〕が採録され、Nの生前の意向により論争的性格の強い論考¹¹²は省かれ、一過性の関心しか惹かないと編者が判断した論考も採録されなかった。後者の完成度はまちまちであるが、その採否は編者の判断による。

第2に、1843年の『歴史学および文献学を内容とする小論集・第二集』〔本文275頁¹¹³。本書でも、編製対象となる文章の2つのパターンは42年の論集の場合と同様であり、その採否も編者に委ねられている。但し、論争的性格の強い書評1編¹¹⁴がNの意向に反して収録されたのは、《ギリシア古代に関するNの見解を知るには、この書評が適切だからで……、筆が走りすぎていて悶着の種になりそうな箇所は削除したし、生前にNは著者と関係を修復している》という編者の判断による〔S. IVf.〕。

5) Nの講義録の出版は、ボン大学での講義のみである。長期出張による

111 B. G. Niebuhr, Nachgelassene Schriften B. G. Niebuhr's nichtphilologischen Inhalts, Hamburg 1842.

112 具体的には、プロイセンがザクセンを併合して大ドイツを建国すべしという献策、及び、プロイセンにおける秘密結社の嫌疑による告発に対する反論〔補遺1の①・②〕を指す。

113 B. G. Niebuhr, Kleine historische und philologische Schriften, Zweite Sammlung, Bonn 1843.

114 Rezension über "Ideen über die Politik, den Verkehr und den Handel der vornehmsten Völker der alten Welt" vom A. H. L. Heeren. Dritter Theil. Europäische Völker. Erste Abtheilung. Griechen. 1812. 1813〔S. 107-157〕. Nは、この書評で著者〔Arnold Hermann Ludwig Heeren : 1760-1842〕の知識不足を痛烈に指摘した〔Walther・S. 308f.〕。

この著者は、「博物誌的、百科全書的な万国史が優勢を誇った十八世紀の啓蒙主義時代の後、世紀の転換期にギリシア起源の普遍史的叙述がドイツで復活したが、その先鞭をつけたのが、A・H・L・ヘーレンの『古代諸国家史教本——その国制・通商・植民に留意して——』（初版、1799年）であった」と評される〔ボンペイウス・トログス ユニアス・ユスティヌス抄録（合阪 學訳）『地中海世界史』西洋古典叢書（1998年）505頁・訳者解説〕。

1828年夏学期の欠講を除き、25年夏学期から30/31年冬学期まで11学期にわたって、毎学期1科目（例外的に29年夏学期は2科目）で全12科目が提供された¹¹⁵。それらの講義録は、25年夏学期にのみ開講されたギリシア史とNの急逝で途絶した30/31年冬学期を除く、9タイトル・全10冊として編製された〔以下の丸中数字については補遺3を参照〕。

i) その第1分冊〔①〕の編者は、開講時には12歳にすぎなかった息子マルクスである。序文は、講義録の編集方針について大略つぎのように述べる〔S. IV-IX〕。すなわち、《Nは講義ノートを作成せず自在に話した。たまにメモを使ったがそれらは遺っていない。編者は、受講者のノートに頼るしかない。しかし、Nの講義は聴いていて筋を辿るのが難しいうえに、講義の肝となる警抜な指摘を聞き逃すこともありうる¹¹⁶。もっとも、この分冊①・②の講義は、同時代史の講義なので、他の文献学の講義とは違って予備知識のない受講者もノートを取るのに苦労しないから、ノートの信頼性は高い。完璧は求めがたいが、複数のノートを比較対照して、最大公約数をもって再現する。但し、現存する者について言及した数箇所は削除した。理解しにくい文章であっても全体を書き換えることは極力避けたが、やむをえない場合には、代替文を欄外に置いた。講義の本質的な内容は確保されているし、その形式にしてもNの叙述スタイルに慣れ親しんでいる人にとって違和感はなからう。本書が提供せんとするのは、Nの生の証しであって、〔フランス〕革命の歴史ではない。さりながら、登場人物の名前や年号に思い違いがある場合は断りなしに訂正したし、曖昧な箇所は別の史料で補った。また、本書がNの生の証しである以上、本書の冒頭にN

115 Wirth編・Katalog・S. 272fが、各開講科目の名称や受講登録者数を一覧にしている。全学生数1000名弱に対して、各科目の登録者は90名前後から150名前後である。

116 この点について編者は、Nのベルリン時代の講義についてのサヴィニーの回想文〔後注131の④〕を援用する。

の政治的見解に関わる論文や書簡を配することとした¹¹⁷》。

こうして編集された「同時代史」の講義録とは、①・②『革命の時代の歴史』二巻本〔1845年、本文339頁・410頁、索引なし¹¹⁸〕を指す。学生に請われて1829年夏学期に行なった「最近40年の歴史」と題する講義である。13歳で革命に際会したNは、父やその人脈を通じて、革命の進行についてリアルタイムの克明なノートを作成したり、財務大臣シンメルマンの庇護のもとメルドルフ近郊に避難していた王党派の人々を訪れたり¹¹⁹、革命に批判的なパーク〔Edmund Burke : 1729-97〕のフランス革命論¹²⁰にも接した。Nの「保守性」の分析は、ゲーテやサヴィニーのフランス革命観とともに、N論のテーマの一つである〔Walther・S. 40f.〕。

ii)「歴史学および文献学」の講義とされる8タイトル全8冊は、四層または三層の書名のもとで統一的に編集されており、その掲出は煩雑であり行論を乱すので【補遺3】に譲る。以下では、先にマルクスによって聴講者の予備知識不足が指摘された古代史の講義ノートの復元について、編者の弁を確認しておく。

46年に刊行が始まる古代史の講義録の第1部門は、建国から西ローマ帝国滅亡までの「ローマ史」である。（途中尻切れトンボになった学期もある）

117 分冊①の冒頭で「政治的アフォリズム」と題して、『ローマ史』、政治論文〔補遺1の①・②〕や書簡からの抜粋を採録する〔S. 1-34〕。

118 ①・② B. G. Niebuhr, Geschichte des Zeitalters der Revolution, Bd. 1 und Bd. 2, Hamburg 1845. 熊谷・前注10の⑤は、本書に拠って、フランスの政治家についてのNの個別評価を紹介し〔119、126頁〕、また、ナポレオンによる共和国（総裁政府）の転覆（ブリュメール18日のクーデター）に対するNの肯定的な評価を彼の統治観と関連づけて整理する〔200頁〕。

119 そのなかにフランス民法典の父ポルタリス〔Jean-Etienne-Marie Portalis : 1746-1807〕とその息子〔Joseph : 1778-1858〕がおり、後にNはナポレオンの動向について（父子のいずれかは不明だが）書簡を送っている〔1801年4月11日付け。Briefe AF Bd. I, S. 266-272 ; Walther・S. 60, 117〕。

120 エドモンド・パーク著/中野好之訳『フランス革命についての省察』〔1790年〕岩波文庫・（上）（下）・2000年。ちなみに、そのドイツ語訳は1793年に出版された〔熊谷・前注10の⑤・30頁〕。

るが) その講義は、対象時期を3つに区切って1826/27年冬学期、1828/29年冬学期、1829年夏学期と順を追って開講された〔補遺3の③～⑤〕。イスラーは、「編者序言」で編集方針について大略つぎのように述べる〔③・S. V-XII〕。

《編者は、託された聴講者のノートをできるだけ注意深くかつ入念に扱った。かなりの数のノートを比較校合し、本書の価値を確保するために、〔Nの遺稿やメモなど〕手もとのすべての素材を厳密に調べて検討した。編者の仕事は、大学の聴講ノートにつきものの字句の様々な異同について勘合し出来るだけ真の本来のテキストを作り上げるという純粹に文献学的なものであった。自分の側から註を付したり文章を追加したりすることが、編者にそもそも許されているのか、許されているとしてもどの程度までかは、難しい問題であった。引用箇所を示したり、他の研究者を引いたりして学術書の体裁を整えることは、難しくはなかったであろう。しかし、この企画の趣旨からして、それは取りやめた。ここで提示しうるのは手を入れたローマ史ではなく、こだわるべきは生きた言葉なのである。…… 若干の友人は近時の研究を付け加えるように奨めたが、それにも応じなかった。研究というものとは現在進行形であって、定説にまで熟してはいないものが多いからである。あれこれ諸説を並べることは、ためになるどころか混乱のもとである。若干の箇所で「編者註 (A. d. H.)」を置いたが、その多くは、本来の校訂や開講年度によるノート相互の異同に関するものであり、稀に、既刊の『ローマ史』に当たっても見つからない典拠を掲出した。本書の叙述対象の一部は、『ローマ史』と重なる。にもかかわらずその部分のノートも本書に収めたのは、なによりもNの講義の全体像を示すことに意義があるからだ、活字版よりも分かりやすい箇所もあるし、講義期間は第1巻の全訂作業や補訂作業と重なってはいるが、Nの絶え間のない研究はその作業ののちに得た知見をも講義

で提供しており、この講義こそが「最終版」といえるからである》〔下線は引用者〕。

iii) 47年から刊行される第2部門の編者はマルクスであり、内容は1826年夏学期と1829/30年冬学期（但し、Nの自宅の火災により中断し30年夏学期に補講）に開講された古代史講義である〔補遺3の⑥～⑧〕。講義名称は「ユスティヌスの流れに拠る古代史〔Alte Geschichte nach Justins Folge〕」であり、大学の講義カタログによれば「ユスティヌスの書で維持されている順序と範囲による古代の歴史〔historia aevi antiqui, eo ordine iisque limitibus qui in Justini libris servantur〕」である。その下限は、前30年のオクタウィアヌスによるアレキサンドリア占領である〔⑥・S. VI〕。ユスティヌス〔Marcus Iustinus：後2/3世紀〕は、ポンペイウス・トログス〔Pompeius Trogus：前41頃-後1世紀初頭〕の『世界史』44巻を要約した史書「ピリッポス史〔Historiae Pilippicae〕」の著者である¹²¹。マルクスは、開講学期に応じて二種類のノートがあるが新しい方が優っているとする〔S. IX-XIII〕。また、編集方針は大略つぎのようである〔S. VI-VIII〕。

《作業のうち文献学的な部分の大半は、引用の間違いを改め、疑問のある箇所について史料にそくして内容を決めることである。全体として見れば非常に簡単なので、編者は若手の文献学徒Spiro氏の助けを借りて十分な成果を挙げることができる。残りの作業は主として、Nのものの考え方や見方について正確さを期して知らしめることである。編者は、こちらは独りでやりこなせると感じているが、そこまでの勇気がないので、やはりSpiro氏の世話になった。彼は、ノートの校合という極めて労多くして時間もかかる仕事を引き受けてくれたばかりでなく、この巻のかなりの部分について校訂版草稿を作成してくれた。イスラーの支援も受けた。》

121 前注114の合版訳の解説〔開講時期に関する記述（507頁）は不正確である〕のほか、岡崎・前注27の②・52頁以下を参照。

やや気楽なマルクスではあるが、序文の末尾では次のように述べる。すなわち、《前作『同時代史』の講義録の編集のときと同じく今回もそこの原則に従った。ノートにない加筆は細心の注意を払って避けたし、ノートにあるNの一言一句まで念を入れて拾った。前作について、〈毎回の講義の分量のバランスが校訂の際に作為的に図られたのではないか〉という疑念が寄せられたが、誠に遺憾である。Nと血肉を分けた者にはそういう勝手なことが許されると私が考えたのなら、ほかの箇所でも変更を加えるばかりか、筋肉や四肢が欠けている場合にはそれを補うのが義務だということになってしまうだろう。》

6) 1845年から順調に運んだ講義録の刊行は、51年のイスラー編の9冊目〔補遺3の⑨〕を上梓して中断した。イスラー編の最終巻の刊行が58年まで遅延したのは、編者の「本務の多忙と健康上の事情」によるものであった〔⑩・S. VII〕。この間、マルクスは、自分が担当する講義録の編集を終え、53年に『ローマ史』全三巻の改版を上梓して60年に没する。他方、58年に講義録の最終巻の刊行を終えたイスラーは、63年に亡くなった政治家の浩瀚な全集などの編集に携わり、71年にそれを終える¹²²。この流れを見るかぎり、「Nゆかりの人々」によるNの顕彰は、58年で完結したように思われる。にもかかわらず、73/74年にイスラーが『ローマ史』三巻本を『新版』と銘打って上梓する¹²³。以下は、『ローマ史』の二回目の改版に関する私の憶測である。

i) 前述のように講義録の出版スケジュールは頓挫するものの、マルクス

122 解放ユダヤ人第一世代のイスラーは、ユダヤ人の解放に尽力した政治家Gabriel Riesser [1806-63]の友人でもあり、その全集をハンプルクのRiesser財団からの委嘱によって編集したほか、その伝記を出版した〔Gabriel Riesser's Gesammelte Schriften, 4 Bde., 1867/68; Gabriel Riesser's Leben nebst Mittheilungen aus seinen Briefen, 1871〕。

123 B. G. Niebuhr, Römische Geschichte, Neue Ausgabe von M. Isler, Bd. 1, 1873, 514 S.; Bd. 2, 1873, 547 S.; Bd. 3, 1874, 544 S. Register CXL S.

は、53年に、Nの没後は間歇的に一度しか増刷されていない巻を含む『ローマ史』全三巻を浩瀚な一巻本の『訂正版〔Verrichtigte Ausgabe〕』として刊行する。これは、第1巻から第3巻を全一冊〔本文・1084頁、索引・二列組み・100頁〕に改編したものである。しかし標題は、各巻をそれまでの（増刷を含む）最終版を改版したものとして表示する〔前表を参照〕¹²⁴。本書は、既刊分のたんなる合本ではなく、各巻の最終版にNの手沢本や遺稿などによる補正や誤植の訂正を加えており、新たな序文を付し、（増刷を除く）すべての版の序文を収録し、底本と『訂正版』との頁対照目次を掲げている。また、補正は基本的に本文に手を加えずに脚注で対応している。

さらに編者は、《旧版からの引用箇所を本書で確認する際の不便さに対処するために、各巻の最終版の頁数を欄外に付記した》〔S. VII〕。『訂正版』が原著刊行当時の名称で呼ぶ『第一部』ではNの生前に刊行された第1巻・補訂第三版〔28年〕の、『第二部』ではNの死の前年に刊行された第2巻・全訂第二版〔30年〕の、また、『第三部』ではNの没後に刊行された第3巻〔32年〕の頁数が、それぞれ欄外に付記されている。慎重を期すには、前述の講義録第1部門のみならず、『訂正版』（ないしそれを底本とするイスラー編『新版』）を参照する必要がある¹²⁵。

124 B. G. Niebuhr, Römische Geschichte, Berichtigte Ausgabe in einem Bande, Fünfte Auflage des ersten Theils. Vierte Auflage des zweyten Theils. Dritte Auflage des dritten Theils., Berlin 1853, S. viii.

125 この点に配慮したのか、Heussは、『ローマ史』を、初版は（ ）で括ってオリジナル版で、また、第2版以降では『訂正版』の頁と（ ）で括った底本の頁を併記して引用する〔Heuss・S. 10〕。たとえば同書126頁注17で言えば、（RG I¹ 381）は（第1巻初版381頁）を指す。また、RG 231（I³ 455）は『訂正版』231頁（＝第1巻第三版455頁）を指す。但し、後述の経緯から、第三版455頁は第四版〔33年版〕では431頁に当たる。

ちなみに、熊谷・前注10の④・156頁注（2）は、『ローマ史』の初版と第二版や講義類の存在を指摘したうえで「完成期の思想を再構成した」とするが、マルクスの『訂正版』やイスラー『新版』への言及は見られない（もちろん、そ

なお、各巻の最終版の脚注で参照を指示されている本文の箇所については、校正者のミスで最終版での頁数が『訂正版』のそれと入れ替わっており、編者が印刷所からの連絡で気づいたときには何ともしがたかったようである〔S. VII*〕。また、前表の第1巻・第四版〔33年〕は、1頁の行組みを第三版の33行から34行に変更したので、頁数が大幅に減っている。このため、第1巻については、第四版からの引用頁の箇所を『訂正版』（ないしそれを底本とするイスラー編『新版』）で確認する（あるいはその逆の）場合には、かなり不便である。

ii) 問題は、その20年後、1873/74年のイスラー編『新版』三巻本の背景である。この間、54年から56年にかけて出版されたモムゼンの『ローマの歴史』三巻本が読書界を席卷する¹²⁶。この波に直面して、Nの『ローマ史』で育った世代がある種の「巻き返し」を図ったとしても不思議ではなからう。私には、イスラーが「頁付けなどでは、著者の子息マルクス・ニーブールによってまとめられた1853年の一巻本のそれに全面的に従う」としながらも、その第1巻に17頁に及ぶ「前書き〔Vorwort〕」を付して標題に『新版』を冠したのには、この「巻き返し」が暗示されているように思われる。いささか長くなるが、「前書き」の核心部分を引用しておく。彼は、モムゼンの学識の広大さとその三巻本の斬新さや評判を縷々述べたあと、彼に対する異論が久しく著されなかったことを指摘して、次のように続ける〔下線は引用者〕。

「われわれは、ローマ史のある部分を再び新しい基盤のうえに置いて

のことに論旨との関係は別問題である）。

126 Theodor Mommsen, Römische Geschichte, Bd. 1-Bd. 3, 1. Aufl., 1854-1856. 参照：長谷川訳『ローマの歴史』〔前注18〕の「訳者解説」、Iの445頁；IIの416頁「モムゼンは学生時代に若くして、ニーブールには「光輝と誤謬が併存している」と断じている。両者の差ははっきりしており、…… 外的には、ニーブールの『ローマ史』が脚注を多く付けて研究と叙述が交錯し叙述と論証の均衡が取れていないのに対して、モムゼンの『ローマの歴史』はあくまでも「読める歴史」を志している ……」。

将来への展望を開くような成果を報告することができる。なかんずく、〔Nの没後に研究者となった〕K・W・ニッチ¹²⁷のつい最近出版された作品『ローマ年代学』（73年）がそれに算えられる。彼こそ、モムゼンの『ローマの歴史』と史料との関係を問うて様々な真摯な異論を唱える、同書の初版この方ほとんど唯一の人物であった。彼はきわめて詳細にこの点について述べている。年代記作者たちの記述のなかに彼らが依拠した基礎を見つけ出そうとしたのは、Nがもたらした多大な進歩であった。しかしそれは、モムゼンによってごく一部しか利用されていなかった。……『ローマの歴史』は、この発想を脇へ押しやって別の道に曲がってしまった。ニッチと彼の弟子ニッセン¹²⁸は、

127 ニッチ〔Karl Wilhelm Nitzsch : 1818-80. グーチ・前注6の上・114頁；長谷川訳『ローマの歴史』（前注18）Ⅳの429頁〕は、キール大学やベルリン大学を経て、キールで教授資格を取得したのち歴史学の正教授となり、62年にケーニヒスベルク大学に移り、しだいにドイツ中世史に比重を移した。彼は、史料及び社会史的視点に関するNの思想を忠実に継承したと評され〔Heuß・前注89・S. 579〕、キール大学総長として1831年1月20日付けでラテン語の弔辞をNに捧げている〔その全文はJacob・前注103・S. 221-227〕。

Nitzschの以下の論考は、Nの『ローマ史』に対する国内外の批判とこれに対するN側の応答を知るうえで有益である。Über den neuesten Stand der Geschichte der römischen Republik, Zeitschrift für Geschichtswissenschaft 4, 1845, S. 229-271；〔Rezention〕, HZ 1, 1859, S. 210-219. なお、NをめぐるNitzschやNissenとMommsenとの対立につき、Heuss・S. 23f.；Wilfried Nippel, Klio Dichtet Nicht Studien zur Wissenschaftsgeschichte der Althistorie, 2013, S. 130 Fn. 168を参照。

128 ニッセン〔Heinrich Nissen : 1839-1912. グーチ・前注6の下・225頁以下〕は、Nの「故郷」メルドルフのギムナジウムを経て56年にキール大学に入学し、Karl Wilhelm Nitzschの指導を受け、59年冬学期からの2セメスターはベルリン大学でMommsenらの講義を受講し、再びキール大学に戻って63年に学位を取得したのち、同年から66年までのイタリア留学を終えて、67年にボン大学で教授資格を取得した。Nの路線を堅持したが、期待されていたNの伝記はむなしく〔Heuss・S. 25〕、86年のADBへの寄稿〔前注2〕を遺したにとどまる。

なお、Walther・S. 580はニッセンのキール時代の師をGeorg Wilhelm Nitzsch〔1790-1861〕とするが、Georgは1852年からLeipzigでギリシア文献学を講じた人物なので辻褄が合わない。

再びこの発想に立ち返って、どれほどの成果がそこから得られるかを、さらには、そうすることでどれほどの見当違いが避けられうるのかを示したのである¹²⁹。」〔S. XVII〕

「…… われわれは、Nがかくも輝かしい成果をあげた道に再び立っているのである。したがって彼の作品を研究仲間に再利用してもらう企ては、それだけで正当化される。われわれは、学問がNの死からこのかた四十年において何の進歩もしていないなどとは毛頭考えていない。比較言語学研究とりわけラテン語研究、文学史、文献史料および碑文史料といった分野で達成された多大な収穫は、われわれによって無視も過小評価もされるべきではない。しかしNの作品を傑出したものとしているいろいろな長所は不朽である。この作品がもつ倫理的な価値、真理への変わることのない愛、彼が受講者に厳しく言い聞かせた『神が見守るなかでの良心にしたがった生活態度』¹³⁰、すべての歴史の広範な領域を展望することから彼が獲得したローマ人を描く際の実り豊かな比較の視点、可能なことと不可能なことを区別する政治的経験、状況や出来事を叙述するのに必要とされる事柄すべてを抜群の記憶力と相まって彼に提供した博識、そういったものが彼の作品を、時空を超えて真の学問を促進するために力を発揮するような書物つまり *κτῆμα ἐς ἀεί* [とこしえの財産] にしたのである。」〔S. XVIII〕

129 順番は、H. Nissen, Die Untersuchungen über die Quellen der 4. und 5. Decade des Livius, 1863 [学位論文に加筆したもの] が提示した見解を、K. W. Nitzsch, Die römische Annalistik von ihren Anfängen bis auf Valerius Antias. Kritische Untersuchungen zur Geschichte der älteren Republik, 1873が支持したという構図である〔参照：木庭・前注1の①・99頁；W. Nippel・前注127・S. 126 Fn. 154〕。

130 イスラーの原注は、*Vortäge über römische Geschichte I*, S. 75 [補遺3の③]を指示する。Nは、この講義のイントロダクションとして、古代史の基礎史料や先行業績などを紹介したのち、古代史を学ぶうえで基盤 (Basis) として要求される資質として、「一切の恣意的な語源遊びを排するだけの健全で優れた文献学＝文法学の感覚」などを挙げ、最後にこの戒めを述べている。

そして、つぎのように締めくくる。

「…… 編者は、〔Nの没後に〕対象の考察が辿った筋道に注意を向けてもらうために、しかし賛否いずれかの肩をもつことなく、もっぱら展開の跡を辿ることを目指す者の便宜を図るために、少数の引用を付け加えた。…… おそらく編者はあれこれの論考を見逃しているかも知れないが、文献が多すぎて一人では必ずしもすべてを入手することができないし、初めからこの目的のために収集したわけではないので、なにとぞご容赦願いたい。」〔S. XIX〕

7) Nの「生活」をたどるうえでもっとも頻繁に利用されてきたのは、1838年と翌年に上梓された全三巻・千五百頁を超える『バルトルト・ゲーオルク・ニーブーアの生活の消息。本人の書簡と知友若干名の追憶で辿る』である¹³¹。私にとっての「謎」は、編者の名前が標題などに登場しないにもかかわらず、編者がドーレ・ヘンスラー〔前注62〕であることがかなり早くから知られていたとしか解しようがない点である。

第1巻冒頭の「前言〔Vorwort〕」の署名は、本書の出版元で、かつて無名のNに匿名による処女出版の機会を提供したペータス社の社主〔後注148〕である。彼は、本書の体裁について、Nの生活拠点の移動にそくして時期毎に公私の出来事を数頁で説明しそのあとに当該期の書簡を配列すると述べて、《詳しくは、この高名な人物の肖像を添える予定の第2巻の

131 *[Dore Hensler] Lebensnachrichten über Barthold Georg Niebuhr : aus Briefen desselben und aus Erinnerungen einiger seiner nächsten Freunde*, Bd. 1, 1838, 603 S. ; Bd. 2, 1838, 512 S. ; Bd. 3, 1839, 462 S. この三巻本の英語版につき【補遺6】を参照。

標題にいう“Erinnerungen”とは、Bd. 3に収録された、① Über Niebuhrs Leben und Wirksamkeit in Bonn, nebst einer Nachricht von seinem Ende S. 285-302〔クラッセン、前注82〕；② Niebuhr als Diplomat in Rom, S. 305-330〔ブンゼン、前注73〕；③ Zu Niebuhrs Charakteristik von einem Freunde, S. 333-340〔ブランディス、前注72〕；④ Erinnerungen an Niebuhrs Wesen und Wirken, S. 343-368〔サヴィニー〕という4名による寄稿を指す。なお、④は、*Savigny, Vermischte Schriften* Bd. 4 1850, S. 209-254に再録。

末尾で、編者たちが説明するであろう》とするにとどまる〔Bd. 1, S. IV. 傍点は引用者〕。ところが、Nの肖像画を掲げる第2巻の末尾に、《分量が多いため、当初の予定を変更して本巻はローマ駐在時代までとし、ボン時代及び知友による寄稿は来年1月刊行予定の第3巻に譲る》との告知が載る。そして、ギボンを彷彿とさせるような父カルステンの肖像画を掲げて刊行された第3巻の末尾に、4頁ほどの「結語〔Schlußwort〕」が置かれた〔Bd. 3, S. 455-458〕。しかし、そこには、編者〔Herausgeber〕という単語のみならず編者を窺わせる表現は、いっさい見られない。

この匿名性や結婚をめぐるNとドーレ・ヘンスラーとの前述の関係を措くとしても、本書をめぐるのは、後述のように、その「信憑性」が具体例にそくして疑問視されてきた。そして現在では、この大著よりも、N発（及びN宛）の書簡そのものが重視されている¹³²。というのも、Nもまた、たとえばゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829年版）の第1巻第6章の末尾〔前注75・66頁以下〕で主人公に記させたような、「人間がどんなにたくさん書くかは、まったくだれも考えおよばない。……いまのぼくのように、教養ある家族の中にしばらく暮らしてみても、はじめて想像のつくことだ。ぼくのいまの生活圏では、自分の仕事を親戚なり友人なりに伝えるのに、その仕事そのものに要する時間とほとんど同じぐらいの時間をかける」という18世紀後半いらいのドイツ教養層の「生活習慣」の持ち主であり、現在では活字化された書簡だけでも二千通を優に超えるからである。

8) Nを名宛人とする書簡には、別稿で取り上げるゲーテの場合¹³³ など

132 意見書や私案など官吏時代に作成した文書も存在するようであるが、その詳細を紹介する論考は見当たらない〔Vgl. Walther・S. 127 Fn. 1〕。

133 Nは、丁寧な手紙をそえて主著『ローマ史』の各版〔1811年・35歳～1830年・54歳〕を直ちにゲーテに献呈した。ほぼ一世代を隔てるゲーテ〔62歳～81歳〕は、その都度、寸暇を惜しんで熟読して長文の返信をする。N宛て6通のうち5通をSavigny・前注131の④が採録する。滝内楨雄「ゲーテ・ニーブール往復書

のようにその控えが活字化されているものもあるが、その場合でも媒体は発信者に応じて多様である。これに対してNを発信人とする書簡は、雑誌や書簡集などで提供されたもの¹³⁴も含めて、その多くが二種類の単行本に収録されている。それらは、①「1776年から1816年まで」と②「1816年から1830年まで」とに大別して編集された。①の編集が第二次大戦前であるのに対して、②のそれは第二次大戦後であるため、編者自ら②を「新修〔die neue Folge, NF〕」と名づけ、①を「旧修〔die alte Folge, AF〕」と呼ぶ。

編集の経緯は、Briefe AF Bd. IとNF Bd. I-1の序文に拠れば、大略以下のようなものである。すなわち、『Nの生活の消息』については、採録された書簡の数が時期によって著しく異なるため、存在したはずの書簡を「廃棄」したのではないかという疑念をはじめ、採録方針の透明性や転写の正確性をめぐる疑問が早くから提起されていた¹³⁵。他方、ディルタイ〔Wilhelm Dilthey : 1833-1911〕¹³⁶の肝いりで1891年に、文人や学者の遺稿類の収集・

翰〕Neue Stimme〔東京：しんせい会〕11巻（1969）114-133頁が、関係する書簡すべての訳を提供し、加えて『ローマ史』の序文の抜粋やその時期のゲーテの日記などを紹介する。

134 Vgl., F. Schlawe, Die Briefsammlungen des 19. Jahrhunderts. Bibliographie der Briefausgaben und Gesamtregister der Briefschreiber und Briefempfänger 1815-1951, Bd. 1, 1969, S. 626, 1021, 1027.

135 これに対して、後述の寄贈によって利用可能となったNの書簡に基づいて「改ざん」などを指摘する論考として、Hermann Dreyhaus, Niebuhr auf der Flucht der preußischen Behörden. Zugleich eine Beurteilung der Lebensnachrichten, HZ 110, 1913, S. 91-103 ; Eugen Rosenstock, Die Zulässigkeit der „Lebensnachrichten über B. G. Niebuhr“, HZ 110, 1913, S. 566-573がある。今日の通説的見解によれば、Nは必ずしも常に保守的であったわけではないのに、彼女のキリスト教的・保守的性向による改ざんのために誤ったイメージが定着したとされている〔Srbik・前注82・S. 210〕。

136 かつてNの影響下にあったこの哲学者のN論は、『聊か過褒ぎみで脱線も見られるが、最良のN研究と言える』と評される〔Heuss・S. 25〕。この評価は、彼の別のN論とともにNの「哲学修業時代」の理解と関わる。Vgl., W. Dilthey, Barthold Georg Niebuhr [1865/66], in: Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften

編集などを目的とする「ベルリン学芸文書協会〔die Literaturarchivgesellschaft zu Berlin〕」が設立された。その寄贈第1号は、呼びかけに応じたNの孫によるN書簡であった。その孫とはカール・ラートゲン〔前注86〕である。

協会は、他機関による助成と『歴史学雑誌〔Historische Zeitschrift〕』の編集主幹マイネケ〔Friedrich Meinecke : 1862-1954〕の督励のもと、同誌の編集助手であったディートリヒ・ゲェアハルト〔Dietrich Gerhard : 1896-1985. 補遺7の②〕とデンマーク生まれのコペンハーゲン大学教授で古代文献学専攻のウィリアム・ノルヴィン〔William Norvin : 1878-1940〕という二人のN研究者に書簡の編集を委託し、その成果を三巻本として出版することとした¹³⁷。しかし、ナチスによる迫害をのがれてゲェアハルトがアメリカに亡命したため、620通を収めるAF・二巻本の刊行でもって計画は頓挫した。その後、Nの遺稿の大半を所蔵するアルヒーフは旧東ドイツの管理下におかれる。

スイスのギムナジウムの教授で、公使時代のNの書簡を教皇庁などで収集していたエドヴァルト・フィシャ〔Eduard Vischer : 1903-96〕が、ある学会でのNに関する自身の報告がきっかけとなって1955年にゲェアハルトと知り合う。そして二人は、当初計画の第三巻に当たる1816年以降の書簡の編集に乗り出し、旧東ドイツをはじめ各地の所蔵機関の協力を得て、1319通を収録する全4巻・5分冊の『書簡集』を上梓した〔二人のやや複雑な関係から、フィシャが単独でNFの編者を名乗ったようである〕。

もちろん、AFもNFも、他の媒体で公表済みの書簡の再録を取捨したり、身辺雑記風の書簡を採録しなかったりするので、これら7冊でもってN発

Bd. XI, 1972, S. 93-104 : *ders.*, *Anfänge der historischen Weltanschauung Niebuhrs*, in: GS Bd. III, 1969, S. 269-275.

137 N宛の書簡の一部は、協会が発行するMitteilungen aus den Literaturarchive in BerlinのBd. 1 (1894) からBd. 3 (1896) の16箇所にわたって分載されている。

の書簡が網羅されているわけではない¹³⁸。誰の書簡でも多かれ少なかれそうであるが、とくにNのドーレ宛書簡〔AFの約3分の1；NFでは約1割〕については、内容の慎重な吟味が必要であろう。

9) 書簡以外の資料として、Nの讐咳に接した人物による回想録がある。Nとの親密度からして現在もなお参看に値するとされているのは、いずれもN宅に起居したクラッセンによるもの〔前注82〕と後述のリーバーによるものである¹³⁹。

20世紀に入ると、「歴史上の人物」としてのNに関するアンソロジーが相次いで登場する。ひとつは、第一次大戦を背景とする「愛国者にして国民的英雄」というN像に立脚した作品である¹⁴⁰。本書は、編者の前書きと序文〔37頁〕を付して、書簡や主著や講義録などからの抜粋のほか、Nによる父の伝記を収録しているが、いずれも別の媒体からアクセスできる。

138 （既公表の有無を問わず）これらの『書簡集』に非採録の書簡を紹介する近時の論考として、① *Mario Varvaro*, Zwei wiederentdeckte Briefe Niebuhrs vom 23. September 1816 und ein anonymer Aufsatz in der 'Allgemeinen Literatur-Zeitung', TRG 80, 2012, S. 171-209；② *idem*, Le ultime lettere del carteggio di Niebuhr e Mai (febbraio 1828-gennaio 1829), Miscellanea Bibliothecae Apostolicae Vaticanae, XX, 2014, p. 707-738 [未見]；③ *Francesco Lo Conte*, Per un addendum all' edizione: B. G. Niebuhr, Briefe. Neue folge (1816-1830). I Briefe aus Rom (1816-1823). Tre lettere inedite di B. G. Niebuhr ad Angelo Mai, *Linguista e Filologia* 35, 2015, p. 7-28.

なお、②と③にいうマイ〔1782-1854〕はイタリア人の枢機卿で法王庁の図書館長であったが、文献学者として古代の無名の羊皮紙テキストを数多く活字化して世に送り、ローマ駐在時代のNとも書簡を交わした〔Vgl., Briefe NF Bd. I-2, S. 959f；Walther・S. 519 Fn. 66〕。

139 *Francis Lieber*, Reminiscences of an intercourse with Mr. Niebuhr, the historian, during a residence with him in Rome, in the years 1822 and 1823, 1835, (Forgotten Books 2015, 192 p.). 著者とNとの関係については、【補遺2】を参照。なお、プロイセン改革期にNの同僚であり1819年にベルリン大学の歴史学教授として学界に戻ったFriedrich Ludwig Georg Raumer〔1781-1873〕の回顧録として、*ders.*, Lebenserinnerungen und Briefwechsel, 2 Bde., 1861がある。

140 *Ludwig Lorenz* (Hg.), Barthold Georg Niebuhr, Briefe und Schriften, o. J. [1918], 275 S.

もう一つは、ドイツ近代史専攻のキュンツェル〔1870-1945〕が歴史学専攻の学生向けに編んだ作品である¹⁴¹。本書は、150頁分を主著『ローマ史』からの抜粋に当て、Nによる短い政治論文8本と参考資料1点〔後注155〕を加えている。詳しくは【補遺1】に譲る。

雑誌や論文集のN論については続稿で適宜取り上げるとして、以下では文献収集の便宜を図って研究会などでの報告を一括して掲出する¹⁴²。

第1に、1984年刊行の、ゲェアハルト・ヴィルト〔1926-〕編『バルトルト・ゲェオルク・ニーブーア 歴史家にして政治家。Nの没後150年を機にボンで開催されたコロキウム（1981年11月10日-12日）の報告集』〔Wirth編〕。開催主体は、Nゆかりのボン大学古代史研究室〔das Seminar für Alte Geschichte〕¹⁴³である。同書は、ホイスの基調報告〔前注22の①〕とNの生涯の各ステージにはほぼ即した報告8本〔前注96の②；58の③；65の④・⑤；70の⑥；60の⑦；77の⑧；66の⑨〕のほかに、ボン大学付属図書館がコロキウムに合わせて同じタイトルで開催した特別展示のカタログ

141 Georg Kuntzel (Hg.), Barthold Georg Niebuhr, Politische Schriften, 1923, 355 S. なお、編者が本書を出版するに先だって発表したN論は、Nとサヴィニーの政治的見解を対比させて検討する〔ders., Niebuhrs Römische Geschichte und ihr zeitgenössischer politischer Gehalt, in: Festgabe für Friedrich Clemens Ebhard zur Vollendung seines 70. Lebensjahres am 26. Juni 1920, 1920, S. 175-190〕。

142 N生誕200年を機に、旧東ドイツの古代史・考古学アカデミーの機関誌〔Klio. Beiträge zur Alten Geschichte Bd. LX (1978)〕が5本のニーブーア論〔注35の①；65の②；13の③；74の④；77の⑤〕を掲載しているが、シンポジウム等の記録か否かは不明である。

143 大学創設は1818年10月18日であるが、古代史研究室は、1861年10月10日にプロイセンの文部大臣ベートマン・ホルヴェーク〔Moritz August von Bethmann-Hollweg: 1795-1877〕が発令した大学規約に基づいて設置された。その開設150年を記念する10回の持ち回り講演〔2011.11.8-2012.1.24〕の集成が、Konrad Vössing, Barthold Georg Niebuhr (1776-1831)—Begründer der modernen Althistorie? を収録する〔Institut für Geschichtswissenschaft (Hg.), 150 Jahre Historisches Seminar. Profile der Bonner Geschichtswissenschaft. Erträge einer Ringvorlesung, 2013, S. 51-66〕。

〔前注21のWirth編・Katalog〕を収録する。

第2に、Nのプロイセン政府出仕200年を記念して、2006年10月に「ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー」を会場として開催されたシンポジウム。そこでの三つの報告が、ようやく2013年秋に一編の論文を追加して雑誌に発表された¹⁴⁴。この会合は、前述のヴィッテ〔前注87〕を中心とする「Nゆかりの人々」が丸二年をかけて準備したものである。

第3に、父カルステンのアラビア派遣から250年を記念して、先の2006年シンポジウムを設営したメンバーが主宰した研究集会。これは、2011年9月16日から3日間、カルステンが眠るメルドルフ市で開催された¹⁴⁵。

144 Forschungen zur Brandenburgischen und Preußischen Geschichte, Bd. 23, Heft 2, 2013. ① *Barthold C. Witte*, Barthold Georg Niebuhr, ein Unzeitgemässer? Statt eines Vorworts, S. 143-146; ② *ders.*, Niebuhrs Herkunft, Aufstieg und politische Ideenwelt, S. 147-163; ③ *Wilfried Nippel*, Barthold Georg Niebuhr und die Begründung der modernen Althistorie, S. 165-192; ④ *Reimer Hansen*, Barthold Georg Niebuhr und die Begründung der modernen Geschichtswissenschaft, S. 193-232; ⑤ *Rudolf Lill*, Niebuhr als Gesandter Preussens in Rom, S. 233-244.

なお、誌上で追加された③Nippel論文は、*Annette M. Baertschli et al.*・前注67所収の同名の論文の転載であり、のちに、Nippel・前注127・S. 93-133にBarthold Georg Niebuhr—ein schwieriger Gründervaterとして改編のうえ収録された。

また、④Hansen報告は、*Reimer Hansen et al.*・前注67所収論文の脚注を取捨してタイトルを改めたものである。この報告と同じタイトルで2011年の集会〔後注145〕向けにさらに圧縮したものも公表されている〔*Demokratische Geschichte: Jahrbuch für Schleswig-Holstein*, 22, 2011, S. 9-26〕。

さらに、⑤Lill報告は、*ders.*, Barthold Georg Niebuhr als Gesandter Preussens in Rom (1816-1823), in: *Heinz Finger/Reimund Haas/Herrmann-Josef Scheidgen* (Hg.), Ortskirche und Weltkirche in der Geschichte. Kölnische Kirchengeschichte zwischen Mittelalter und zweitem Vatikanum, 2011, S. 997-1004の補訂版である。

145 *Briger Bahlo*, Vom Orient ins Fieler Moor, in: *Norddeutsche Rundschau* vom 16. September 2011 digital. なお、この集会〔参照：前注34〕でのReimer Hansenの報告〔前注144〕は、2011年が『ローマ史』第1巻初版の刊行から200年であることを指摘する。

なお、参看が困難な、学位論文とNの没後100年に当たる1931年の四つの講演録の掲出は、【補遺7】と【補遺8】に譲る。

最後に、Nの著作や講義録や書簡などの翻訳は、『ローマ史』のフランス語訳やイタリア語訳〔前注92〕を除いて）英語圏以外では見当たらない。OEDの編者の末裔でもあるオクスフォードの古典古代史の碩学O・マレー〔1937-2017〕は、「英国におけるNの影響は、ドイツ語圏におけるよりもはるかに大きかった。印刷された作品はほぼ間髪入れずに翻訳されたし、印刷されていない作品の多くがドイツでよりも先にイギリスで上梓された。英国の文化や教育に対する彼の影響は、十九世紀前半には絶大であった」と述べる¹⁴⁶。しかし、Nとイギリスとの関係の本格的な研究は見当たらない¹⁴⁷。しかも、基本資料となるNの著作などの英語版の書誌事項には不分明な点が少なくない。細かい話なので【補遺4】から【補遺6】に譲る。
〔以上、本論〕

【補遺1】ベルリン時代の政治論文など

1) 1806年にドイツがフランスの支配下に入る前から、Nはナポレオンの専制に反発しており、05年には、学歴もなく全くの無名でありながらハンブルクの大手出版社から¹⁴⁸、反ナポレオン精神を鼓舞する翻訳を匿名で出

146 Oswyn Murray, Niebuhr in Britain, in: Chryssanthi Avlami and Jaime Alvar Rodopi (ed.), *Historiographie de l'antiquité et transferts culturels: Les histoires anciennes dans l'Europe des XVIIIe et XIXe siècles*, Amsterdam 2010, p. 239-254 (p. 239). 但し、末尾の参考文献の掲出には、誤りが散見される。なお、Nとモムゼンを軸に主としてイギリスの動向を簡潔に俯瞰したものとして、ギルバート・ハイエット著・柳沼重剛訳『西洋文学における古典の伝統 下』（原著1949年。1969年）第21章「古典学隆盛の時代」222-257頁を参照。

147 ⑦ Ernst Bammel, Niebuhr und England, Wirth編・S. 131-175; Norman Vance, Niebuhr in England: History, Faith and Order, in: Benedikt Stuchtey (ed.), *British and German Historiography 1750-1950*, 2000, p. 83-96.

148 ベータス出版は、当時の三大出版人のひとりベータス〔Friedrich Christoph Perthes: 1772-1843〕の創業にかかり、彼は若き神学者や歴史家を積極的に支

版する。それは、デモステネス〔前384-322〕がアテネ市民に向けてマケドニア王ピリッポス2世〔アレクサンドロス大王の父〕を糾弾した演説である¹⁴⁹。この精神は解放戦争に際して一層強まり、Nは、同僚の神学教授シュライアーマッハー〔Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher : 1768-1834〕¹⁵⁰と諮って同志を募り、13年に『プロイセンの通信員〔Der Preußische Correspondent〕』を創刊して編集に従事する〔もっとも、Nの関与の度合いについては見解が分かれる〕¹⁵¹。この媒体の目的は、公衆

援した。のち、『Nの生活の消息について』の出版元となる〔前注131〕。

- 149 Demosthenis erste philippische Rede. Im Auszug übersetzt, Hamburg 1805. なお、訳者名を出した1831年の新版（全19頁）に新たに付された30年12月17日付けの序文〔前注111・遺稿集・S. 525f. = 前注141・Küntzel編・S. 316f.〕が、Nの実質的な絶筆である〔Straub・前注75・S. 58〕。参照：「ピリッポス弾劾（第一演説）」（加来彰俊訳）、『デモステネス弁論集1』西洋古典叢書（2006年）63-89頁。

ちなみに、モミリアーノ・前注11・76頁にいう「デモステネスのような職業的政治家が現れた。彼はペリクレスのように、国家が常に自分を支持してくれるものと頼り切ることはできず、自分の属する都市国家内部の相次ぐ危機に処しつつ、そうすることによって、自分自身の地位を確立したり取り戻したりしなければならなかった」という評価は、デモステネスがNの愛読書であったのみならず処女作とも絶筆とも繋がっていたことに通じるのかも知れない。

- 150 ディルタイ「フリードリヒ・ダニエル・エルンスト・シュライアーマッハー〔Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher : 1768-1834〕」〔1890年。平田栄一郎・白崎嘉昭訳〕『ディルタイ全集第7巻 精神科学成立史研究』（2009年）557-612頁（591頁以下）。なお、別表記としてErnst Danielも見られる。

従来のN論では重視されていないが、聖書解釈におけるシュライアーマッハーの「ヘルメノイティク」論とNにおける「文献学と歴史学」の構想〔前注107、後注171〕との関係は、近時のシュライアーマッハー研究の進展を踏まえて検討すべきテーマであろう。Vgl., Martin Ohst (Hg.), Schleiermacher Handbuch, 2017, 535 S.

- 151 1813年4月2日第1号から1814年12月31日第208号。Nの寄稿は、戦局や軍制、各国の教会組織、戦時下の財政問題などに関する短文である。そのうち8点を前注111・遺稿集・S. 315-386が収録する。未収録の37点の目次一覧は、前注118・講義録②・S. 408-410。これらの論考に関する唯一の研究として、Hermann Dreyhaus, Der Preußische Correspondent von 1813/14 und der Anteil seiner Gründer Niebuhr und Schleiermacher, Forschungen zur Branden-

のなかのプロイセンの長所に働きかけ、フランス人に対する憎悪を養い、政治に対する健全な判断を育むこととされた。

この時期、Nは憲法や行政制度に関する短編を執筆しており、その主なものをKüntzel編〔前注141〕が以下のように採録する¹⁵²。

① Preußens Recht gegen den sächsische Hof, 1814, S. 1-64〔プロイセンによるザクセンの併合により大ドイツを建国すべしという献策〕。

② Über geheime Verbindungen im preußischen Staat und deren Denuntiation —jam respondere decebit—, 1815, S. 65-91〔秘密結社という嫌疑による告発への反論〕。

※ S. 93-243は『ローマ史』からの抜粋。

③ Denkschrift über die Eroberung Hollands, 1813, S. 244-250〔底本は、*Friedrich Meinecke*, Niebuhrs Denkschrift über die Eroberung Hollands aus dem Jahre 1813, HZ 95, 1905, S. 447-455〕。

④ Verfassungsentwurf für die Niederlande, 1813, S. 251-300。

⑤ Vorrede zu „Darstellung der innern Verwaltung Großbritanniens von L. Frh. v. Vincke, Kgl. Preuß. Oberpräsidenten“, 1815, S. 301-304〔= 前注111・遺稿集・S. 462-465；前注65・石川・191頁〕。

⑥ Über die Organisation der ländlichen Verfassung in Preußen, 1824, S. 305-309。

burgischen und Preußischen Geschichte, 22, 1909, S. 375-446〔Diss. Marburg, 1909〕。

152 ①と②につき前注112を参照。④の底本は、Nがオランダ皇太子の求めで1813年12月頃にフランス語で執筆した遺稿からマルクスが「忠実に」ドイツ語に訳したとする刊本、*B. G. Niebuhr*, Grundzüge für eine Verfassung Niederlands, 1852, 78 S.である。ハーグの公文書館所蔵の原本と校合した論攷、*J. P. Block*, Niebuhrs Verfassungsentwurf für die Niederlande (1813), HZ 98, 1907, S. 116-125は、いくつかの実質的な点でドイツ語版に疑義を呈する。⑥は、Nがローマ駐在時代に家族ぐるみで親交を結んだナポリ駐在フランス大使セル〔*Pierre-François-Hercule Comte de Serre* : 1776.3.12-1824.7.21〕宛て24年2月24日付け書簡からの抜粋である。その全文は、*Briefe NF Bd. II*, S. 166-184。

⑦ Über städtische Verfassung, 1826, S. 310-315 [= 前注111・遺稿集・S. 519-524].

⑧ Vorwort zum neuen Abdruck der Übersetzung von Demosthenes' erster philippischer Rede, S. 316-317 [= 前注149].

2) その紹介と分析はひとまず先行研究に譲り¹⁵³、以下では1点のみ取り上げる。それは、反論文書『プロイセン国における秘密結社とそれらの告発』〔前掲②〕である。1815年以降、ウィーン体制に反発してドイツの統一と自由を目標として各大学に学生結社が創設され、相互に連携をとりあうブルシェンシャフト運動が展開される¹⁵⁴。15年に、運動の精神的指導者で愛国詩人を自認するアルント〔Ernst Moritz Arndt: 1769-1860〕らをジャコバン主義者として指弾するパンフレットが出される¹⁵⁵。筆者は、ベルリン大学初代総長のシュマルツ〔Theodor Anton Heinrich Schmalz: 1760-1831〕である¹⁵⁶。彼は、フランス統治下に結成されて国王の解散命令により10年に解散したはずの愛国的秘密結社『徳の結社〔Tugendbund〕』が秘密裏に存続して革命を企てており、アルントこそその首謀者である、とした。しかし、この告発は根も葉もないものであったうえに、プロイセンの愛国の闘志の名誉を傷つけるものであったため、シュマルツ

153 Hans-Christof Kraus, Die verfassungspolitischen Ideen Barthold Georg Niebuhrs, in: Neue Wege der Ideengeschichte Festschrift für Kurt Kluxen zum 85. Geburtstag, 1996, S. 285-314.

154 成瀬 治・山田欣吾・木村靖二『ドイツ史2—1648年～1890年—』231頁以下〔坂井榮八郎〕。彼らの衣装や振る舞いや用語などにつき、エーゴン・フリーデル〔宮下啓三訳〕『近代文化史3』〔原著・1931年。1988年〕24頁以下。

155 Berichtigung einer Stelle in der Bredow-Venturinischen Chronik für das Jahr 1808. —Über politische Verreine und ein Wort über Scharnhorsts und meine Verhältnisse zu ihnen, 1815, Berlin〔その抜粋は、前注141・Küntzel編・S. 318-322〕。

156 シュマルツは、カントの法論を基礎におく自然法学者であり国法学者でもあった。ベルリン大学初代総長としての彼の大学運営については、石川・前注65・263頁以下を参照。

は世論の厳しい非難にさらされる。Nは、前記の反論文書で意見表明の権利と政治的党派形成の権利という観点からアルントを擁護した¹⁵⁷。

【補遺2】リーバーとの出会い

1) 従来のN論では重視されていないようであるが、1822年のローマでの出来事として興味深いのは、Nを生涯の師と仰ぎ、35年に本国に先んじてNの『回想録』〔前注139〕をアメリカで出版することになる20歳ほど年下のドイツ人フランシス・リーバー〔Francis Lieber : 1798-1872〕との出会いである¹⁵⁸。

前述のブルシェンシャフト運動は、19年に「過激派」の一学生ザント〔Karl Ludwig Sand : 1795-1820〕が「反動的劇作家」と目されていたコッツェブー〔Augst von Kotzebue : 1761-1819〕を暗殺した事件を契機とする体制側の「カールスバートの決議」によって、弾圧に曝される¹⁵⁹。事件の共謀者の嫌疑でプロイセン当局から予防拘禁に処せられた一人が、対ナ

157 アルントは、1818年にボン大学の歴史学教授となるが、20年には再び反動分子の嫌疑で自主休職を余儀なくされる。裁判で有罪は免れたものの講義を禁止され、26年に辞職。この間、Nは一貫して彼を物心両面で援助した。40年の国王即位によって復権。この反論文書に対する再反論などとして、*Schmalz, Über des Herrn B. G. Niebuhrs Schrift wider die meinige, politische Vereine betreffend*, Berlin 1815 ; *ders.*, *Letztes Wort über politische Vereine*, Berlin 1816がある。

158 *Frank Freidel*, Francis Lieber Nineteenth-century Liberal, 1947. The Lawbook Exchange edition 2003, p. 24-45. なお、Lieberの生年が1800年ではなく1798年であることを、p. 3 note 4が説得的に論証している。

159 コッツェブーの「活動」については、菊池栄一「戦中のゲーテ（1813年）」の第2章「飛び交う情報宣伝」が詳しい〔『菊池栄一著作集』第2巻（1984年）414-428頁〕。また、ザント事件とその余波につき、熊谷・前注10の⑤・57頁以下。ちなみに、Nによるガイウス写本の発見を「写本泥棒」として指弾したメルケル〔前注74〕は、コッツェブー派の論客でありゲーテを攻撃した人物でもあった。参照：前注15・『ゲーテとの対話』（下）の訳注・418頁；前注75・Vano・S. 108 Fn. 63.

ポレオン戦線から戻ったベルリン大学生リーバーである。釈放後も官憲の監視下におかれたため復学できなかった彼は、21年にギリシア解放戦争が勃発すると¹⁶⁰、これに義勇兵として身を投じる。

彼は、翌22年無一文同然で餓死寸前のところを辛うじてローマに渡り、庇護を求めて尋ねたプロイセン公使館でNと出会う。ブルシェンシャフト運動がらみの義侠心からか、Nはほどなく彼を当時5歳の愛息マルクスの養育掛として自宅に住まわせる。彼は、Nから多方面の感化を受け、翌23年にNが帰国するまでのNとの日々を前述の『回想録』として出版した。この書物が、ゲーチの前掲書が出典の注記なしに紹介する「イギリスを研究しなかったらローマ史を理解することはできなかったらう」¹⁶¹〔前注6の上・18頁〕ほかのNの発言の典拠である。

2) Nのローマ離任にともないドイツに戻ったリーバーの人生は波瀾万丈であった¹⁶²。帰国後早々に再び拘留され、Nの口添えで釈放され、26年5月にロンドンに渡り、ドイツ語やイタリア語の放浪教師や住み込み教師などで生計を立てる。折しも、26年に若き知識層をメンバーとして、ロンドン大学〔University of College London。36年にUniversity of Londonに加盟〕の開設準備委員会が発足する。リーバーはドイツ語教師のポストを求

160 この解放戦争も、外国の抑圧者に対する憎悪という点でブルシェンシャフト運動の延長線上に位置する。参照：前注154・フリーデル・26頁以下。

161 前注139・Lieber・p. 61によれば、これに続けてNは、「ローマの歴史を書く」という着想は、当時の私のなかで、はっきりとしていなかった。しかし後になってこの着想が、私のなかでますます明瞭になってきたとき、イギリスで得た観察と経験のすべてが助けとなり、〔執筆の〕決断につながった」と語ったとされる。

Nの脳裏には、ギボン『衰亡史』最終巻の最終頁にいう「……著述の構想を最初に抱いたのはカピトリノ神殿の廃墟の間に立った時であり……」が去来したのかも知れない。参照：ギボン・前注30・402頁；『ギボン自伝』・前注101・179、266以下、286頁。

162 前注158・Freidel・p. 46-52, 105f. Nは、ロンドン在住の大物財界人への書簡〔1826年9月16日付け〕で、イギリスに渡ったばかりのリーバーの身の上を紹介している〔後注183・Donaldson・p. 360〕。

めて売り込むなかで、後述の女性の口添えもあってその委員グロート〔Georg Grote : 1794-1871〕¹⁶³ やミル〔John Stuart Mill : 1806-73〕らの知遇を得る。彼らに督励された彼は、Nの27年3月23日付けの書簡に付された推薦状〔Briefe NF Bd. III, S. 111-115〕を提出するが、開学が遅延するなか6月にアメリカに渡ってしまう。

この間リーバーは、当時のイギリスで初等教育の普及の要請のもとに提案されていた様々な教育方法に関心をもちそれらを比較検討する。彼が高く評価したランカスター・メソッド¹⁶⁴ が機縁となって彼は、この方式に共鳴していてドイツ語にも堪能な女性の知遇を得る。すなわち、前述のグロートやミルの友人であり既にロンドン大学の法理学教授に内定していたジョン・オースティン〔John Austin : 1790-1859〕¹⁶⁵ の妻サラ〔Sarah : 1793-1867〕である。リーバーは、彼女とは違ってベンサム主義に心酔することはなかったが、彼女からドイツのギムナジウム制度に関心をもつアメリカ出身のベンサム主義者を紹介され、さらにボストンに新設されるドイツ流のギムナジウムの常勤講師をロンドンで募集していた人物と出会う。

163 グロートは、ロンドンの銀行家の孫でありギリシア史研究に新生面を開く〔グーチ・前注6の下・31頁以下〕。Nは、彼のギリシア史を高く評価してその完結を期待する旨の1827年6月26日付けの書簡で「末筆ながら、われわれの共通の友〔*our mutual friend*〕にも宜しく伝えていただきたい」と書いており、書簡の編者はリーバーを指すとする〔Briefe NF Bd. III, S. 146-148〕。ちなみに彼は、親友のミルらが主宰するベンサム主義者協会〔Utilitarian Society (1822-23)〕の会員ではなかったが、その勉強会に営業時間前の銀行の一室を提供した〔村井章子訳『ミル自伝』(原著1873年。2008年) 101頁〕。

164 その発案者の一人〔Joseph Lancaster : 1778-1838〕にちなむこの手法は、教員1名による全体授業のほか、進度別の指導が適する科目では生徒を習熟度別に少人数のグループに分け、それぞれに優秀な上級生のなかから採用した助教生〔monitor〕を配する。リーバーは、安価な人件費で多人数に授業を提供できる「流れ作業による大量生産〔*the assembly line*〕」として、この方式を高く評価した。

165 前注163・『ミル自伝』・63頁以下；高柳賢三「オースティン」、木村龜二編『近代法思想史の人々』(1968年) 117-126頁。

これに応募した彼は、前述のようにアメリカに渡る。Nは、27年9月13日/20日の書簡〔Briefe NF Bd. III, S. 218-223〕で、彼の決断を賢明としつつも、物質世界に眩惑されないよう、また、ドイツ人であることを忘れぬようと釘をさす。

オースティンは、大学の開設準備期間を利用して27年秋から翌年春まで、妻と娘のルーシー〔Lucie : 1821-69〕を連れてボン大学に留学し、帰国後分析法学の鼻祖となる¹⁶⁶。オースティンとも気脈を通じていたJ. S. ミルは、「〔彼は〕……講義の準備のためしばらくボン大学に留学してドイツ文学やドイツ人氣質、ドイツ社会のあり方などから影響を受け、外からみてもわかるほど人生観が変わったのである。すっかり角がとれ、喧嘩腰で議論することがなくなったし、詩的で瞑想的なものを好むようになっていた。また社会の表面に現れる変化についても、それが内面の開拓や改善を伴わなければ評価しない姿勢をとった」と回想する〔前注163・『ミル自伝』・152頁〕¹⁶⁷。

166 留学先としてボンを選んだことの背景には、当時のイギリスの知識人層でドイツの文学・哲学・法学への関心が高まっていたことのほか、夫妻がかつてのドイツ旅行で好印象をもったことがあるとされているが、Nやリーバーとの関係は不明である。Vgl. *Andreas B. Schwarz*, John Austin und die englische Rechtswissenschaft [1934], in: *ders.*, Rechtsgeschichte und Gegenwart Gesammelte Schriften zur Neueren Privatrechtsgeschichte und Rechtsvergleichung, 1960, S. 73-92 (S. 76f.).

167 経済学者の夫〔Amartya Sen〕と共にA・スミス研究を進めているHarvardの歴史学部教授による作品〔*Emma Rothschild*, *The Inner Life of Empires An Eighteenth-Century History*, 2011〕は、18世紀後半以降のイギリスにおける「内面性の凝視」という時代思潮を、スミス『道徳感情論』を手掛かりに、Nにおける「想像力 imagination」概念をも援用して、ある家族のfamily historyにそくして分析する〔p. 266f.〕。

なお、『道徳感情論』〔初版・1759年～第6版・90年。水田 洋訳・岩波文庫・2003年；高 哲男訳・講談社学術文庫・2013年〕の改訂過程における用語〔eye, to see, amazingなど〕の変遷に着目する論考 *idem*, *The Theory of Moral Sentiments and the inner life*, in: *The Adam Smith Review* vol. 5, *Essays commemorating the 250th. anniversary of The Theory of Moral Sentiments*, 2010, p.

3) リーバーは、アメリカ移住の機縁となったサラに生涯感謝していたようであり、『回想記』の冒頭に“TO MRS. AUSTIN, OF LONDON”で始まる2頁ほどの献辞を掲げた。他方、彼女と同様にドイツ文学の翻訳者として活躍した娘ルーシーは¹⁶⁸、彼の仲介によるのかは不明であるが、Nの作品を英訳する。Nが1822年に4歳の息子マルクスに語り聞かせたギリシアの神話や英雄譚を遺稿をもとにマルクスが編集した子供向けのお話がそれである¹⁶⁹〔参照：Stark・前注168・p. 121〕。

ところで、この『回想記』のドイツ語版の訳者カール・ティボー〔1807-81 od. 1808-82〕は、英語版の冒頭にあった献辞を省略して、原著にはない「〔Nと著者に関する〕伝記風の素描〔Biographische Skizze〕」を置く〔S. 3-16〕¹⁷⁰。リーバーとは一面識もないと思われる訳者が刊行早々に本書に注目したのみならず、Nについての的確な素描を添えているのは、彼がNの親友でハイデルベルク大学教授となったティボーの長男だからであろう。彼は、法律学を修めたのち30年にハイデルベルク大学の私講師となるが、

25-36は、《われわれと過去との間に横たわる雲や霧を払って当時の人々の内面を垣間見ることが可能にするアプローチ》としてNを引用する〔p. 32 note 5〕。

ちなみに、NにおけるImaginationやPhantasieやDivinationは、(盛期中世の正統的実在論の認識思想の延長線上での)カントによる「生産的構想力〔produktive Einbildungskraft〕」概念の導入という大きな文脈〔坂部・前注109・「第十九講 構想力の論理」142-148頁〕で検討すべきテーマであろう。

168 両名をはじめ後述のSusanna Winkworthらイギリス人女性によるドイツ文学の翻訳活動の評価につき、*Susanne Stark*, *Behind Inverted Commas Translation and Anglo-German Cultural Relations in the Nineteenth Century*, 1999のCh. 2 *Women and Translation in the nineteenth Century*を参照。

169 *Barthold Georg Niebuhr*, *Heroengeschichten*, Hg. von *Marcus Niebuhr*, 1842; *Stories of the Gods and Heroes of Greece* By. *Barthold Georg Niebuhr*, tr. by *Lucie Gordon*, 1843. 同書は、20世紀初頭まで独・英で豪華本や新訳が出版されている〔Wirth編・Katalog・S. 292f.〕。

170 *Franz Lieber*, *Erinnerungen aus meinem Zusammenleben mit Georg Barthold Niebuhr, dem Geschichtsschreiber Roms*. Aus dem englischen übersetzt von Dr. *Karl Thibaut*, Heidelberg 1837, 243 S.

32年の末に歴史学と文献学の勉強に独りで打ち込むために退職したのち、39年2月からハイデルベルク大学の図書館司書となる〔前注55・*Polley*・Teil 3, S. 727〕。翻訳はいわばこの浪人中の産物である。

父ティボーは、訳書が刊行された37年、友人でローマ駐在の外交官ケストナー〔Georg August Cristian Kestner : 1777-1853〕への5月30日付けの書簡で30歳前後の無職の長男について、《カールは、法学一筋だったのにそれを投げ出して、この5年ほどギリシア、ローマ、フランス、イギリス、イタリアの古典の勉強に打ち込んでいます。彼は、当地でこの冬に、リーバーのニーブーア回想記のドイツ語訳を仕上げました。君もその英語版をご存じでしょう。しばしば、実に見事な翻訳だというお褒めをいただいております。そういうわけで彼は、まずは自分の勉強のために且つ世の中のために折々に古典を翻訳すると心に決めました》と伝えている〔前注55・*Polley*・Teil 2, S. 546f.〕。

なお付言すれば、27年6月に「自由の天地」ニュー・ヨークに上陸したリーバーは、その経緯は省くが、百科事典〔*Encyclopedia Americana*. 1829-1833, 13 vols.〕の編集で成功を収めたのち¹⁷¹、*South Carolina College*〔1836-56〕、*Columbia College*〔1856-65〕、*Columbia Law School*

171 *Encyclopedia*の編集とは突拍子もないこと、と思われるかもしれない。『百科事典』の元祖*Britannica*の刊行開始は1768年である。リーバーと*Encyclopedia*を結び付けたのは、98年からイギリスに留学したNではなかったか、というのが私の憶測である。

たしかに、ドイツでは、「大学進学準備校（後のギムナジウム）」、さらには大学教育でも、専門教育への導入科目として「エンツィクロペディー」という伝統がある。しかしNは、*Altertumswissenschaft*でのこの伝統の対象を、*Britannica*に触発されたのみならず、前注106のヴォルフの影響もあって拡張し、古代の人間の生活に関係するあらゆる事柄への目配りという意味での理念として、『百科事典的方法〔*die enzyklopädische Methode*〕』を構想したのではなかろうか〔この方法や理念につき、Walther・S. 330〕。

また、後注172に挙げるリーバーの「ヘルメノイティク」論文における「解釈〔*interpretation*〕」と「構成〔*construction*〕」の二段構えは、Nにおける「文献学と歴史学」のそれ〔前注107、150〕と通底しているのかも知れない。

〔1860-72〕で政治経済学・歴史学・政治学などの教鞭を執るとともに、アメリカ・ドイツの学術交流に尽力する。近時両国で、彼の政治思想や法思想に注目する論考が発表されている¹⁷²。ちなみに、44年から翌年にかけて「里帰り」した彼は、当時国王の私設秘書であった「教え子」マルクスやローマ時代の秘書官ブンゼンとの再会を果たしたほか、法律改訂相サヴィニーほかプロイセン政府の要人と精力的に面談し、予防拘禁制度などについて意見を交換している¹⁷³。

【補遺3】ニーブーアの古代史講義録

1) 全体の名称は、『B. G. Niebuhrによってボン大学で行われた歴史学お

172 *Lieber, Legal and Political Hermeneutics, or Principles of Interpretation and Constructions in Law and Politics*, Boston 1839, 240 p.

アメリカでは、The University of South Carolinaでの2001年のシンポジウムの記録集として、*Charles R. Mack and Henry H. Lesesne* (ed.), *Francis Lieber and the Culture of the Mind, Fifteen Papers Devoted to the Life, Times, and Contributions of the Nineteenth-Century German-American Scholar, with an Excursus on Francis Lieber's Grave*, 2005がある。

ドイツでは、*Stephan Meder*, *Interpretation und Konstruktion. Zur juristischen Hermeneutik von Francis Lieber (1800-1872)*, in: *Meder et al.*, (Hg.), *Juristische Hermeneutik zwischen Vergangenheit und Zukunft*, 2013, S. 7-35 [= JZ 2012, S. 529-538の同名論文の補訂版] ; *ders.*, *Autoren gegen Piraten. Francis Liebers Plädoyer für ein „International Copyright“ von 1840—ein frühes Zeugnis des „International Copyright Movement“*, UFITA 2013, S. 153-172がある。

わが国では、矢崎光圀「フランシス・リーバーと解釈学——19世紀におけるアメリカ法文化とドイツ法文化の接触の一断面について——」矢崎光圀・八木哲男編『近代法思想の展開』(1981年) 257-282頁；同『法思想の世界』(1996年) 113-161頁が、近時の動向に先んじて、明治初年に馬場辰猪〔1850-88〕、小野梓〔1852-86〕、江木 衷〔1858-1925〕らがLieberに注目していたこと、及び、Lieberの法解釈学の思想を論じている。ほかに、中谷義和『草創期アメリカの政治学』(2002年)の第1章「F. リーバー——アメリカ政治学の源流」を参照。

173 彼の訪欧日記を編集した*Charles R. Mack and Ilona S. Mack* (ed.), *Like a Sponge Thrown into Water. Francis Lieber's European Travel Journal of 1844-1845*, 2002は、日々のスケジュールや当時の物価を手取るように伝える。

よび文献学に関する講義』〔Historische und philologische Vorträge an der Universität zu Bonn gehalten von B. G. Niebuhr〕であり、その下に、四つの部門〔Abteilung〕ごとの標題があり、さらに、各三巻で構成されている第1部門と第2部門では、部門ごとの各巻の共通標題と各巻の固有標題が付されている。これに対して、それぞれ全一巻の第3部門と第4部門では、各巻の固有標題のみである。なお、編者は、第2部門のみがマルクスであり、他の三つの部門はイスラーである〔下線は筆者〕。

上記____部分が共通標題の末尾に付されているが、以下では掲出を省略する。なお、丸中数字は、各巻の刊行年順ではなく、便宜的なものにすぎない。

i) 第1部門〔Isler編『ローマ史講義』〕：Römische Geschichte bis zum Untergang des abendländischen Reichs。各巻の共通標題＝Vorträge über römische Geschichte。各巻の固有標題は、以下のとおりである。

③ Von der Entstehung Rom's bis zum Ausbruck des ersten punischen Kriegs, Bd. 1, 1846〔本文586頁〕。

④ Vom ersten punischen Kriege bis zu Pompejus' ersten Consulat, Bd. 2, 1847〔本文404頁〕。

⑤ Vom Pompejus' ersten Consulat bis zum Untergang des abendländischen Reichs, Bd. 3, 1848〔本文347頁、索引・2列組・108頁〕。

ii) 第2部門〔Marcus編『古代史講義』〕：Alte Geschichte nach Justin's Folge mit Ausschluß der römischen Geschichte。各巻の共通標題＝Vorträge über alte Geschichte。各巻の固有標題は、以下のとおりである。

⑥ Der Orient bis zur Schlacht von Salamis. Griechenland bis auf Perikles, Bd. 1, 1847〔本文445頁〕。

⑦ Griechenland bis zur Niedergang des Agis bei Megalopolis. Sicilien's Primordien. Der Orient bis zum Tode Alexander's des Großen. Philipp und Alexander von Makedonien, Bd. 2, 1848〔本文508頁〕。

⑧ Die makedonischen Reich. Hellenisierung des Orients. Untergang des alten Griechenlands. Die römische Weltherrschaft, Bd. 3, 1851 [本文574頁、索引・2列組・108頁].

iii) 第3部門 [Isler編]: Alte Länder= und Völkerkunde.

⑨ Vorträge über alte Länder= und Völkerkunde, 1851 [本文675頁、索引・2列組・30頁].

iv) 第4部門 [Isler編]: Römische Alterthümer.

⑩ Vorträge über römische Alterthümer, 1858 [本文642頁、索引・2列組・30頁].

2) 第2部門にみられるように講義の対象は、ローマはもちろん、ギリシア、マケドニア、オリエント、東ローマ帝国にも及ぶ。このことから、Nを「普遍史家 [Universalhistoriker]」として位置づける見解もみられる。合阪 [前注114] は、「[前述のようにトログスでは]『ローマに集中するということではなく、地中海をめぐる世界の個々の部分にも視線が向けられ、それらが有機的に連関し、かつ一つの全体を作り上げている様子が描かれている』…… そのような世界史の描出こそ、まさしく『普遍史叙述 (Universalgeschichtsschreibung)』と呼ばれるものにほかならない。この手法は、ヘロドトスを始祖とするギリシア人の歴史学の正統に属するものであって¹⁷⁴、ローマ人のトログスもこの系統に倅さず歴史家であった。そのことをユスティヌスも正確に理解してい [る]。…… まことに、当時のドイツの歴史学界を捉えていたのは何よりも普遍史への関心であって、ランケが登場するのもほかならぬそのような環境の中からである。当初のラ

174 これに対してモッミリヤーノは、世界支配者の継起的交替を描く Universalgeschichteは、ギリシア人の歴史学のたんなる延長ではなく、この伝統を黙示思想によって改変する (前2世紀前半に成立した) 旧約・ダニエル書の世界観の影響を受けている、とする。Arnaldo Momigliano, The Origins of Universal History (1982) = 前注94・Settimo contributo・p. 77-103 = Die Ursprünge der Universalgeschichte・前注94・S. 111-140を参照。

ンケは古代史に興味を懐いていたが、ニーブールがその方面での仕事を果たした……」と述べる〔481、506頁〕。しかし、ここでいう「普遍史」をNと重ねて啓蒙期とつなぐ見解には異論もある。

Heuss・S. 20 Fn. 6は、Nのゲーテ宛て書簡〔1812年8月8日付け〕は啓蒙期の歴史家を批判しているとする。Nは云う、「私は、あらゆる時代の出来事を、ひとつの常套語に従属させるために、憐れむべき一般化によって〔mit einer armseligen Allgemeinheit〕、歪曲し、かくして、全時代の歴史に通じる、普遍的証言なるものについておしゃべりする作家たち〔Schriftsteller〕に、憤慨するのです」¹⁷⁵。そして、Nにおける普遍性への志向につき、ホイスは大略つぎのように述べる。《Nにおける歴史の普遍性への志向〔N's historische Universalität〕は、——文書による場合もあるがその多くは口頭によるもので——かなり頻繁に見られる彼の場当たりの的なコメント〔Gelegenheitsbemerkungen〕のなかでのものであり、それらはいわば彼の地が出たもの〔seine persönliche Ausstrahlung〕であり、なにもボン大学の古代史講義で始まったわけではない。Nが歴史というコスモスを住み処としていることは、同時代人にとって、彼のローマ史通と同じくらいに言うまでもないことであった。彼と個人的に関係のあった者ならなおさら、おそらく、ボンの講義を待つまでもなく日頃のコメントで気づいたであろう。この志向は、いわば三つ子の魂のようなもの〔originär mit ihm gewachsen〕で、それ以外のありようがなかったことについては、世界に精通する〔weltkundig〕カルステンと過ごした実家も与って影響したのである》。

これは、「Nの伝記のいかなる事柄がNの学問の内容を形成しているのかという問題に考察を向けざるをえないのも、無理はない」〔前注16〕と指摘するホイスならではの見方であり、ことほど左様に、Nの立場を同定

175 Nが『ローマ史』第2巻・初版をゲーテに贈呈する際に添えた書簡〔Briefe AF Bd. II, S. 303f; 滝内訳・前注132・117頁以下〕。

するのは容易ではない。いずれにせよ、普遍史の問題は啓蒙期歴史学の実相とも絡んでN論のテーマである¹⁷⁶。

【補遺4】『ローマ史』の英語訳

1) 「イギリスにおけるローマ史の批判的研究はニーブールの翻訳によってはじめられた」〔グーチ・前注6の下・39頁；Turner・前注102・p. 204f.〕と評される。そして、主著『ローマ史』の英語版には原著の改訂状況に応じて2系列が存在する。まず、1802年発刊の自由党系の第三次『エジンバラ・レビュー』が27年6月号の末尾に掲げた告知¹⁷⁷を訳出しておこう。

「われわれは、当今の最も著名な作品のひとつであるニーブール氏の『ローマ史』に関する記事を読者に提供したいと夙に願ってきた。し

176 啓蒙期歴史学については、岡崎・前注27、守矢・前注10・1225頁以下のほか、坂 昌樹「ドイツ啓蒙の実用主義について」国際文化論集〔桃山学院大学総合研究所〕21号（2000年）189-262頁を参照。

177 Anon. Note on Niebuhr's Roman History, in: The Edinburgh Review, vol. XLVI, 1827, p. 268. なお、Jeremy Bentham〔1748-1832〕が1823年に創刊したThe Westminster Review vol. XI, July-October, 1829, p. 353-388が、『ローマ史』原著・初版とその英訳〔後注178〕、原著・第二版の英訳〔後注180〕、原著・第三版、ヘアの反論書〔後注187〕の書評を掲載する。書評は、大略、《出版から15年ほどになるNのこの著作がローマの歴史についての徹底した革命を遂行する運命にあるという確信を読者に印象づけているのに、わが国ではその声がほとんど聞こえてこなかったことほど、ドイツ文学〔German literature〕に関してわが国で最近まで優勢であった無関心を雄弁に物語るものはない》と始まる。

なお、日本における「文学」概念の拡張を試みた加藤周一〔1919-2008〕は、「日本語の〈文学〉は英語のliteratureを翻訳したのだけれども、……英語ではimaginative or critical, all writing in prose or verse. これを直訳すると『散文または韻文のすべての著作。ことに想像力を働かせた、あるいは批判力を働かせた文章』となります」と指摘する〔同『日本文学史序説』補講（2006年）6頁〕。この「文学」概念は、木庭・前注36・1頁以下の「権力と利益をめぐる絡まり合い、その中で発生する抑圧、を徹底的に解体する……営みが政治であり、これは文学によって基礎付けられた。政治はデモクラシーと法という発展型を持った。これに伴い、文学は哲学と歴史学という二つの分枝を発展させた」にも通じるであろう。

かし、著者が新作とも言えるほどの増補・改訂を施す第二版の準備に余念がないと分かったので、われわれはそれが上梓されるまで書評を延期することとした。しかも目下準備中の第二版の翻訳が、ニーブーア氏本人による賛同と許可のもとでCambridge Trinity Collegeのヘア、サールウォール両氏によってなされると聞き及ぶに至り、われわれは、そのような決定版が一般読者の手に届くまで書評を控えることが当を得ていると考える。たしかに、〔同書の〕翻訳はすでに出ている¹⁷⁸。しかし、それが初版によるものであり、その初版たるやニーブーア氏本人が満足しておらず否定していると分かった以上、われわれの判断は妥当であろう。公平性からみて、彼を組上に載せるには、彼が決定版として提供するものについて、しかも、彼が原典に忠実なものとして受け入れる翻訳によることが、英国民の責務である。サールウォール氏は、世にルカ福音書に関して極めて独創的な数多くの作品があるなか、シュライアーマッハー論文の翻訳¹⁷⁹により手腕と学

178 The Roman History by Barthold Georg Niebuhr. Translated from German by F [rancis] A [ugustus] Walter, 2 vols, 1827. Nのドーレ・ヘンスラー宛書簡〔1826年7月26日と11月1日〕によれば、Nはこの最初の英訳本について翻訳が酷かった〔abscheulich〕ので出版を思いとどまるよう出版社に申し入れたが効を奏さなかった、とされる〔前注131・Bd. 3, S. 173, 177f.〕。しかし、Briefe NF Bd. IIIはこれらの書簡を収録しない。別の書簡〔1826年9月16日付け〕では、《訳者の能力は小中学生並みでして、出版社がゲラの送料を負担するという条件でゲラを点検することに不承不承応じたのですが、刷り上がりはゲラ以上に酷いものであり、著者監訳などと宣伝されては堪らない代物でした》と書いている〔後注183・Donaldson・p. 358〕。

なお、Turner・前注102・p. 418, note 10は、どの書簡を前提にしたのか不明だが、「1812年版のmediocreな翻訳が1827年に刊行された」とする〔下線部の当否は措く〕。Murray・前注146・p. 246はこの二巻本の訳者を後述のヘアとサールウォールとする。

179 Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, Über die Schriften des Lukes: Ein kritischer Versuch, 1817; Friedrich Schleiermacher, A Critical Essays on the Gospel of St. Luke, Translation, with an introduction by Connop Thirlwall, 1825. 参照：ディルタイ・前注150・596頁以下。

識の双方でそれらを凌ぐほどの作品の著者として知られている。第二版に向けたニーブーア氏による手直し〔に時間がかかっているのに〕は政治的な思惑があると言われてきたが、われわれは、この指摘はじつにいい加減なものであると思う。」

2) この告知のとおり、新しい英訳第1巻は、ヘアとサルウォールの共訳で全訂・第二版〔27年〕を底本として28年に出版された。なお、訳者は原著に欠けている文献上の典拠を補っている。Nは原著の序文〔26年12月8日付け〕を維持したままで新たな序文を寄せていないが、訳者は序文の末尾で《著者は健康上の理由でこのローマ史の第2巻を上梓するのを妨げられてきました。しかし訳者たちは、それが間もなく出版されれば自分たちの手でそれを英国の読者にお目にかけることを望んでおります》と付記する〔p. xiv〕。そこでいう第2巻の全訂・第二版〔30年〕を底本とする英訳が出るのは、32年である。しかもこの段階では、31年に急逝したNの遺稿を編集した第3巻の刊行が間近かであった。この情報を得ていた訳者は、第3巻の内容に言及して自分たちが翻訳に当たることを予告する。しかし、後述のように32年にヘアが大学を去ったことによるのかは不明であるが、原著第3巻〔32年〕の英訳は、訳者が交替してWilliam Jr. Smith〔1813-93〕とLeonhard Schmitz〔1807-90〕の共訳で42年に刊行される¹⁸⁰。

Nの信認を得た二人の訳者、ジュリアス・ヘア〔Julius Hare : 1795-1855〕とコノップ・サルウォール〔Connop Thirlwall : 1797-1875〕を紹介しておく¹⁸¹。二人はともにNの元秘書官でプロイセン国王の信頼厚いブンゼン〔前注73〕に心酔しており、二人とこの人物との交流から延びる

180 The History of Rome, London, vol. 1, 1828, 556 p. ; vol. 2, 1832, 641 p. ; vol. 3, 1842, 620 p. + Register p. 621-p. 717. この三巻本は2010年に、Cambridge Library Collection Books of enduring scholarly valueとして復刻された。しかし、第1巻の底本は、28年・初版であって後述の29年・改訳第二版ではない。

181 Susanne Stark〔前注168〕のうち、ヘアらについては Ch. 4 Translators and Philologyを、また、Nについては Ch. 5 Translating the Pastを参照。

人脈が、イギリスにおけるNの受容、ひいては19世紀前半のドイツ精神文化のイギリスへの移入に多大な影響を与えることになる。

ヘアは、イタリア生まれだが1799年に両親とともに渡英し、また、1804年から翌年までワイマルで過ごして幼いながらゲーテやシラーとも会って生涯ドイツ文学への関心を持ち続けた。06年に進学した公立のTonbridge校を経て1812年にケンブリッジのTrinity Collegeに進む。修了後一時期、法律職に就いたのち、22年から32年まで母校のチューター助手を務めた。この間26年には聖職者に叙任され、32年には叔父の死にともない名門聖職禄を引き継いで大学を去る。

他方、サールウォールは、Tonbridge校時代から大学もヘアと同窓である。18年に奨学金を得て大陸を訪れたのち、志望を聖職者から法律家に変更するが、他方で前記のルカ福音書論のほかドイツの小説の英訳も続けた。結局、27年に法律に見切りをつけて国教会の執事〔deacon〕に叙任される¹⁸²。32年にはヘアと入れ替わりにチューター助手となる。

3) ところで、原著の第1巻には補訂・第三版〔28年〕がある〔前表〕。その序文〔28年4月9日付け〕によれば、大略、《先行する版で示した結論を放棄することは決してなかったが、多くのことを付記したほか、以前に得られた結論を最終のものとする新たな事柄を付け加え、いくつかの見解にはより確実なダメ押しをしておいたし、しばしば叙述や表現の明晰さ

182 人名辞典類でのこの記述とは違って、グーチ・前注6の下・30頁は「奨学金を得、その後数年間を衡平法裁判所の法廷弁護士として過ごした。1827年に彼は聖職につきトリニティ・カレッジに帰り……」と述べて、彼の『ギリシア史』の論評に進む。また、J. S. ミルも、25年から30年にかけてのオーウェン主義者の会による公開討論会に触れて、「私が非常な感銘を受けたのは、歴史学者コノップ・サールウォールの演説である。当時は大法院の弁護士を務めており、のちに聖デビッド教会主教になった〔1840-74〕。……話し始めていくらか経たないうちに、これまで聞いた中で最もすぐれた弁士であることがわかった。その後も今日にいたるまで、氏を上回る演説の達人には出会っていない。」と述べている〔前注163・『ミル自伝』・105頁以下〕。

を図った》[S. XIII f. = 『訂正版』 S. XVIII = 『新版』 S. XXXIII]。にもかかわらず、なぜ決定版ともいふべきこの補訂・第三版を英訳第1巻の底本にしなかったのか。その経緯は、マンチェスターのジョン・ライランズ図書館の紀要論文¹⁸³に拠れば、おおよそ以下のである。

ロンドン大学御用達の出版・販売人〔Bookseller and Publisher to the University of London〕たるJohn Taylorが英訳第1巻のゲラをNに送付したところ、Nは、Taylor宛ての書簡〔27年11月4日付け〕で《執筆者の気分の陰影までも写し取る訳もあり得ると想像したことはありますが、よもや私がそれを手にできようとは思ってもみませんでした》と絶賛した。Taylorはこれを宣伝文句に使用しようと持ちかけるが、ヘアはいかにも彼らしくそれを禁じた。そして28年春にNから、約束した第1巻と第2巻の見直しは数か月内には終えられないとの知らせを受け取る。しかもその少し前にNは、変更は些細なものとなるだろうとも伝えていた。そこで訳者もTaylorもそう踏んでそのまま事を運び、前述の全訂・第二版〔27年〕を底本とする第1巻が売り出されて、28年秋までに完売となる。ところが、訳者が受け取った補訂・第三版〔28年〕は、約40頁も増えており、「ほぼ完全に書き換えられている〔be almost entirely rewritten〕」。出版人も訳者もこれではもはや増刷の域を超えていると判断して直ちに改訳作業に取りかかり、翌29年に“second edition revised with the additions in the third

183 G. F. Mcfarland, Julius Charles Hare: Coleridge, DeQuincey, and german literature, John Rylands Library, 47, 1964, p. 165-197 (p. 176f.). なお、英訳の出版をめぐるNの書簡として、出版人や訳者へのものとは別に、出版を仲介したJohn Welsford Cowell〔1796-1867〕宛て6通がある。名宛人は、財界人で、1821年・政治経済クラブ〔the Political Economy Club〕の創設メンバー、34年・改正救貧法案の共同提案者の一人である。掲載誌への掲載申請の書簡とあわせて、J. W. Donaldson, To the Editor, Journal of Classical and Sacred Philology 4, 1859, p. 355-373が収録する。但し、目次のタイトルは、English Letters of B. G. Niebuhr on the Translation of his History of Romeである。

edition of the original” を刊行する¹⁸⁴。

Nも出版人もこの名訳を早く出版したかったのは間違いない。しかし、それは読者のためだけなのか。出版契約書は発見されていないようだが、この経緯の背景には、版權買取りという当時の出版慣行があるのかも知れない。それは、出版人が奨める『衰亡史』の改訂を拒んだギボンが新たに『自伝』を書き下ろしたというエピソード〔前注30・410頁以下〕やフランス語版での「訳者まかせ」のNの態度〔前注92〕とも通じるであろう。

4) 1828年刊行の第1巻には、一つの副産物がある。それは、前述の告知の末尾にいう「政治的な思惑」と関わる。『エジンバラ・レビュー』に対抗して1809年に創刊された保守党（トーリー党）系の『クォーターリー・レビュー』は、29年1月/4月号に前年刊行のGranville著のロシア旅行記ほか2冊の匿名書評を掲載する¹⁸⁵。書評子は、「Granvilleも言うように」と前置きして、Nは『ローマ史』の初版で自分の「政治的信条〔political principles〕」を喧伝して読者を煽っておきながら、ドイツの大学のゴタゴタ〔前注155の冊子に端を発するシュマルツ事件〕に遭遇したために変節して、英訳第1巻の原著ではそういう信条とは無関係を決め込んだと指弾したほか、Nを理神論者・不信心者・懷疑主義者¹⁸⁶と呼び、「厚かましく

184 Nは、サヴィニー宛て書簡〔28年11月13日付け〕では《イギリスでは翻訳1000部が完売しました。訳者は、第三版で新版を作ることを考えています。イギリスでは私の結論が異論なく勝利しております》と、また、ブンゼン宛て書簡〔28年12月29日付け〕では《イギリスでは『ローマ史』の成功は争いようがないと思われます。はやくも10月にはヘアは第三版による新版を口にしています》と述べる〔Briefe NF Bd. III, S. 394 und S. 417. 下線は引用者〕。

185 QR vol. 39, No. 77, p. 1-40. [A. B. Granville, St. Petersburg, 2 vols. 1320 p. ほか2冊]。編集者は、Granvilleの大作ぶりを印象づけるためか、タイトルページで、各国のアカデミー会員をはじめとする彼の肩書きを寿限無も顔負けの長文で列挙している。なお、グランヴィル〔Augustus Bozzi Granville : 1783-1872〕は、イタリア生まれの医師だが、イギリス人女性と結婚してロンドンに移り住み、医師と文筆家で生計をたてた。

186 A. Momigliano・前注27・p. 299ff.=S. 17ff.によれば、18世紀の歴史学は非文献史料などを動員して歴史的な議論の信ぴょう性を担保することで歴史研究に

て頭が鈍い哄笑家 [a pert dull scoffer]」と決めつけた。これに直ちに激越に反論したのが、訳者ヘアによる『クォーターリー・レビュー誌による告発からニーブール「ローマ史」を擁護して取り戻す』である¹⁸⁷。さきの図書館の紀要論文によれば、反論の要点は三つある〔前注183・p. 177-180〕。

第1に、Nの『ローマ史』を初めて英国に紹介した25年の『クォーターリー・レビュー』誌は、Nに政治的あるいは宗教的な問題があるとは一言も指摘していない¹⁸⁸。しかも、ドイツの名だたる学者でNの仕事を知る者がNに見出したのは、学問への深い愛にほかならない。Nの『ローマ史』が読者に及ぼす影響は、古代史の全領域にまったく新しい光を当てたことによるのであって、自分の政治的な見解の煽動によってではない。

第2に、Nの政治的信条は、一貫して「寡頭政であれ民主政であれ独裁に対する敵視」である。しかし、いくら信条を強調するとしても、党派の奴隷にならないためには力点を移動させること〔shift〕もやむ得ないことがある。われわれ同時代人にとっては不可解な無定見〔baffling inconsistencies〕と映りがちであっても、それはつぎのような一貫性のあり方な

おける懐疑主義に対抗する〔参照：守矢・前注10・1221頁以下〕。この対抗の担い手は、Nの立場では、第一次的には歴史家ではなく文献学者であると解することになろう〔前注107〕。

187 J. Hare, A vindication of Niebuhr's History of Rome from the charges of the Quarterly Review, 1829, 63 p. 末尾 p. 61以下に、編集者の奨めに応じたサールウォールの後書きが付されている。

なお、前注177・The Westminster Reviewの書評子は、QR誌がNを“a pert dull scoffer”と決めつけた背景について、大略つぎのように述べる。すなわち、《Nが、創世記のいくつかの話を歴史上の出来事としなかったし、初版に寄せられた酷評から学んでいない可能性があり、その宗教上の信仰が独特であり、ときには買いかぶられるかもしれないからである》〔p. 356〕。

188 執筆者のアーノルド〔Thomas Arnold: 1795-1842〕は、ローマ史家でもあり、「ニーブールの改訂版を彼ほど大きい喜びをもって迎えた人はいなかった。また彼ほどこの著者に深い敬意を抱いた人はいなかった。……彼の抱負はニーブールの研究方法を模倣して、『正しく疑い、正しく信じる彼のすぐれた方法を実行する』ことであった」と評される〔グーチ・前注6の下・38頁以下〕。

のである。すなわち、《政治的な一貫性を図るうえでもっとも難しいのは、振幅〔the rock〕である。仲違いを回避することではなく、引き際を知ること、成功への恐ろしいまでの誘惑に抗うこと、かつては戦線をともにしても勝利を得るやそれを濫用し始める友人からは身をひくこと、これまではどうしようもない敵意を抱いていた者とも手を結ぶこと、あまりにも強くなりすぎてしまった者を弱くなりすぎる前に救うこと、権力を濫用する者を濫用によって潰れる前に救うこと、なのである》〔前注187・p. 20〕¹⁸⁹。

第3に、Nの宗教上の立場については、書評子が具体的な箇所を特定していないので反論のしようがない。ともあれ、歴史的な事件で神意〔the Holy Spirit〕が働くことをNが信じている一例として、『プロイセンの通信員』〔前注151〕が言及するロシアのナポレオンを襲った悪天候がある。要するに、《Nの宗教上の信仰が何であるかを私は知らない。キリスト教の特殊な教理や秘蹟に関するかぎり、言えるのはそれだけである。これに対して、神の摂理と審判の正義へのNの信仰は鮮明である。聖書のいくつかの箇所の歴史的価値にかなりの疑念とためらいをもちながらも、キリスト教の信仰とそれへの心からの愛とを結びつけることは、宗教的感情や知識の現況のもとでのドイツで十分に可能だということを私は知っている》〔前注187・p. 59〕。

ちなみに、懷疑主義と信仰について、『ギボン自伝』・前注101・71頁は『歴史批評辞典』の著者バール〔Pierre Bayle : 1647-1706〕に関するエピソードとして、「彼は聡明なポリニャク神父（後の枢機卿）との会話で思いき

189 ヘアは、その種の「不可解な無定見」の見事な例としてE・パークを挙げる。パークの膨大な翻訳をつうじて研究の基礎を提供してきた研究者は、彼をめぐる毀誉褒貶の一例として「一つの単純な指導的命題や情念ごとに必ず他の箇所ですそれを否定する正反対の命題が見出されぬことがない理論だ」という評価を紹介する〔中野好之編訳『パーク政治経済論集 保守主義の精神』（2000年）1061頁〕。Nは、パークとこの「哲学」を共有しえたからこそ、『フランス革命の省察』〔前注120〕をも受容できたのかも知れない。

り彼の普遍的ピュロニズム（絶対的な懐疑主義）を吐露した。『私は最も厳密な意味でのプロテスタント（抗弁者）です。（と語った）何となれば私はあらゆる体系あらゆる宗派に無差別に抗弁しますから。』と述べる。19世紀中葉のイギリスでも、「懐疑主義」というレッテルは、宗教的信仰を疑問視する論者に向けられる。この点からも、聖職者である訳者（ヘアとサールウォール）にとって、「懐疑主義」というレッテル貼りは看過できないものであったといえよう。

【補遺5】講義録の英語訳

1) 講義録の翻訳を構想したのは、前述の『ローマ史』第3巻の英訳〔42年刊〕を担当したレーオンハルト・シュミッツである。彼は、07年にドイツで生まれボン大学のNの講義を受講したのち、英国人女性と結婚して37年にイングランドに移住して古典学者として活動し、the High School of Edinburghの校長でもあった。その著述活動は旺盛で、彼の名を冠した著作は数十点を超える〔以下、下線は筆者による〕¹⁹⁰。

前述の英訳を終えた時点で彼は、ドイツでも出版されていないその続きに相当する部分を、自分もっているNの講義ノートをもとに出版しようと考えた。しかも、それを既訳の『ローマ史』の「第4巻」および「第5巻」として編製して、「講義録」とは言え、既訳分と一体のものにしようとして構想した〔後記①の序文〕。

そして、その一部を1844年に刊行した。すなわち、①『ニーブーアによるローマ史講義。第一次ポエニ戦争からコンスタンティヌス帝の死〔337年〕まで。ローマ史の研究および史料に関する手引き付。Leonhard

190 たとえば、Leonhard Schmitz, A History of Rome, from the Earliest Times to the Death of Commodus, A. D. 192, New York 1847のように、Nの著述の英語版の標題と紛らわしい著作が数点あるが、それらはいずれもSchmitzの単著である。なお、この47年版と後記①の書評として、Anon., The North American Review vol. 66, No. 139, 1848, p. 280-287がある。

Schmitz編』二巻本である¹⁹¹。他方、翌45年には、『ローマ史』三部作の続きを期待していたドイツで、早速この二巻本を底本とするドイツ語訳が出版される。すなわち、『ニーブーアの講義によるローマ史。第一次ポエニ戦争からコンスタンティヌス帝の死まで。ローマ史の研究および史料に関する手引き付。Leonhard Schmitz編。グスタフ・ツァイスによる英語版の訳と若干の注』二巻本である¹⁹²。

2) ところが、46年に、当のドイツでイスラーが編集した『講義録』の第1部門三巻本〔補遺3の③・④・⑤〕の刊行が始まる。そこで彼は、❶の刊行継続を変更し、このIsler版講義録三巻本を底本として自分のノート〔標題では、「MSS（草稿）」と表記〕を加味した翻訳に着手する。そして、48年に、❷『ニーブーアによるローマ史講義。最初期から第一次ポエニ戦争の勃発〔B. C. 264〕まで。M. Isler編。Leonhard Schmitzによる訳と草稿にもとづく多くの附記〕を刊行した¹⁹³。

しかし、翻訳権が確立していない時代のこととて、早くも49年には、ノートを参看する❷の翻訳方針に異を唱えて、Isler版講義録三巻本の忠実な

191 ❶ Lectures on the History of Rome, from the Punic war to the death of Constantine, by B. G. Niebuhr. Including an introductory course on the sources and study of Roman History. Edited by Leonhard Schmitz, vol. I, Forming the Fourth volume of the Entire History; vol. II, Forming the Fifth volume of the Entire History, London 1844.

192 Römische Geschichte von dem ersten punischen Kriege bis zum Tode Constantins, mit einer Einleitung über die Quellen und das Studium der römischen Geschichte, nach Niebuhr's Vorträgen bearbeitet von Leonhard Schmitz. Aus dem Englischen übersetzt und mit eigenen Bemerkungen versehen von Gustav Zeiß, Bd. I und Bd. II, Jena 1844.

編訳者のツァイス〔Gustav Zeiß : 1811-75〕は、ライプツィヒ大学で文献学を修めたのちイタリア旅行でローマ古代史に関心を寄せ、ワイマルのギムナジウムで歴史とドイツ文学を教えた。

193 ❷ Lectures on the History of Rome, from the Earliest Times to the commencement of the first Punic War, By B. G. Niebuhr. Edited by M. Isler. Translated, with additions from MSS. Leonhard Schmitz, London 1848.

翻訳を謳う作品が登場した¹⁹⁴。そこでSchmitzは、再び方針を転換して底本に手を加えない翻訳を出版する。すなわち、③『ローマ史講義。最初期から西ローマ帝国の没落〔410年〕まで。Leonhard Schmitz編。Islerのドイツ語版のみにもとづく附記』三巻本である¹⁹⁵。以上の紆余曲折を経て「講義録」第1部門の翻訳を終えたSchmitzは、他の部門の翻訳に進む¹⁹⁶。

3) 問題は、③の第1巻の刊行年である。タイトル頁での表記は、第2巻と第3巻ともに1849年である。また、第2巻のみに付された49年5月付けの「第2版への序文」によれば、同書は「1844年に刊行された本講義の初版〔=前掲①〕」の第2版である〔p. vii〕。これに対して、第1巻のタイトル頁だけ刊行年が1850年である。そこで先に引用したMurray論文は全三巻の刊行年を49年とし〔前注146・246頁〕、同様に解する書誌カードも散見される。にもかかわらず、表記どおりに1850年とする図書館もある¹⁹⁷。

194 Lectures on Roman History delivered at the University of Bonn by B. G. Niebuhr, from the Edition of M. Isler. translated by Havilland Le M [esurier] Chepmell [1811-87] and F [ranz] C. F. Demmler, vol. I - vol. III, London 1849 [出版年を異にする刊本もある]。

195 ③ Lectures on the History of Rome, from the Earliest Times to the Fall of the Western Empire. By B. G. Niebuhr. Edited by Leonhard Schmitz, with every additions derivable from Isler's German Edition. In three volumes, Vol. I., London 1850 [?], Vol. II 1849, Vol. III 1849.

196 第2部門〔補遺3の⑥・⑦・⑧〕の訳=Lectures on Ancient History, 3 vols., London 1852. 第3部門〔補遺3の⑨〕の訳=Lectures on Ancient Ethnography and Geography, 2 vols., London 1853. 但し、第4部門〔補遺3の⑩〕に対応する英訳は見当たらない。

197 「第1巻が〔最終配本であって〕1年遅れて刊行された可能性も捨てきれない」との見解〔Catherine M. Parisian, Catalogue of the First White House Library, in: idem, The First White House Library, A History and Annotated Catalogue, 2010, p. 252, No.121〕を、私は支持したい。第2巻は前記の序文に続けて44年版〔=前掲①〕の序文を掲げるが、第3巻に序文はない。第1巻は、48年版〔=前掲②〕の序文を脚注と末尾の「読書の手引き」を省略して転載するにとどまる。全三巻が一括してであれ第1巻から順にであれ一年間で刊行を終えたとすれば、その冒頭に位置するはずの第1巻にそれが「第二版」であることの説明を欠くのは不自然であろう。

いずれにせよ、さらに70年には、④『ローマ史講義。最初期から西ローマ帝国の没落まで』が出版される。これは、序文によれば、読者の経済性と利便性を図るために、本文を二列〔全798頁〕、索引を三列〔全13頁〕に組んで前述の③『第2版』三巻本を一巻本としたものであり、版の表記は〔44年版から算えて〕『第3版』である¹⁹⁸。

【補遺6】『ニーブーアの生活の消息』の英語訳

1) その作品のすべてが日本語に訳されていると言われる小説家であり伝記作者でもあるギャスケル〔Elizabeth Gaskell : 1810-65〕は、家族ぐるみで交際していたウィंकワース家の次女で伝記作家志望のスザンナ〔Susanna Winkworth : 1820-84〕から1850年頃に、『ニーブーアの生活の消息』〔前注131〕の英訳計画について相談を受ける。彼女は、スザンナの意向を知人でNのローマ公使時代の秘書官ブンゼンに伝える。ブンゼンから励ましを貰ったスザンナは、50年8月から翌年5月まで10ヶ月間ボンに滞在して、彼の秘書役を勤める傍らNに関する新資料を収集した〔経緯につき諸説ある〕。しかし、予定していた出版社は出版を拒絶した¹⁹⁹。

2) にもかかわらず日の目を見た訳書に関する情報は錯綜しており、辞書類によれば、「51年刊行の三巻本」や「雑纂〔miscellaneous〕を増補した53年刊行の第2版」が存在することになっている。しかし、私はそれらの所蔵機関を確認できていない。現物で確認しえた項目は、以下6点である。

- ① 52年にロンドンの「Chapman and Hall社」から三巻本が刊行された、
- ② その書名は『パールトルト・ジョージ・ニーブーアの生活と書簡および彼の小論選。スザンナ・ウィंकワース編・訳 彼の人柄と影響に關す

198 この編製は、『ローマ史』の『訂正版』のひそみにならったのかも知れない〔前注124〕。なお、1873年の『第4版』は、出版社の社主の死亡により版權がTaylor and WoltonからLockwood & Co.に移ったことによる、実質的には『第3版』の増刷である。

199 Stark・前注168・p. 24ff.; Turner・前注101・p. 505.

るブンゼン卿・ブランディス教授・レーブル教授による随想付き』である²⁰⁰、③ その第1巻には年月日不詳の「初版への序文〔Preface to the first edition〕」〔p. v-x〕と52年11月17日付けの「第2版への序文」〔p. xi-xiv〕が付されている、④ 52年にニューヨークの「Harper & Brothers社」から年月日不詳の「序文〔Preface〕」を付した『バルトルト・ジョージ・ニーブーアの生活と書簡。彼の人柄と影響に関するブンゼン卿・ブランディス教授・レーブル教授による随想付き』という一巻本²⁰¹が出版されている、⑤ ニューヨーク版の序文はロンドン版「初版への序文」のみを（一巻本に対応させる表現の訂正および資料不足を嘆く4行程度を除き）ほぼ一字一句転載している、⑥ 訂正済みの表現では「言及された書簡²⁰²を、Nの小論のうちもっとも価値のあるもの²⁰³と併せて別巻で²⁰⁴出

200 The Life and Letters of Barthold George Niebuhr, and selections from his minor writings, edited and translated by *Susanna Winkworth*; with essays on his character and influence by the Chevalier Bunsen, and Professors Brandis and Loebell, second edition, in three volumes, London Chapman and Hall, 1852. vol. 1, 424 p.; vol. 2, 453 p.; vol. 3, 297 p.

201 The Life and Letters of Barthold George Niebuhr with essays on his character and influence, by the Chevalier Bunsen, and Professors Brandis and Loebell, New York Harper & Brothers, 1852, 563 p. ロンドン版にあった「および彼の小論選。スザンナ・ウインクワース編・訳」の表記が欠落している。これは、ニューヨーク版がロンドン版第3巻収録の「彼の小論選」を含まないからである。なお、54年のニューヨーク版はこの52年版の増刷である。

202 この書簡の大部分は、ロンドン版「第2版の序文」にいうNのオランダ駐在時代の回付状〔前注64〕を指す。その英訳をロンドン版第3巻が収める。

203 この小論とは、「第2版への序文」によれば、エウセビオス論〔前注99〕である。この選択には、当時のイギリスにおける、聖職者の権威や儀式を尊ぶ運動〔High-Church Movement〕と、教理や儀式を強いることなく理解を重んじ寛容の精神を尊ぶ運動〔Low-Church Movement〕との対立〔齋藤 勇『イギリス文学史』改訂増補第5版〕（1974年）387頁注2〕が関係するのかも知れない。なお、この小論のロンドン版第3巻所収分は抜粋であり、「全訳はDr. Kito's "Journal of Sacred Literature"の近刊号に掲載される」との注記がある。

ちなみに、このエウセビオス論と関わるスカリゲルの評伝として、*Jacob Bernays* [1824-81], *Die Lebensbeschreibung des J. J. Scaliger*, 1855がある。英国

版する予定である」となっている〔p. viif.〕。但し、私は⑥にいう「別巻」の現物を確認できていない。

なお、原著第3巻末尾近くに配された4人の『Erinnerungen』〔前注131〕のうち、ロンドン版が「Essays」として第3巻に転載したのは、ボン滞在中に助言をもらったブンゼンとブランディスのみであり、サヴィニーを削除し、クラッセンをレーブル〔Johann Wilhelm Loebell : 1786-1863〕と差し替える。彼は、29年にボン大学の員外教授となり、31年にNの後任の正教授となった歴史家である²⁰⁵。

また、ロンドン版が後述の訳注や新たな書簡や小論を追加しながらも、ドイツ語版三巻本を三巻本として編成できたのは、原著収録の602通から歴史学や文献学に関する専門性の高い書簡すべてを省いて収録数を377通に絞ったこと、及び、原著第3巻末尾のセル宛書簡〔S. 371-452. 前注152〕を省いたことによる。ニューヨーク版が三巻本のロンドン版を一巻本に圧縮できたのは、第3巻を別巻に送り、残る二巻からの収録書簡を373通としたほか活字のポイントを下げて行間も詰めたことによる。

3) 三種類の序文からの私の憶測は、以下のとおりである。当初計画は、ドイツ語版三巻本の書簡に取捨選択を加えて二分冊で翻訳することであっ

教会の聖職者でありLincoln College Oxfordの名誉学長〔rector〕でもあったパティソン〔Mark Pattison : 1813-84〕にその英語訳を早くも56年に決意させたのは、イギリス滞在中のブンゼンであった。Vgl., A. Momigliano, Jacob Bernays・前注27・S. 204-231 (S. 206f.). なお、当時のrector職につき、J. S.ミル著・竹内一誠訳『大学教育について』〔原著1867年。岩波文庫・2011年〕135頁訳者註(1)を参照。

204 「初版への序文」では、“a third volume”である。

205 三人の随想は第2巻末尾に配されており、そのタイトルと執筆者は、① On the Character of Niebuhr by Brandis p. 420ff. : ② On Niebuhr as an Historian by Loebell p. 430ff. : ③ On Niebuhr as a diplomatist by Bunsen p. 439-453である。なお、レーブルがボン大学の正教授に就いたのは1831年3月であるが、担当は近世史である〔前注76所収の、Paul Schmidt, Johann Wilhelm Loebell 1786-1863, S. 79-92 (S. 84)〕。

たところ、原著の編集方針に批判的なウィंकワースは「初版への序文」で、独自に収集した情報をもとに訳注を付すに至った経過〔後述〕のみならず、前記⑥に対応する言質も披瀝した。このため、出版は拒絶される。ところが、「Chapman and Hall社」がウィंकワースの方針を受け入れて三巻本での出版を承諾する。そこで彼女は、「初版への序文」をそのまま使いさらに新たに「第2版への序文」と題する文章を付け加え、「この版では初版でなされた約束が、オランダ発の*N*の書簡の一部やサヴィニー宛での別の数通に加えて、英国の読者の興味をもっとも期待できそうな雑纂〔miscellaneous〕からの翻訳でもって果された」と説明した〔前記⑥の訂正前の文章。参照：前注202と203〕。

以上からして、「51年刊行の三巻本」はそもそも存在しないのではなかろうか。また、「雑纂を増補した53年刊行の第2版」が存在するとすれば、それはニューヨーク版の第2版と解するのが順当であろう。しかし、ニューヨーク版は54年に第2版として増刷されている〔前注201〕。したがって、「雑纂を増補した53年刊行の第2版」も存在しないのではなかろうか。

4) いずれにせよ、「初版への序文」は、原著第3巻末尾の「結語〔Schlußwort〕」で提示された編集方針を、典拠を示さずに“ ”を付して英訳する。その部分の大意は、(独英の微妙なニュアンスを棚上げすれば) つぎのようである。すなわち、《書簡から抜粋する際に、何らかの批判な規則にしたがって書簡を編集しようなどとは考えなかった。ただ、伝記を提供しようとしてだけ考えた。つまり、*N*について、素質、受けた教育、学修状況、ものの考え方、人生や国家や芸術や文学に関する見解、市民としての友情関係や家族関係、それらにおける振る舞い、豊かで深い感性、高貴なものや美しいものに対する感受性、正義と真理への情熱、さらには短所や弱点にも光を当てうるような事柄を伝えることである。あれこれを見落としてたり、別の選択肢があったかも知れないが、取捨選択の判断は編者に

よって異なるし、その評価は読者の考えや感情に左右される。存命中の人たちに対する無遠慮な扱いやNの感情を冒瀆するようなことだけは、できうかぎり避けようとした。しかし、配慮しすぎて活字にしなかった場合（たとえば、イギリスから婚約者に宛てた手紙にみられる愛情のこもったいくつかの表現など）もあれば、無意識のうちに活字にしてしまった場合もある。そういう箇所に出会ったら、どうかご賢察いただきたい。》

5）これに続けてウィנקワースは、大略以下のように述べる。すなわち、《思うに、注意深い読者なら、ヘンスラー女史が概ねその目的を達成しており一個の人間としてのNの像を提供したことを否定する者はいないであろうし、私事についての配慮の完璧さや公平さの点でこれに優る伝記の数は少ないであろう。しかし、それに劣らず確かなことは、原著ではNの公的な事績の説明が非常に不完全であり、Nが時代とどのように向き合ったかを理解することは全く不可能だということである》。ここには、18世紀のイギリスで確立された「伝記」というジャンルの指標²⁰⁶のみならず、伝記作家志望の訳者の自負が垣間見える。

そして、彼女は自分の編集方針を大略つぎのように続ける。すなわち、《私の訳書は、伝記的な注釈について、ヘンスラー女史の説明を下敷きにしてはいるが、あるときは他の著作を、またあるときはNの親しい友人たちからの聞き書きをもとにして、かなりの量の説明を付け加えている。それらは、原著の各章が書簡の紹介に先だって置いている解説に組み込んだ場合もあるが、そうすることで話の流れに差し障るときは各書簡の脚注に入れた》。この序文をまともに受け止めるとすれば、原著の利用にあたっ

206 もちろん、別の指標もありうる。たとえば、世界初の「英語辞典」の執筆者であるサムエル・ジョンソン〔Samuel Johnson：1709-84〕の伝記哲学は、「世俗的な名声のもととなる業績や出来事はさっと切り上げて、個人としてのその人物に思いを馳せ、細々とした日常生活を示す」というものであった〔ヘンリー・ヒッチングス著・田中京子訳『ジョンソン博士の「英語辞典」世界を定義した本の誕生』（原著2005年。2007年）7頁〕。

て精確さを期すには、英語版をも参照する慎重さが求められよう。

6)「第2版への序文」は、冒頭で、とくにブンゼンとの会話によって得られたNの宗教上の見解を注記できたことに感謝するとともに、第3巻冒頭で訳出するブンゼンの論考〔1852年10月31日付け書簡。p. xi-liv〕がNの政治的見解に大いに光を当てて従来の誤解を解くのに役立つであろうとの期待を示す。そして、「編者には、イギリスの雑誌類で実に広く出回っているNの結婚問題に関する話題にコメントしておくことは、Nを記憶にとどめるうえで必要であると思われた。そうせずに遣り過ごしてしまうと、それを黙認したと受け取られかねない」と続けて、紙幅の半分強をこの問題に費やす。

その品性はともかく、オーブリー以来の「まさに『人間的』としか呼びようのない関心の持ち方で」逸話を収集するお国柄のもと²⁰⁷、《初婚でも再婚でもNの本命はヘンスラーであったのに、彼女が断ったので、Nは婚約者の指名を彼女に懇請し、彼女は自分の近親者を婚約者としてNに宛がってNをコントロールし続けた。そしてNとの関係を明示せずに、彼女は『Nの生活の消息』を編集してNとの記念にしようとしたのである》といった類いのゴシップが喧伝されていたようである。これに対してウィンクワースは、自分が集めたとするNの友人たちの証言を紹介して、風評が事実無根であることを示唆しようとする。すなわち、《ヘンスラー女史が断ったのは宗教上の当たり前の判断であり、若かったNは彼女への暖かい友情から彼女の側近くに身をおくことに決めて自分の判断で婚約者を選んだのであり、妻への彼の愛はじつに深いものであった》。

いずれにせよ、原著のタイトルにも「前言」にも「結語」にも登場しないヘンスラーが出版後間もなく「編者」として了解されてきた「謎」の背景には、このような風評があるのかも知れない。この点に関する言及がド

207 オーブリー〔John Aubrey : 1626-97〕著・橋口 稔/小池 銈訳『名士小伝』富山房百科文庫（1979年）xxii頁。

イッやイギリスでの書評に散見されるが、筆者の関心はそこに及ばない。

【補遺 7】 ニーブーアに関する学位論文²⁰⁸

- ① *Hermann Dreyhaus*, Der Preußische Correspondent von 1813/14 und der Anteil seiner Gründer Niebuhr und Schleiermacher. Diss. Marburg, 1909 [前注151].
- ② *Dietrich Gerhard* ²⁰⁹, Die Grundlagen der historisch-politischen Gedankenwelt Barthold Georg Niebuhrs, I : Die Voraussetzungen. Diss. Berlin 1923 [Heuss・S. 28f.].
- ③ *Adolf Trende* ²¹⁰, Niebuhr und seine Stellung zu Agrarfragen. Diss. Berlin 1922.
- ④ *Hans Sparwald*, Die Geschichtsforschung Barthold Georg Niebuhrs, ein Beitrag zu den Anfängen der neueren deutschen Geschichtsforschung um 1800. Diss. Leipzig 1925 [Heuss・S. 30, Fn. 23].
- ⑤ *Bernhard Vobian*, Barthold Georg Niebuhr und der Freiherr von Stein. Diss. Leipzig 1935.
- ⑥ *Fritz Renker*, Niebuhr und die Romantik. Diss. Leipzig 1935 [Heuss・S. 30, Fn. 23].
- ⑦ *Elisabeth Perfall*, Die geschichtlichen Beziehungen zwischen Justus Möser und Barthold Georg Niebuhr. Diss. Wien 1940.
- ⑧ *Corinna Gaedeke*, Geschichte und Revolution bei Niebuhr, Droysen und Mommsen. Diss. Berlin 1978, 189 S. [Heuss・S. 31f.].
- ⑨ *Marlis Oehme*, Die römische Villenwirtschaft Untersuchungen zu den

208 Rytkönen・前注14・S. 12f.が、②から⑦をNの研究史として列挙する。

209 後に、Briefe AFとNFの編集に従事する〔Ⅲの8〕。

210 後に、Forschungen zur internationalen Finanz- und Bankgeschichte: Barthold Georg Niebuhr, als Finanz- und Bankmann, Berlin 1919, 304 S. を編集して注釈を付す [Heuss・S. 30]。

Agrarschriften Catos und Columellas und ihrer Darstellung bei Niebuhr und Mommsen, Diss. Marburg 1988, 313 S.

【補遺 8】 ニーブーア没後百年の記念講演

- ① *Kurt v. Raumer*, Barthold Georg Niebuhr. Zu seinem 100. Todestag, in: *Zeitwende* 7, 1931²¹¹.
- ② *Franz Schnabel*, Niebuhr. Gedenkrede zum 100. Todestag am 2. Januar 1931, 1931²¹².
- ③ *Ulrich Wilcken*, Eine Gedächtnisrede auf Barthold Georg Niebuhr, *Bonner akademische Reden* Heft 10, 1931²¹³.
- ④ *Ernst Kornemann*, Niebuhr und der Aufbau der alt-römischen Geschichte, *HZ* 145, 1931, S. 277-300²¹⁴.

【補遺 9】 近時のモムゼン研究など

- ① *Karl Zangemeister*, Theodor Mommsen als Schriftsteller. Ein Verzeichnis seiner Schriften. Bearbeitet und fortgesetzt von *Emil Jacobs*. Neu bearb. von *Stefan Rebenich*, Hildesheim 2000.
- ② *Stefan Rebenich*, Theodor Mommsen: Eine Biographie, München 2002; TB 2007.

211 著者〔1900-82〕は、Friedrich Ludwig Georg von Raumer〔前注139〕の弟の地質学者Karl Ludwig Georg von Raumer (1783-1865)のひ孫であり、第二次大戦の前・後を通じてミュンスター大学の近代史教授である。

212 著者〔1887-1966〕は、「歴史家とは政治的教育者である」と定義してワイマル共和国を支持し、ナチス期に罷免され戦後にミュンヘン大学に復職した19世紀史の専門家である。

213 著者〔1862-1944〕は、モムゼンの弟子でバビルス学を確立しボン大学などを経て1917年にベルリン大学に戻った古代史家である。

214 著者〔1868-1946〕は、モムゼンの最晩年の弟子であり、1918年からブレスラウ大学の古代史教授。講演は、1931年の第18回ドイツ歴史家大会のものである。

- ③ *Hans-Marcus von Kraenel et al.*, (Hg.), *Geldgeschichte vs Numistik: Theodor Mommsen und die antike Münze*, Berlin 2004.
- ④ *Convegno sul tema: Theodor Mommsen e l'Italia*, *Atti dei Convegni* Lincei, 207, Roma 2004.
- ⑤ *Peter Orth et al.*, (conception et réalisation), *Théodore Mommsen et le Moyen Âge Catalogue de l'exposition préparée par les Monumenta Germaniae Historica á l'occasion du centième anniversaire de la mort de Théodore Mommsen et……*, Paris 2004.
- ⑥ *Jorge Martinez-Pinna* (coord.), *En el Centenario de Theodor Mommsen: 1817 – 1903*, Málaga 2005.
- ⑦ *Alexander Demandt* (Hg.), *Theodor Mommsen-Wissenschaft und Politik im 19. Jahrhundert*, Berlin 2005.
- ⑧ *Josef Wieshöfer* (Hg.), *Theodor Mommsen: Gerlehrte, Politiker und Literat*, Stuttgart 2005²¹⁵.
- ⑨ *Wilfried Nippel/Bernd Seidensticker* (Hg.), *Theodor Mommsens langer Schatten, das römische Staatsrecht als bleibende Herausforderung für die Forschung*, Hildesheim 2005²¹⁶.
- ⑩ *Arno Mentzel-Reuters et al.*, (Hg.), *Phönix aus der Asche Theodor Mommsen und die Monumenta Germaniae Historica Katalog zur Aus-*

215 ⑧所収の *Wilfried Nippel*, *Der »antiquarische Bauplatz« Theodor Mommsens Römisches Staatsrechts*は、⑨所収の *ders.*, *Das Staatsrecht in der Diskussion—von 1871 bis heute*とともに、補訂のうえ前注127・*Nippel*・S. 235-277に収録された。

216 2003年11月の国際シンポジウムでの報告、*Okko Behrends*, *Pandektismus und Historische Rechtsschule in Mommsens Staatsrecht*は、報告集⑨への収録と前後して、*ders.*, *Mommsens Glaube Zur Genealogie von Recht und Staat in der Historischen Rechtsschule*, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen 1. Philologisch-historische Klasse*, Jg. 2005, Nr. 4, S. 323-389で増補版として刊行されたのち、*ders.*, *Zur römischen Verfassung. Ausgewählte Schriften*, 2014に収録された。

stellung der Monumenta Germaniae Historica in München …… vom 25. November bis 21. Dezember 2005, München und Berlin, 2005.

⑪ *Fritz Strum*, Theodor Mommsen. Gedanken zu Leben und Werk des großen deutschen Rechtshistorikers, Karlsruhe 2006.

⑫ *Iole Fagnoli/Stefan Rebenich*, Theodor Mommsen und die Bedeutung des Römischen Rechts, Berlin 2013.

⑬ *Jules Flego*, Theodor Mommsen: An Enduring of Rome's Past, 2017 [Thesis of Uni. of Sydney].

⑭ *Simon Strauß*, Von Mommsen zu Gelzer? Die Konzeption römisch-republikanischer Gesellschaft in „Staatsrecht“ und „Nobilität“, Stuttgart 2017.

⑮ *Wilfried Nippel* (Hg.), Theodor Mommsen: Wenn Toren aus Geschichte falsche Schlüsse ziehen. Ein Theodor-Mommsen-Lesebuch, München 2017²¹⁷.

〔2018. 9. 15. 本稿を補う続稿として、「ニープーア『ローマ史』序文の翻訳と訳注」本誌52巻（2019年）を予定している〕

217 本書は、編者による「序論」[S. 9-67]のほか、モムゼンの著作や講演や書簡などからの抜粋、研究文献のリスト [S. 344-349] で構成されている。ちなみに、『愚か者たちが歴史から誤った帰結を引き出すならば』という標題は、帝国議会議員であったモムゼンが1881年9月24日の選挙人集会でビスマルクの保護貿易政策を「いんちき政策 [Politik des Schwindels]」と批判した演説の一句である。これを捉えてビスマルクがモムゼンを侮辱罪で告訴したが無罪判決で決着したというエピソードが読書人に膾炙しているのか、編者はタイトルの由来に言及しない〔参照：ゲーチ・前注6の下・222頁〕。